

この三階段に就いて次の如くも言つてゐる。

「神は三の方法にて我々を引き上げる。第一には彼の被造物に依つて。次には魂の中に聞ゆる神の聲に依つて。」例へば永遠の眞理が神祕深くも自らを暗示するときであつて、それは屢々朝の睡眠に於いて起るのであつた。

(こは個人的經驗の興趣深き記録である。武者小路氏の「後に來る者」の四三八頁にも神聖な夢の經驗を記してゐる。)

第三には意志が全く服従(又は根絶)したとき何んらの抵抗なく、手段に依らずに、直接に。

「手段を通じて與へらるるものは甘味がない。面衣を透してみるのであり、斷片的に碎け、さうして苦痛のある針を忍ばなければならぬ。」

これで見ると第三段が意志や知力が全く純粹なる受身の状態である。

イングはかゝる寂靜的傾向は十四世紀の神祕家に否定出來ぬものである。勿論それと反對の格言などでもつて打ち消されてゐるやうに見えるがと述べて、意志、知力の動かない状態を危險なニヒリズムに近いものやうに考へてゐるけれども、かゝる無我の状態は決して單なる寂靜的非活動的のものではなく、最も深い活動的なる他力の極致を理想としてゐるものであると思ふ。それはアレキサンドリ

ヤのフィロンに於いても同様であつた。

タウラアには「凡ての差別相を絶する」といふやうな明かにデオニシウスの影響を受けてゐると言はれてゐる句もあるが、しかし他方に於いてはエツクハルトの學徒として「活動的意志」を高調した一人であつた。

「實際汝は潔くならんと欲するだけだけ汝は潔くあるのだ。」とルイスブルツクが言ひ、

「意志に依つて人は何事もなし得る」とはタウラアの言葉である。

「否定の道」が壞敗に導くのに反對して彼は言ふ「我々は邪惡を斷裁し惡い枝を手入して、伐らねばならないのである。しかし本性(自然)そのものではない。それはそれ自身に於いて善で聖なるものだから。」

「キリスト自身は決してこれらの人々(偽の眞正ならぬ神祕家)の語るやうに虚無には到達しなかつた。」

又瞑想に就いてもかく語つてゐる。「精神的悦びは心靈の食物である。さうしてそれは單に、實際の仕事なさをしむる爲めの營養として攝らるべきである。」

「懶惰は屢々悦んで彼らの仕事から免れ、さうして瞑想に耽らうとさせるものだ。實際の仕事にまで

到らぬ徳には決して身をまかせるな」

これらのエツクハルトの學徒らはすべて彼ら自身をば奮然たる「勇ましき生活」に送つた。敬虔らしき懶惰イビドレンスには決して辯護を與へなかつた。タウラアは云ふ。

「愛の働きは高遠なる瞑想よりもなほ神に喜みせらるるものである。」

美しいそして深い單純な言葉がある。それはほんとうの社會の一員としての理想を語つてゐるものがある。

「あるものは紡ぐことが出来、あるものは靴を造ることが出来る。そして凡てこれらは聖き靈の贈ものである。若しも私は僧でなかつたら、私は靴を作り得るといふ大なる贈物を尊重すべきである。さうして私は凡ての靴の型とあふやうな立派なものを造るやうに努力するであらうと思ふ。」

神ダイフイケイション化の課程

ルイスプロツクは次の如く「人々は自分らの被造物的なるものを超越して瞑想の生活にまでたかめられたるものは、神的榮光と一つになる。否その榮光である。(著者註。ヨハ子傳一三の三一、一四の一三、一五の八参照)

さうして彼らは神の光に依つて自らの中に次の事を見出すのである。それは即ち彼らは彼らの被造

的ならぬ性質と同じな單一なる根源となつてゐるといふことである。なぜなら、榮光が神聖なる有様にて量り知れず輝き出づるからである。さうしてその本質の單純テイブさに従つて彼らの衷に單純に様式もなく住むのである。

それ故に瞑想的の人々は彼らの受造的性質を越えて理性や差別の上に超越せねばならぬ。さうして彼らの生得の光の助に依つて斷えず見つめ、かくて彼らは變化せられさうして彼らが依つて以つて見るところの光と、彼らのみるところの光と同じ光となるのである。かくて彼らは永遠の像にまで到達するのである。彼らはその像に依つて創造されたものである。さうして彼らは神やすべてのものを差別相をはなれて、單純なる眺めに於いて、また神の榮光に於いて瞑想するのである。

これは人間がこの世の生涯に於いて得らるべき最も高遠なる、また最も益ある瞑想である。」

タウラアはまたその説教中(三位一體の祭の後の第十五の日曜の説教)にて

「王國は靈の最も内部の奧秘に座してゐる。種々なる修鍊を通じて、外なる人が内なる悟りある人に回心せられるとき、而してこの感覺の力と悟りの力との二者は、人間の本質の最中心に集つてゐるのである。——そは人の靈の見えざる深淵であつて、そこに神の像イマゲが宿つてゐる。——さうしてかく彼は自ら神の深淵の中に投じる。嘗つて彼は創造される前に永遠にそこに住つてゐたものである。」

(譯者注ヨハ子傳一七の五參照) かくて神は人間がかく確かに神の方へ投ずるのを見る時に神性は屈みてさうして赤裸々に純潔なる待ち望める魂の深みに下る。さうして被造的な魂をばその創造せられざる本質の中に牽き上げて改造する。そこで靈は神と一つになる。かゝる人が自らをかへりみる時に、彼は自ら神と思ふほど貴く見えるであらう。さうして彼が自らの中にあつたよりも千倍も貴く自らが見え、凡ての思想、目的、言葉、仕事などを認め、さうしてこれまであつた人の凡ての知識をすべて持つであらう。」

スーソーも、獨逸神學も同様の事をいつてゐる。イングはかゝる申合せたやうな「神の友」の人だちの「神化」に就いて大いなる杞憂をもつて次の如く記してゐる。

「この神化の思想は近代の人を駭かせるものだ。かくも熱心な謙虚な聖者達が殆どストイツクの人々の尊大傲岸を越えたる言葉を以つて自己を表現してゐるといふことは驚くべきことである。創物主と被造物との差別を消滅せしむることに終る組織の中には何か誤りがあるのではないかと思ふ。」

イングのこの批評は彼が汎神論の濶びと狭い自己が退いたときに神が働くのであるといふ純な他力の氣持に深い理解がないからである。イングの稱揚するところのヨブの神觀、「われ汝の事を耳にて聞きたりしが、今は目をもて汝を見たとまつる。是をもて我みづから恨み、塵灰の中にて悔ゆ」(ヨブ

記四十二の五)といふ神の尊嚴と人の卑下とは神觀の一面であつて、かかる濶ひのない神觀だけでは堪らない。神を我が父と呼び子は常に父の家に居るといふ優しきは到底起りえないものとなる。

耶蘇が我をみしものは父をみしなりと宣言した時に、イングの理論でゆくと「彼は神と己を等しくして神を漬すなり」といふことになる。「汝らの至高者の子となれ」汝らが地にてつなぐ所は天にてもつなぎ、地に解く所は天にても解くなり」「これを言ふものは汝らにあらず、其の中にありて言ひ給ふ汝らの父の靈なり」(マタイ十の二〇)「父は子によりて榮光をうけ給ふべし」これらの句は耶蘇の汎神論的色彩を現はしてゐるものである。魂の奥底にて父を知るものが、その子であるといつたとてたとひ明日にも父にそむくやうな行爲をするとも、神を認め、神のみ心を行つてゐるときに、否むしる神の愛が人々を通じて働いてゐるときに、神の子だといつたからとてそれは決して不敬ではない。漬神ではない。イングは更に恚ういつてゐる。

「しかし理想の幻が明かであればあるほど、我々が現實といふものに眼を向けるときに我々の自己卑賤といふものがますます深くならねばならぬ。且つ又神化といふことを完成された事實と見ることは矛盾である。無限との合一に至る過程といふものは *Progressus ad infinitum* であらねばならぬ。」これは尤である。しかし神祕家の神化や汎神論はかかる理論と矛盾するものではない。更にイングは續

してかく説明してゐる。

「かかる悲觀的結論はかくして説明がつくかも知れない。最高の本質は時間的のものでない。又我々の爲めに神が定めた宿命は或は起るかも知れぬといふ偶然事ではない。或る意味に於いて既に成し遂げられてゐるものである。それで我々の生得の権利を棄て、また我々のいと高き招命を逸して了ふところの道が實際二つある。一つは我々が我々自身を既に了解して仕舞つたと見做すことである。」

それは痛ましき欺瞞妄想だ。又他は我々がそれを到底得られぬものと放棄するのも又欺瞞である。

これらの眞理はタウラアや彼の兄弟神祕家達によく知られてゐたことである。彼らは聖者であると共に哲學者であつた。たゞ彼らが神との合一の教理を最も價值ある徳としてゐるところから我々に誤解をまねくのである。

タウラアはいふ。「人よ。汝らはいそ／＼として汝の凡ての思想や思ひ煩ひまた彼の罪をも捨てよ。言はばあの未知の意志の上に。おゝ愛する子よ！凡てこれらの敵愾心と危険との只中にあつて、汝は汝の根源と無の中に沈みゆけ。尖塔がその凡ての鐘と共に汝の上に倒れしめよ。否、凡ての地獄の悪魔が汝の上に襲はしめよ。天も地も凡ての被造物も汝に逆ひ、凡てが悪意を以つて汝を遇するとも汝は汝の無の中に沈め、さらばより善き部分が汝のものとなるであらう。」

これは一粒の麥地におちて死ななければ生命の芽が生えないことを意味してゐるのであるが、イングはここにも杞憂を抱いて焦う述べてゐる。

「前にも述べたやうに、父なる神即ちキリストの代りに絶對者としての神をば、模倣すべき對象として我々の前におくならば誤りが起つてくる。ルイスプロツクから引照した「あらゆる差別の上に昇る」といふかかる言葉を見出すとき、明かにかかる誤りを犯したのである。神祕家はイレネアスが未知の書より引照した次の言葉を心とめなければならぬ。「無限の父はみ子に依つて量られる」我々を力附くるところのものはこの量り知れぬものではなく、この量られたるものであるべきである。」

これはイングがあまりに狭いキリスト教徒である。

無限の父はみ子に依つて量られるとはキリスト一人ではない。父を知るものはみなみ子である、いつも狭いキリスト教徒の忘れてならない事は、地にあるものを父と呼ぶな。我を信するものは我を信するのではなく我を遣はしたものを信するのである。アブラハムはキリストの日を見て悦ぶともキリストは信仰の對象ではない。いつも父だといふことである。

人間が直接神より教はることが出来ないとしたならばキリストは地上に生長しなかつたし、キリストは人を導くことが出来なかつた。神祕家達が歴史的のキリストに餘り價值を置かなかつた事に不平

がましくいつてゐるけれども、イングの思ふほど彼らは地上のキリストを尊敬しなかつたのではない。彼らほど十字架のキリストを愛したものはあるまい。キリストが完全でも自分だちが完全でなければキリストに對して最もすまないものであることを知つてゐたので、彼ら^は王よくと云ふよりも、たゞ自己の完成に懸命であつた人々である。

最後にタウラアは如何に當時の誤れる狂信的な獨逸の神祕家を攻撃してゐるか。獨逸神學もまた同様に「誤れる光」に對して警戒してゐる。ルイスプロツクの「自由の兄弟」を非難せるものは已に前述しておいた。

タウラアは第三十一の興味深き説教にてこれらの狂信家の頑固な尊大や亂れたる行爲や無益なる怠惰を描寫してゐる。さうして次の箴言を與へてゐる。それは眞の神祕家と誤れる神祕家とを區別すべき標準である。

「さてこれらの敵の係締から如何にして遁るべきかを知らしめよ。誰も神の掟を守ることよりまた徳の修業することより免れることは出来ない。誰も眞の愛なしに神に對する渴望なしに空しくなつて神に自らを融合することは出来ない。誰も神聖になる事なしに、善き仕事をせず神聖になる事が出来ない。誰も善き仕事を爲す事を棄つる事が出来ない。誰も彼が憧憬し又は感じてゐないところの高さ

まで上げられることは出来ぬ。」

さうして其のあとに彼は耶蘇の模範が如何に彼ら凡ての誤れる思想を禁じてゐるかを述べてゐる。

タウラアは云ふ「愛は徳の始めであり、中であり、又終りである。」その本質は無私である。我々は水の一滴が太洋の中に失はれるやうに神の愛の中に我々自身を失はねばならぬ。

ヘンリー・スーソー (一二九五—一三六五)

Henry Suso (Heinrich Suso)

ハインリヒ・ズーゾーと呼ぶべきであらうけれどもヘンリー・スーソーと英語讀みにしておく。

スーソーは理智的にはエツクハルトの弟子であるけれども、その自叙傳は神祕説の心理にとつて最も重要な文献である。スーソーは然しルイスプロツクよりもよりよくエツクハルトを理解したと言はれてゐる。しかし彼の生涯と性格とは西班牙の神祕家、特に「十字架の聖ジュアン」と酷似してゐる。彼はよく次の聖句を口にした。「わが居る處に我に事ふる者もまた居るべし。」(ヨハ子傳十二、二六)それはキリストの苦難に従ふもののみが榮光のうちに彼と和合する事を得る望みを持つことを意味してゐる。

「十字架なしに冠もなし」(No Cross, no crown) はスーソーが其の文字通り嚴格に受け入れたところの生活の規範であつた。スーソーが彼自身の上に加へた苛酷なる滅罪の苦業は最も痛々しいもので讀むさへゾツとするものである。然しそれはたゞ苦業を事とするのとは全く異なるものであつた。スーソーの深い愛情と詩歌的な氣質とは隱遁的な僧院内の生活に堪えられなかつた。彼は強い人間的な愛や同情同感の念を持つてゐた。彼は始め僧院的生活を最高の生活として受け入れその理想に自分を一致せしめようとした。そして十七年間の嚴格なる修業の後に、彼の所謂「我儘なる肉體」は遂に從順なものになつた事を感じた。そして彼は最早や苦業をやめて、積極的な奉仕の生涯に這入つた。しかし別なものと苦しい十字架を猶も彼は負はなければならなかつた。それは彼の苦闘してゐた初期の彼を悦ばした精神的な慰安は屢々彼を離れ去つた時に彼は迫害せられ、また惡魔に憑かれたものとして謂はれなく非難せられたからである。

彼の晩年その死に先立つこと暫くにして彼は自傳を出した。それは最も興味あり魅力ある自叙傳である。スーソーの文學的才能も注意すべきである。多くの恍惚状態に達する神祕家に彼らの經驗をば「口にしがたいといふ」のが通例であるが、スーソーは活々とした描寫でもつてそれを記してゐる。

神を求むる端の喘ぎやキリストが彼の衷なる人に應答せし愛などはたぐひなく美しく純なるまた、

表現である。中世紀文學の寶玉に親しむ折ともならんことを希みて左に數節を抄録して置かう。

彼はその自傳の到るところに自分をば「永遠の智慧の僕」と呼んでゐる。彼は十八歳の時に神にまで完全な回心をなした。その前は彼はやはり他人の様な生活を營みたと死罪にあたる罪を避くる事で満足してゐた。しかしいつも彼は彼の心中にて咬まれる様な叱責を感じてゐた。しかし彼は段々に進歩すればよいのだ、「自分を樂に取扱はう」といふ誘惑が起つて來た。しかし「永遠の智慧」は彼に注意した。「我儘な肉體を征服するのになま優しい取扱をするものは常識が欠けてゐる。汝が若し凡てのものを棄てようと決心してゐるなら、よき目的の爲めに棄てるがよい。」この嚴格なる命令に彼は従つた。しかしスーソーの實行せるこの嚴格なる禁欲苦業を彼は神聖なる生活の必至な部分として他人に命令してゐない。次に出てたタウラアもさうであつて、スーソーよりは苛酷でなかつたが恚う云つてゐる。

「われ／＼はわれ／＼の慾情を殺すのであつてわれ／＼の肉や血汐ではない」と。さてスーソーはかかる修道を始むるや否や幻^{ビジョン}をみて悦びに溢れ勇氣付けられた。それは多くの禁欲的神祕家の普通經驗するところのものである。例へば聖アグネスの祝日に彼はかゝる經驗をなした事を記してゐる。別に取りとめて言ふほどの事もないのに、何やら恍然たる喜悅を感じた。彼の心は渴してゐたが、しかも満

されてゐた。それは永遠の生命の快美さが突然感ぜられたのであつた。瞑想の静けさの中に現前して感ぜられたのであつた。彼は肉體の裏にあつたか、肉體の外にあつたか彼は知らなかつた。

それが一時間半ばかり續いた。しかしその光の輝きはその後屢々彼にやつて來た。

スーソーの愛すべき性質は聖アウガスチンのやうに愛情の對象といふものを必要とした。彼の想像は永遠の知慧の上に集中せられた。而してその知慧は愛すべき婦人の姿をとつて聖書の箴言を人格化したものである。而してかゝる思想が屢々彼に起つた。「汝は確かに、このいと高き婦人が——彼女のことに就いては汝は屢々聞いて知つてゐる——汝の愛人となるかどうか、汝の幸運の試みをなさねばならぬ。なぜなら實際汝の荒れたる若き心は愛なしに堪えられないだらうから。」しかし幻の中に彼は彼女を見た。彼女の容姿は光輝を放ち智慧に満ち愛に溢れてゐた。彼女は天上に觸れており、深淵の底にも達してゐた。すべてのものを力強くまた優しく處理しながら涯より涯まで擴つてゐた。而して彼女は愛らしく彼の傍に來てもはやらかに彼に語つた。「わが子よ。おまへの心をわたしに與へよ。」この時に於いて灼熱の火の焰が彼の魂に灑がれた。すなはち彼の心は神の愛で燃やされたのである。而して「愛の標」として彼は其の胸に深くイエスの名をば刻み込んだ。それで其の文字の標が「指の關節位の長さ」で生涯残つてゐた。

彼はまた外の時に天使達の幻を見た。そして彼女の一人に魂の中に神の祕密な住居の様子を彼に示してくれる様に求めた。天使は應答へた。「悦ばしき瞥見を汝自身の中に投げよ。しかししていかに神が汝の愛すべき魂と愛の遊戯をなせるかを見よ。」彼は直にみつめた。そして彼の心の上の肉體が水晶の様に透明になつた。すると中心には永遠の智慧が愛すべき容姿をなして靜かに坐してゐた。

その傍には天上の憧憬に充ちて僕自身の魂が座つてゐた。そしてそれは愛らしくも神のそばに寄りそひ、神の腕もてその胸に犇と抱かれてゐた。

他の幻に於いて彼は祝福された師エツクハルトを見た。エツクハルトはその頃教會の爲政者らに非難され乍ら死んだのであつた。彼はすぐれたる光榮のうちであり、そして彼の魂は全く姿を化へて神の中にて神の如くなつてゐた。

祝福されたる師は彼の問ひに答へて言つた。「既にこの世から去つた人々が神の裏に如何なる様子で住んでゐるかは、いかなる言葉も言ひ表はし得ない。この世から去ることを成就する道は、自我に死することである。あらゆる人々と平靜な忍耐を把持することである。」

また最も感動すべき幻は幼きイエスなる聖兒の幻であつた。それは二月二日の聖燭節(Candlemas Day)の禮拜の時に彼に現はれたものである。彼の前に現はれた聖處女の前に跪いて彼は幼兒を拜し得

るやうに、そしてまた幼児を接吻することも許さるゝやうに彼女に願つた。彼女が幼児を彼に親切に差出された時に、彼は腕を擴げていとも愛されし幼児を受けた。彼は其の美しい小さな眼を眺めた、そしてその柔かな小さな唇に接吻した。

彼は此の天上の寶なる幼児の肢體を幾度もくゞ凝視した。それから彼の眼を舉げて、もろくゞの天を支ふる主がかくも偉大でしかもかくも小さく、かくも美はしくまた地上にてはかくも幼児の如くである、と喜悅の叫聲を擧げた。而して彼は神の幼児に深く感動して幼子とその母に返すまで歌つたり咽び泣いたりしてゐた。

また彼は恚うも言つてゐる。天使が遂に彼の苛酷なる苦業を止めるやうに忠告した時に、彼は數週間非常に快活に過した。そして彼が受けた痛々しい苦難を思ひ出しては悦びの爲めに咽び泣いた。しかし彼の安靜は直ちに破られた。或日、「戰鬪としての人生」に就いて思索してゐた時に、彼は愛すべき若者の幻を見た。その若者は彼に騎士の服裝を被せて、そして言つた。「お聴きなさい、騎士よ、是迄は汝は扈從であつた。今や神は汝をば騎士としようと欲した。そして汝は充分戰鬪するであらう。」スーソーは答へた。「あゝ、わが神よ！ あなたは私に何を成さうとしてゐられるのですか。私はもうこれで充分やつたと考へてゐました。わたしの前に置かれた苦難がどれほど多くあるか私に示して下

さい。」主は答へられた。「知らないのがおまへの爲めによい。しかし乍らこの三つの事柄をおまへに告げておかう。これまで汝は汝自身を懲罰した。こんどはわしがおまへを懲罰しよう。そしておまへは公けに、おまへのよき風聞を失ふだらう。次におまへは愛と忠實とを求めても、そこに裏切と悲痛とを見出すであらう。第三に、これまでおまへは海中の魚のやうに神の甘き恵の中に浮游してゐた。こんどは俺がおまへから引き退くであらう。そしておまへは餓死し乾枯びるであらう。汝は神からも世界からも見棄てられるであらう。而して汝はみづからを慰むる爲めに手にとるところの何者も無益であらう。」スーソーは自ら大地に身を投げて腕をば十字架の形に伸ばして、かゝる大なる災難が彼の上に降らないやうに苦惱しながら祈つた。すると一つの聲が彼に聞えた。「悲しむことはない。わしがおまへと共に居る。そしてそれに打ち勝つやうにおまへを助けるであらう。」

その次の章にいかにかこの幻と豫感とが確められたかを示してゐる。彼の企てた旅行は多くの危険に陥つた。盜賊や修道僧を憎む所の不法な人々に惱まされ、虐殺者との冒險は單純さを以つて生々と述べられてゐる。スーソーは彼の生涯を通じて全く人間らしくあつた。それが彼を生かしてゐる。

彼の歩むべき道は苦しいものではあつたが、しかし豫言せられたやうに更に苦痛な試練は彼を待つてゐた。傳道の働きに於いて彼は墮落せる婦人を改心せしむるやうに骨折つた。彼は一人の婦人の不

眞實を看破つたのでその婦人は偽はれる懺悔をなして彼に復讐した。その醜聞は殆ど彼を滅亡せしめるものであつた。その偽はれる婦人が捨てた嬰兒をば彼の許へ連れられて來た時の記事ほど感動せしめるものはない。スーソーは彼の腕にその嬰兒を抱き上げて愛に充ちた言葉をかけ乍ら咽び泣く、そして嬰兒は彼を見て微笑んでゐる。

災厄がますます大きくなるにも拘はらずその子が見棄てられて餓死するのを見るに忍びず扶持を拂ふことを主張した。しかし幸にも彼の教團長が充分なる詮索の結果、彼に罪なきを證明した。而して彼の晩年は平和で幸福であるやうに見えた。

彼の自傳の最後の一章は、彼の精神的な娘エリザベス・ステイグリンとの興味ある會話が記されてゐる。彼女は神祕思想の曖昧な教理を理解しようとして欲したのである。彼女は三位一體の教理に就いて質問してゐる。彼はエツクハルトの神學の概論を註疏してゐる。しかし彼女はエツクハルトの大膽な句を記憶してゐる。「完全なる合一に達する爲めにはわれ／＼を神から剝奪して、そして内部に輝く光の方へ轉じなければならぬと言ふことですが――」。スーソーはそれに答へた。「若しもその言葉が、その字義通りの意味にとられるならそれは誤りだ。しかし神は單に應報したり責罰したりするほかに何もしないやうな普通の信仰は完全なる愛からは捨てられなければならぬ。この意味に於いて精神的な人は

凡俗の人に依つて信仰されるやうな神から彼自身を剝奪するのである。

合一の最高の状態に於いては心靈は分離された人格の標記しるしを有つてゐない。なぜなら祝福を與ふるものは單一な神格ではなく三位が一體となれるものである。」

次に彼の弟子は訊ねた。

「天は何處にありますか。」

「智識的に何處と云はば、本質的に存在するところの名付くべからざる無である。我々はそれをさう呼ぶべきである。なぜならわれ／＼はいかなる様式の下にもそれを認識することが出来ないからである。しかしそれはわれ／＼に無であるやうに見えるけれども、それは無よりは何ものかであると呼ばれる方が至當だ。」

かくてスーソーは但書を以つてデオニシウスに従つてゐる。弟子なる乙女は彼に三位一體の自己發展の形を示してくれるやうに尋ねてゐる。然し彼は彼女に池の中に石を投じた時に現はれるやうな同心圓を描いて見せた。そして彼は付け加へて言つた。「しかしこれは、黒い沼が美はしい太陽に似もつかぬと同様に、形式なき眞理とは似もつかぬものである。」その後暫くにしてこの乙女は永眠した。そしてスーソーは彼女を幻に見た。光輝を放ち至上の喜悅に満ちて、いかに彼女は彼の教に導かれて

彼女は永久の祝福を見出したかを彼に示した。彼は自分に歸つた時に、「あゝ神よ！ たゞ汝のみを求めし人は祝福されてゐる。悦びて苦しみに満足しよう。汝はその苦痛に對してかくも報ひたまふ。神はこの處女に於いて、而して神の愛するすべての友に於いてわれ／＼を悦ばしめ、また永遠に神の聖きみ顔をたのしむことを許したまへり。」かくてスーソーの自傳は終つてゐる。

「獨逸神學」

Theologia Germanica

未知の著者に依つて記されたテオロギア・ゲルマニカは量に於いては一小冊子に過ぎないけれども、中世紀に於ける最も貴重なる文献の一たるを失はない。眞の敬虔さに充されたる點に於いて世界に數ある本ではない。マルチン・ルーテルが「聖書と聖アウグスチンを除けば予はいかなる書よりも神、基督、人間及萬物についてこの書以上に教訓を受けなかつた。」と讃辭を獻げてゐるほどである。イングは「或る意味に於いてア・ケンピスの有名なる著、「基督に倣いて」よりも更に優れるものである。なぜなら獨善的な個人主義がなくなつてゐるからである。」といつてゐる。

この書の思想及びその零圍氣は全くエツクハルト學派である。著者はよくエツクハルトを理解してゐたやうである。タウラアに近く、屢々彼をば權威者として對照してゐる。

神祕家は一度は經驗しなければならぬやうに見える魂の暗夜に就いて、その第十一章に美しく記されてゐる。基督の魂は、天國に昇る前に、必然地獄に下らなければならぬ。人の魂も然うである。人は神や被造物より受けた凡ての慰めや親切にふさはしくないものとして自己を見出すとき、全く深い謙遜と卑下とに沈み、地がこれ以上自己を支持する價值無しと思ふ。さうしてあらゆる被造物が自分に敵視しあらゆる苦痛を加へてもそれは當然だと思ふ。それさへも自分には値しないものだと思ふ。「滅せしめよ！ 死せしめよ！ 予は望無しに生く、内からも外からも、予は呪はる。何人も祈る勿れ、予の救はれ得るを。」

しかしながらかく望みなく捨てられてこそ神は彼を拾ひ上げるのである。やがてその地獄は消えて天國が続くのである。

更に第廿六章に、「基督は言ひき『我が心いたく憂ひて死ぬるばかりなり。』その死は彼の肉體的死を意味す。(換言すれば、彼がマリヤより生れし時より、十字架の上に死するまで彼は一日も樂しき日を有せざりき、只だ悩み、悲哀及び衝突のみなりき。)それ故に彼の僕らがその主人の如くあるは正當にして道理がある。基督はまた言ふ、『心の貧しき者は福なり。(換言すれば眞に謙遜なる人々)天國は

すなはち其の人の有なればなり。』さうしてわれらは、神が人となりしところに、眞の心の貧しさを見出す。徹底せる謙遜と心の貧しさと、謙遜なる遠慮深き性向と、秘れたる悲哀と愁傷とにて壓されたる心とが、この死ぬべき生命が續く限りは、基督にもまたその眞の弟子にも必ずなかるべからざるものである。徒らに夢みて斯く思はざる者は欺かれ戻るなり。』といつてゐる。かゝる言葉は中世紀の禁欲的な若くはストイック風な感じを惹き起すものであるけれども、しかしながら遂には十字架を負はねばならぬ肉に對して、詩を以つて宣告した様な美しき言葉である。けれども第三十八章にては「基督は報酬の爲めに彼の生活を送つたのではなく愛よりであつた。さうして愛はかゝる生活を軽くし、かゝる生活の凡ての困難を取り去る。その結果かゝる生活は快くそして悦んで繼續されるのである。……それ故に基督は『わが軛は易くわが荷は輕ければなり』といつてゐる。これは此の貴ぶべき生活を愛する愛より來るものである。……しかし自己の仕事の終らんことを願ふ者は備はれ人だちの確かな證據である。神は千人以上の備はれ人よりも、眞に基督の生活を愛する一人を悦ばれる。』といつてゐる。(佐藤繁彦氏の譯より拔萃)

この著者も著しく愛を高調してゐる。愛がないならば知識も光明も益するところがない。惡魔をみや、彼は善惡、正邪を辨へながら、善に對して愛を有しないから善も善とならない。また知識も愛に

導かれなければ、少しも役に立たないものだ。さうしてこの愛の人こそ人をして神と一たらしめるものであるといつてゐる。(第四十一章)

罪惡に就いては「罪とは被造者が神の意志するとは異りまた神に背きて意志することに過ぎない」(第三十六章)といつてゐる。

ラルマン・メルスウイン

一三〇七—一三八二

ラルマンはその生地、ストラスブルグを中心とする神の友の團體の指導者であつた。彼の生家は市の有力なる豪家であつた。若くして銀行營業家として多くの富をつくり、凡てが幸運であつた。

彼は良心の鋭い、また神を恐れることの多い人であつた。彼は四十歳で職業を止してフランシスカンの第三教團のやうなやり方で神に仕へる決心をした。しかし彼は巨滿の財産はそのままに神の爲めに使用しようとして所有してゐた。彼の妻のピーテンハイムのゲルトールドといふのは敬虔な婦人ではあつたけれども「神の友」で呼ぶところの「惠の光」を未だ受けるには到らなかつた。

彼はその斷然として獨身で暮す決心をなした。彼が「恍惚」の最初の經驗をしたのは、神への奉仕

の爲めに全資産を献げる決心をなした時であつた。それから彼の「新生涯」がひらけたのであつた。しかし彼は尙怖るべき内部の誘惑に苦しんだ。さうして彼の邪惡な性情と、彼の「嫌惡すべき肉體」を嚴格なる苦業に依つて征服しようと努めた。ジョン・タウラアは一三四八年の聽懺悔僧となつた。さうして彼にかゝる肉體の虐待を止すべきことを薦めた。メルスウインはかゝる苦業の時期を経て今度は聖靈の悦びと平和の中に這入つたのであつた。

彼は「神の友」の單なる實行家であつた。彼にはエツクハルトやタウラアより受けしやうな思想はなかつた。正直で本氣ではあるが、かゝる單なる實行家に依つて「神の友」の運動の低級になつて往つたことは事實であつた。

こゝにはたゞ彼と「オーベルランドよりの神の友」との共著の形になつてゐる神祕的文献の集録に就いて一言するにとどめるであらう。

「ネーベルランドよりの神の友」なる人に就いては史家の意見は一致してゐない。此人はバーゼルのニコラスといふ人であるといふ説になつてゐた。ニコラスといふ人はベカールドであつて異端の厄を避くる爲めに其行動を秘してゐたが、遂に一三八二年捉へられてウインナに於いて焚殺された人である。しかし史家の説では「オーベルランドの神の友」はこれと同人ではないといふことである。多くの

史家の一致するところは彼は實在の人ではなく、メルスウインの理想を現はす假想の人物であるといふことである。ルーファス・ジョーンズは「オーベルランドからの「不明の一大人物」といふのは理想的な性格——つまり十四世紀の「天路歷程」の「クリスチャン」である。神がいかにか一人の靈的に鍛鍊せる俗人レイマンに依つてこの世と教會の爲めに神の仕事をなさしめたかを表はさうとしたところのものである」といつてゐる。

メルスウインとこの假想の人物との著となつてゐる神祕的文献は注目すべきものである。

第一輯は十六の論説からなつてゐる。さうしてそれらは「大獨逸の備忘録」といふ書の中に集録されて、ストラスブルグの大學と圖書館とに保存されてゐるといふことである。十六章は左の如くである。

一、二人の十五歳の少年、二、幽閉せられたる騎士、三、ウルストラとアデライダの物語、四、パバリヤの二人の聖き尼僧、五、精神の階段、六、精神の梯子、七、心靈中の火花、八、教團の幼い兄弟たちの爲めの學課、九、この世の智慧を與へられたる人の物語、十、クリスマスの夜に「神の友」に與へられたるひとつの啓示、十一、若きこの世の青年、十二、「神の友」の人々に送るいましめ、十三、キリストのみ旗の書、十四、三つの營舎、十五、七つの恩惠の働き、十六、先立つ恵みに就いての

書、第二輯は「ラルマン・メルスウインの新生の最初の四年間に就いての書」と「五人の男の書」とである。

共同生活の兄弟團

十四世紀の末より第十五世紀にかけての神祕説は次第に思索より遠ざかり、デオニシウスやエリゲナの影響は薄くなつた。この時機の神祕家は教會の惱める魂に對する無關心とその腐敗とを哀しんで見えざる靈の教會の建設に對して力を盡したのであつた。實際的に、否マルタ式に（エツクハルトの意味したマルタの様に理想的ではなかつたかも知れないが）キリストの模範に従ふ事を努めた。兄弟姉妹の教化、子供らの宗教的教育などに意を注いだ。その指導者には、フランスのグアスン、イタリアのカザリン（シエンナの）スキューデンのブリツゼット、英國のウォルター・ヒルトンとレディ・ジュリアン、等であつた。殊に和蘭は恚うした「新しい敬虔主義」の發生地であつた。「神の友」の後繼ともいふべき「共同生活の兄弟」といふ團體はルイスプロックの弟子のゲラルド・グロオトによつて創められたのであつた。ルイスプロックは「神の友」と「共同生活の兄弟」なる團體から出た人であつた。

ゲラルドに就いても記すべきことは多くあるが、しかし彼の一生は十八世紀のウエスレイのやうな

大きな説教家であつたと思へばいゝのである。さうしてゲラルドは教育といふことに非常に重きをおき、彼の生地和蘭のデヴェンテルには二千人を容るゝ學校が建てられたほどであつた。この學校からかの著名なるデンドラス・エラスムスが出たのであつた。

トーマス・ア・ケンピス

Thomas a Kempis 1379—1471

我らはトーマス・ア・ケンピスとその著「基督に倣ひて」に就いて一瞥するであらう。トーマスの本名はヘーメルラインといふのである。一三七九か八〇年にコロニスから四十哩ばかりのケムベンといふ邑に生れた。この邑の名からア・ケンピスと呼ばれるやうになつたのである。

一三九二年にかのデヴンテルの「共同生活の兄弟」の學校に學んだ。この時學校はフロレンチウスといふ人が指導してゐた。トーマスはこの師に就いて愛すべき記録をのこしてゐる。「ある日合唱の折に彼（フロレンチウスのこと）の近くに私が立つてゐた事があつた。さうして彼は私共の持つてゐる頌歌集に依つて、さうして私共と一緒に歌つた。そしてすぐ私の後に立つてさうして彼は兩手を私の背の上に置いて身體を支へるのであつた。私は彼が私のやうなものになした名譽に驚きつゝ、敢へて

身動きせずにつかり直立不動をしてゐた。」

その後トーマスは一四〇〇年に聖アグネスの寺院に這入つてそこに六十年を送り一四七一年に死んだのである。少し酷評ではあるが「基督に倣ひて」に就いて大體イングの批評を紹介しておく。確かにこの書、並びにトーマスの隠遁生活にはルイスプロックにみるやうな深い人間味の少なくなつてゐるのは事實である。

「基督に倣ひて」の書は屢々基督教神祕説の最も美はしき花であるかのやうに語られてゐる。それ故にこれに就いて一言して置かなければならない。

嚴密に言へばこの書は神祕的な論説ではない。これはむしろ中世紀に於いて發達せる修道院的基督教の果實である。然し此の書の内容には何んら近代哲學の開拓者たらしめたエツクハルトや又は十四世紀の神祕家をして宗教改革の先驅者たらしめた獨創的内容はない。さうして神祕思想の獨特の本質といふものを殆んど述べてはゐない。さうしてこの書の表題は單に第一章にのみ當嵌まるべきものであつて全部に對しては不適當である。

全篇を通じてこの書は隱遁者及びその生活法の辯護であるやうに思はれる。自己否定、この世の放棄、祈禱、冥想、全き謙遜、(遜卑)貞潔、これらが此の世の與ふる何ものよりも高き悦びと淨き平和

とをもたらす道である。この書中にはローマのストイツクの人々の言葉を思ひ出させる。それは彼らを傷ふ世から離れることが主なる目的であつた。

この世に交りて、しかもこの世のものならぬ生活といふキリスト教を解せぬ。

十五世紀の修道僧らは前世紀の僧等よりもよほど退歩してゐた。修道院はもはや學術や活動の中心ではなくなつてゐた。もはや宗教的教團はその使命を果して了つたのである。人々はみんな獨善主義に傾きつゝあつた。彼らはひとりてキリストの十字架を眺めて泣きかなしんだ。

けれどもフランスのやうにはだして戶外に出で、心の惱めるもの、貧しきもの、重荷を負へるものと一緒に泣く事をしなかつたのである。目に見ゆる兄弟を愛せずして如何にして目に見えざる神を愛し得んやといふヨハネ第一書を再び讀みなほさねばならぬ深き心情の宗教が起らなければならぬのであつた。

彼らに欠けたるものは、深き人類愛である。人類に對する無關心といふことは概して中世紀一般の弱點であつたやうに思はれる。

彼はプラトリーからトマスアキナスまでの哲學を輕視し、依頼しなつたばかりでなく、社交、會話といふものにまで罪に陥入る恐れありとして眼を瞑ぢたのである。さうして「人々の間に交はれば、

いつでも私はより人らしくなくなつて家に歸つてくるのであつた。」といふセネカの可憐なる格言を稱揚して引照してゐる。

かゝる氣持は弱き性の人にとつて同情すべき經驗である。孤獨を愛し、人間嫌ひといふことは同情すべきことであるがほむべき事ではない。人間を愛するからこそ、人間嫌ひになるのかも知れぬ。けれどもそこには人類に對する愛が足りない。この世をありのままに見つめて、しかもこの世を愛することが眞勇だと云つてゐるロマン・ローランのやうに、罪人をも、頑固なるものをも愛の對象として彼らにパツシヨネートな愛を感じ彼らと隔離する事が出来なくなるのが、本當のキリスト教徒の氣持だ。

中世紀の修道院やトマス・ア・ケンピスは世は誘惑多きままにこれを避けよといふのである。しかしそこには「我れ汝らを遣はすは羊を狼の中に入るゝが如し。鳩の如く溫和、蛇の如くさとかれ」といふキリストの燃ゆるやうな活ける信仰がないのである。ア・ケンピスの思想は一言にして言へばプラトの所謂「Shell-fish」「殻の魚」である。(貝の意味であつて「Selfish」利己的といふ音に通ず) 甲殻をかぶつて世の罪を避けるのはよいけれどもなんといつてもそれは獨善的たるを免れぬ。

それ故にこの書は部分的にはよき教訓があるけれども、全體としてはキリスト教徒に薦むべき良書

であると言ひ切るのは躊躇しなければならぬ。

心の謙遜さ、單純さ、純潔さはたぐひなく美しくこの書に言ひ表はされてゐるけれども、かゝる恵みは目的として求むべきものではない。神を、自然を、人間を眞實に愛するものにおのづから與へられる恵みであることを忘れてはならない。

ウォルター・ヒルトン

彼はツールガルトンのカノンであつた。而して「完全の階級」といふ神祕的論説の著者である。

「生活には二種ある。一つは現實的生活であり、他は瞑想の生活である。しかし後者には多くの階級がある。瞑想の最高の状態は人がいつも享受してゐるといふわけにゆかぬ。それはたゞ彼が訪れるしばしの時のみである。かゝる最高の瞑想はたゞ神の欲し給ふときのみ與へられるのである。どんな種類の幻にせよ、啓示にせよ、それは眞の瞑想ではない。それはたゞ第二義的だ。悪魔が擬造し得るからである。これらの欺瞞に對して唯一の防護はかゝる幻が神に對する敬虔さや謙遜さ、又は他の色々の徳を助けるか妨げるかを考へることである。」又彼はかく明かにも言つてゐる。「瞑想の第三の階級には理性は光明に變はり、意志は愛に化せられるのである。」

「精神的な祈り——といつてもやはり言葉で唱へるものであるが、決り文句のことではない——は瞑想の第二の階段に属する。かゝる修練に於いては、人はその心霊が愛の恵まれたる劍に依つて傷つきつゝひどくその肉體を消耗させる。この世の最も姦惡な肉慾的な人も若しか彼がこの鋭き劍に一度強く觸れるならば、やがては眞面目な律義な者になるであらう。

祈りの最高のもは沈黙の祈りである。聖パウロも言つてゐる。「我は靈をもて祈り、また心をもて祈らん」(コリント前十四—十五)

しかしかゝる最高の祈りは凡ての人に要求するものではない。「たゞ純潔なる心がかゝる祈りをなすに適しいのである。」

我々は第一にキリストの人情ヒューマニテイの上に我々の熱情を向けなければならぬ。我々の眼は神性のくもりなき光を見るに耐へないから「我々は此世界にある限り、彼の人性マシフッドの影の下に生活しなければならぬ。」聖パウロは回心してから始めは基督の人情と受難に就いて人々に説いた。しかしあとでは神性に就いて、つまりキリストが如何に神の能力と智慧とであるかを説いてゐる。

「キリストは福音書の諭語の中の一枚の銀貨のやうに見失はれてゐる。しかし何處にか。それは汝の家の中に於いてだ。つまり汝の心霊の中に於いて、汝はローマや、エルサレムに彼を探しにゆく必要は

ない。彼は汝の心の中に眠つてゐるのだ。かつて嵐の時、船の中に眠つて居られたやうに。彼を求むるはげしき叫び聲もて彼を目覺せ。だがより多く汝は彼に對して眠つてゐると俺は思ふのだ、彼が汝に對して眠つてゐるよりも。擾亂する喧噪を去らせよ。さうしたら汝に彼の聲が聞えるだらう。

とはいへ第一に汝が汝と共に擔うてゐるところの罪の姿を見出せ。しかしそれは形體を持つてゐるものではない。實在するものではない。たゞ光と愛の欠けてゐることだ。それは誤つた過度の自己の愛だ。それから凡ての死に價する罪が流れ出づるのだ。」

「美しくて粗野なものは人の魂だ。——外部は獸のやうに粗で、内部は天使のやうに美しい。」「しかし外なる官能的な人は罪の姿を擔うことが出来ぬ。けれどもそれから生れてゐるのである。(それを擔つてゐるのはもつと内なる人なり。キリストが罪を負へるやうに)眞の光は神の愛である。偽りの光はこの世の愛である。」

彼はまた神祕的な暗黒といふ事を言つてゐる。「夜が暗ければ暗いほど、ますます眞の光、朝日が近

さ。かゝる暗は無ではない。現世的の事に就いてはもはや煩はされずにな、神的のことに忙しいのである。

「やがて夜は去り、日光はおぼめきそめる」「閃光はエルサレムの城壁の隙間より輝きそめる。だが汝はそこまで到らない。」

ノールウイツチのジュリアナ

(一三四三—一四四三?)

中世紀の英國神祕思想家のうちでもう一人著明なものは、ノールウイツチの近在のカアロオのベネチクト派の尼僧であつた。しかし彼女の生涯の大部分はノールウイツチの聖ジュリアンの寺院の草庵で送つた。

彼女は三十歳頃に色々の默示を受けた。彼女はその幻をみた有様をば明かな確かさを持つて記述してゐる。

従女は十字架の上の主をば肉眼で見たいと熱心にあこがれてゐた。彼女はこの世から乳離れし、彼女の魂の感覺を敏活にする爲めには「死ぬばかりの痛ましき病苦」をも厭はないと祈つた。病苦はやつて來た。さうして幻を見た。といふのは人々がもはや彼女が死ぬのだと思つたので、彼女の前に十字架像を指示した。するとその十字架の上の像が生けるキリストに變つて彼女に見えたのであつた。

其の後にも彼女は睡眠中に屢々幻をみたが覺醒中にも多く見た。その最も純粹であり、また確實なものは魂の靈的な部分へ「神の侵入」*Divine il-lapse* に依つてなされるのである。しかしして惡魔もこれらを擬することが出来ない。

ジュリアナは全く正直で心が確かであつた。彼女の小著の大いなる魅力は日當りよき幸福さと望みとのやうなものであつて、それがいづれの頁にも輝き、さうして彼女の受難せるキリストに對する優しき情愛、しかもそれはなんの病的なところもない敬虔さに充ちてゐるものである。この別に教育もなかつた一少女が哲學的な神祕家の思索的な教理といふものに心情の論理で直ちに導れてゐるのは甚だ興味深いものである。

磔刑されたキリストは彼女の歸依の對象であつた。彼女は「天にいますキリストの父を上げ」といふ理性の申出に耳傾けるのを拒んだ。さうして彼女は「いゝえそれには及びません、キリストこそ私の天ですから、わたしはキリストに伴はずに天にゆくよりは審判の日までその苦痛の中にある方が、むしろ望ましいのです。」

「耶蘇よりも他の天を私は好まない。たとひそこは私に天の祝福を與へるとも。」

彼女は祈禱に就いてもよき考察を述べてゐる。かかる文章より極く短き斷片を示すならば「感謝も

また祈に属する。感謝は大いなる尊敬と愛すべき戦慄^{おのの}とを以つてわれらの善き主がわれらに鼓舞したまひし仕事にまで、内面的に悦び感謝しつゝ一生懸命に振向くところの眞の内面的の悟りである。さうして折々、溢るるばかりとなつて『善き主よ。大いなる感謝が汝にあれ、汝こそ祝福せられんことを』と叫び出すのである。」

ジュリアナは獨逸神祕家の所謂「魂の火花」に相應するものを述べてゐる。「わたしは確かに見、また理解した。救はるべき魂には、どれにでも神らしき意志がある。それは決して罪に同意しないものである。その意志は、邪惡を爲し得ず、たゞいつも絶えず善を欲し神のみ前にて善を行ふより外に仕方がないほど善良なものである。われ／＼凡てはかゝる祝福された意志をば全體としてわれらの主イエス・キリストの中に持つてゐる。」

かかる言葉はかのネオプラトーン派の人々の魂には高い部分と低い部分とあつて、高き部分は決して罪にそむくことのないものだといつてゐるのを思ひ出させる。

彼女は幾度も／＼次の言葉を繰り返して言ふのであつた。それは主が幻にて彼女に告げたものである。

「私はおまへを愛する。おまへもまた私を愛する。さうして我々の愛は決して二つにならないであらう。」

シエンナのカタリナ

一三四七—一三八〇

カタリナはチャーミングな快活な少女であつた。六歳の頃から沙漠の隱者になるといふやうな熱望を持つてゐたといふことである。子供の時から既に恍惚の經驗を得、キリストの幻に心奪はれて小さな兄弟が手で彼を叩いて呼び起さなければならなかつた。さうして七歳の時に、處女をば神に捧ぐる誓ひをなしてゐたといふことである。十四歳の時にドミニック派の黒と白との外衣をつけてドミニック派の第三教團に入つた。彼女の父は彼女に結婚をすゝめ、又この世の生活にひき入れたい爲めに彼女の孤獨なる瞑想を妨げたときに、彼女は如何に煩勞の中にも心の中にはただ神とのみなる孤獨を抱いてゐることが出来るかを聖靈が彼女に教へたのであつた。

一三七〇年に彼女は神祕的死を味つた。然し神の命令で再び生命に戻つて來た。神はひろく魂を救ひ、福音を必要とするところへ傳導にゆくべきことを命じたのであつた。彼女は「彼女自身の悦びの爲めでなく神に仕へることの甘美さ、彼女の意志や利益の爲めでなく、純なる愛から隣人に仕へること

との甘美さ」を美しく述べてゐる。

彼女は又異常なる恍惚状態に於いてキリストの許嫁となりし経験をなした。さうして彼女はどんなことを強ひられるとも「男らしくためらひなしに」天上の王の花嫁にふさはしく處すべきことを決心してゐた。後の恍惚に於いては彼女はアツシジの聖フランシスのやうに聖痕、即ちキリストの五つの傷の烙印をその身體に受けたのであつた。其の折りの経験を次の如く記してゐる。

「私は磔刑された主が大いなる光の中に、私の方へ下りて来るのを見た。……すると主のいとも聖いみ傷の痕より五つの血のやうに赤い光が私の手と足と心臓の上に射してくるのを見た。それで、この神祕を受けつゝ私は直ちに叫んだ。「あゝ主よ、我が神よ、お願いです。どうぞ私の體に人目に見ゆるやうな痕はつけないで下さい」しかし、かく私が談してゐるうちに、その光が私に達するや否や、それらは血汐のやうに赤い色が赫灼たる光輝に變り、そして光耀たる光となりて、私の手と足と心臓の五つの場所に觸れて來た。これらの五つの場所に耐へ忍んだ痛苦は非常なものであつた。殊に心臓の中はひどかつた。それでも、主が新しい奇蹟を働き給はなかつたならば、私の身體はかゝる苦惱に耐へられないやうに思はれた。」

彼女は教會に對して熱心さを以てその墮落を憂へてゐた。さうして屢々要路の人や法王自身へも手

紙を認めてキリストの模範に従ふべきことをすゝめてゐる。

第六講

實踐的にして敬虔なる神祕思想家 (第十五紀以後)

— 聖テレザ — 十字架の聖ジュリアン — ライマの聖ローズ — ヤコブ・ベーム — ガートルード・モリアー —
 バスカル — ミグエル・ド・モリノス — ギヨン夫人とフェ子ロン — スエデンボルグ — ノフアリス —

聖テレザの生涯

St. Teresa (1515—1582)

聖テレザの生涯は彼女の遺した教訓よりもつと興味の深いものである。彼女は高潔なるスベエンの先祖達の最も良き性質を持つてゐた。即ち單純と卒直と而して逡巡ふ事なき勇氣とである。さうして彼女の克己的な生活の記録は無数のユーモアの閃きに依つて快活なものにされてゐる。それは彼女の性格をして最も愛すべきものとしてゐる。彼女は幻を見る人として著名である。彼女が屢最も代表的な神祕家の一人として見られたのは主に彼女が幻を見たことによるのである。然してこれらの働き

は彼女の生涯の中で多くの時期を占めてゐるものではない、それらは屢尼寺生活の最初の二三年間に起つたものである。それから又四十年代五十代の間にも再び現れた。それらの二つの時期の間には一つの長いギャップがあつた。彼女の最後の二十年間は實際修道院を建て又はそれらを見舞ふ事に費されたがその時には彼女は最早幻を見なかつた。かゝる經驗は修道院の他の多くの聖者達と共通なものである。精神的な慰めは若き修道者を勇氣付ける爲めに屢與へられるやうに見える。それからかゝる外部的な慰めは奪ひ去られ而して干枯びたやうな暗い心の長い時期を経てまた戻つて來るのである。然し晩年にはその性格も定まるし、その想像力も鈍くなるので幻は日常生活の中には消え去つて行くのである。聖テレザの幻に就いて考へて見ると彼女は全く正直で而して眞實であつたといふ事を我々は記憶せねばならない。また彼女の精神的な特權を彼女の上役の者は甚しく嫌ひ且つ疑ひ而して彼女の敵對者は嘲笑つた事や、同時にまたそれらによつて彼女の名聲と感化とを與へた事や又彼女は屢實際見たかどうかと疑つてみた事や又彼女の傳記者等が彼女自身の記述よりも一層怪奇な又物質的な性質をそれらに付與したといふ事を記憶すべきである。

彼女の自ら云ふところによると四十一歳の頃セント・オーガステンの懺悔録を読んだ事が彼女の生涯の廻轉期である。「私が彼の悔心の條に來た時に如何に彼が園の中で聲を聞いたかを讀んだ時にそれ

が即ち主が私を呼んだかの如くであつた。」と彼女が云つてゐる。彼女が再び幻を見初めたのはこの後であつた。幻といふよりも寧ろ總ての能力が止つて精神の現前の突然な感覺を持つたのである。これらの恍惚に於いて彼女は一般に神の語り給ふのを聞くのであつた。「其等の言葉は肉體の耳で聞いたのではなかつたけれど、非常に明瞭で訊き誤る事はなかつた。それらは想像で作られた言葉とはまるで似てもつかかなかつた」と彼女は言つてゐる。彼女は最も注意深く彼女の見たキリストの幻を記述してゐる。最初キリストは彼女の祈つてゐた間彼女の傍に立つてゐた。そして彼女が肉體の眼でなく魂のそれでもなく彼を見、彼の言ふのを訊いたのであつた。それから順序を追ふて「彼の神聖なる人生は遺憾なく私に表現はされた。恰も復活の後に寫した肖像の様に。」此の最後の句は彼女が愛情を以つて見つめた聖畫が彼女の幻の源ではなかつたかといふことを暗示してゐる。彼女の上役の者はそれらは欺瞞であつたといふことを彼女に説き伏せようと試みた。然し彼女は答へていふには「今私に話し終へたばかりの人を其人を私はよく知つてゐたのですが、あの人でなくて唯私が空想したのだといふことを彼等が知つてゐると私に告げたなら疑もなく私は自分の見たところのものよりも彼等の言ふことを信じなければならぬ。然し今話し終へたばかりの人が、彼の大きいなる愛の印として彼のあとに或る寶石を残して行き而して私が貧しくあつたのに富める自分を見出したならば私は欲するとも彼らの言つ

たことを信ずることが出来ない。これらの寶石を私は彼等に示す事が出来る。何となれば私を知つてゐる總ての人が私の魂の變化したことを明らかに見たのです。その變化は甚しくそして手に觸れられるほどであつた。」テレザにとつての疑問はこれらの現れは主觀的であつたか、客觀的であつたかといふことではなく、其等は神によつて贈られたか、悪魔によつて贈られたかといふことであつた。彼女の傳記の最も美はしき一章に恐らく目下の觀察點から最も興味深いものがあるが、それは彼女が祈禱について色々の種類を記述してゐるところの寓話である。譬喩はオリヂナルのものではない。それは聖アウガスチンやその他の人々に於いて現はれてゐる。然しそれは聖テレザによつて更に完全にされてゐる。彼女が告げるところによると「私の魂を一つの庭園として而もその中を主がさすらひ給ふ園として考へることは私にとつていつも大いなる喜悅であつた。また「我々の魂は庭園の様なものである。荒れて不毛で、その中から神は雜草を抜き而して草花を植ゑる、それを我々は祈りによつて水注ぐのである。是等をなすのに四つの仕方がある。第一は水を泉より引出すことによつてこれは最初の而して最も勞多き道程である。第二は水車によつて、その淵には小さな垂瓶がぶら下つてゐるのである。第三番目にそれから流れを送らすことによつて、第四番目に天から注がれた雨によつて。第一番目は通常の祈りであつてそれは屢大いなる悦びと慰めとを伴ふ。然し時々泉は枯れる。何故かといふ

に神を愛する愛は咽び泣いてゐたからとて、若しくは歡喜や優美の中にあつたとて起り得るものではない。唯正義や勇氣や謙遜に仕へることに存するのである。その他は受くるよりも與ふることであるやうに私には思はれる。第二は靜寂の祈りである。神が非常に彼女の近くにあつてそれは最早彼女は神に聲高く話す必要がなくなつたといふことを魂が理解した時である。この階段では意志は没入されてゐる。然し理解と而して記憶は矢張り働いてゐる。

これら第三の階段に於いては神は恰も園丁となつてゐる。「それは全く停止してゐるのではないが、種々の能力の眠りである。然し如何に動作すべきかと彼等は最早知らない。第四の階段に於いては魂は全然働かない。總ての能力は休むのである。彼女はこの状態を如何に記述すべきかと思案してゐるものゝ如く「主は私に是らの言葉を言つた。我娘よ、彼女(心靈)は我にまで傍近くよつても自らを破りはしない。生きてゐるのは最早彼女でなくて私なのだ。彼女はその見るところのものを理解出来ないやうに、彼女の悟性は理解するのをやめたのだ。」テレザは多くの神祕家の「大いなる懈怠」と呼ぶところのものを經驗した。それは言ひ難き孤獨と寂寥の感じであるが、然したとへ難き幸福への道である。それは全身強直を伴ふのであつた。筋肉は硬くなり脈搏は停止した。

心のこれらの強き悦びや哀しみは、テレザの生涯に於いて八九年間の主なる出來事であつた。それら

は極端な實踐的な活動の時期に伴はれた。その折には彼女は跣足のカルメル派の教團を組織する爲めに専心従事して居つたのである。カルメル派の苛酷と敬虔さは原始キリスト教の輝きを復活させた様なものであつた。これらの働きによつて彼女は勢力を示したばかりでなく、現世的な地位や人並の能力を發揮した。彼女の幻は男や女の指揮者や組織者としての彼女の能力を弱めはしなかつた。彼女の勞働は三十七歳の齡に彼女の最後の病に斃れるまで間斷なしに續いた。「この聖徒は最早何物も望みはしない。」と彼女がその臨終であることを知つた時に、むかしのやうな快活さをうかべて云つた。

此處には聖テレザの神祕的神學を詳説しようとは思はない。唯肝心な點は宗教的な生活といふものは神の意志の中に全き一致をなすことである。それ故に遂に人間の意志は純粹に受動的になりまた休憩の中にあるものである。しかしながらキリストに對する信仰が救ひの源であると屢々談つた彼女の言葉は不思議にルーテル派の宗教改革者の言葉に似かよつてゐる。また受動的や靜寂の祈りに就いての彼女の教説は法王が後に破門したところのモリノスの説と同じである。然しテレザは神學によつて聖列に加へられたのでなく彼女の生活によつてあることをよく記憶すべきである。一體ローマ教會はその聖列に加へた聖徒達の記録に見出される總ての教理には是認を與へるのではない。

聖テレザの敬虔の眞の特質は彼女の祈りの或物の中に最もよく現れてゐる、例へば次の如きもので

ある。「おゝ主よ、あなたの思想は我々の思想より如何にかけ離れてゐるか、唯あなたの心を固く愛さうとする魂よりまた其心靈の全意志をあなたの手の中に従はしめたところの魂より、あなたはたゞその魂はよく聴きそしてあなたに仕へる爲めに熱心に努力すべきことやあなたのいさをしを高める様にと欲むことのみを命じ給ふ。彼女は(魂)如何なる道をも探しまたは撰擇する必要はない。何故ならばあなたは彼女の爲めにそれをなし彼女の意志はあなたに従ふからである。而もあなたは、おゝ主よ、全き完全さまで彼女を伴ふ爲に心を碎き給ふ。」理論上に於いては熱烈なる努力と意志の全き服従と消滅とを調和させることはた易くないことであらう。然し心情の論理からはそれらは矛盾しないのである。恐らくこのことに就いてはラビ・ガマリエルよりも、よりよく話すことは出来ぬであらう。彼は次の如く祈つたのである。「おゝ主よ、汝の意志をば恰も我が意志の如く我をしてなさしめよ。また汝は我が意志をば恰も汝の意志の如くなし給はんことを」然し寂靜的神祕説はこのことをば屢誤れる基礎の上に置くのである。自己意識を虚無にするといふ事は我々の思想が神の思想と同じ心の中に共に存在することが出来ないといふ程甚しく差異してゐるといふ爲めでなく、却つて利己的な意志は神と我々との思想との間に不自然な敵對を置くからである。意志は他の能力と同じやうに神が彼の御心をなさしめんとして我々の中に働く時、その完全さを實現するものである。

十字架の聖ジュアン

St. Juan (John) of the Cross (1542—1591)

彼は僧院の改革に於いては聖テレザと同勞者であつて、彼女よりも更に完全なるスベエンの神祕家の典型である。彼の名聲は彼女程大きくはないが、然しテレザの特徴は彼女の嚴格なる苦行の中に於いても人間的で愛嬌に富んでゐるが、ジュアンは狂氣ぢみる程極端なる苦行を實行した。神の要求と此世の要求との間のあらゆる妥協を擯斥する爲めに、彼はあらゆる種類の苦痛を悦び迎へ、常に最も痛ましき困難なまた屈辱なることを忍ぶやうに我らに命じた。彼自身の生活は恐怖すべき禁慾と僧院の建立の爲めに極端な苦行との中に過された。彼の著書は寂靜主義の傾向を示してはゐるが、彼の性格は烈しき努力と休みなき勤勞とであつた。跣足カルメン派は彼の勤勞の結果としてスベエン全體に擴まつたのである。これらの修道僧や尼僧はあらはな木の板の上に眠り、一年を通じて八ヶ月間の斷食をし決して肉を食はず、夏も冬もともランヤの衣を着けてゐた。これらの新しき僧院の或者に於いてはその兄弟達がこの新しき規則に更に自發的に一層の嚴格さを加へることを競つたほどである。

文藝復興期の現世的なる事や贅澤さは前世紀の純潔さと敬虔さを復興することによつて償はるべき

であつた。昔ながらのカトリックの理想——キリスト教の中世紀型——十七世紀に於いてその完全さに達したカルメル派運動の最初の戦闘的な特質は、無くなつてはならないものであつた。この二人のスペエンの大いなる神祕思想家は先づ何よりも宗教改革に對する半面の選手であつた。

聖ジュアンの二つの主なる著述は「カルメン山の攀登」と「魂の闇の夜」とである。兩者とも寂靜的神祕説の特種なる型の論説である。「カルメン山の攀登」の最初に彼はかう言つてゐる。「神的合一にまで達する魂の旅路は三つの理由から夜である。出發に際してはあらゆる慾望の剝奪である。而してこの世からの完全なる出離である。知識は役に立たないから道は夜の如く暗く信仰によつてのみ導かれる。目的は神であつて我々はこの人生のかゝずらつてゐる間は理解すべからざるものである。」

この攀登に於いて魂は一つの闇の領域から他の闇へと過ぎ行くのである。最初に於いては「感覺の夜」である。その中に於いては、此の總ての物は魂にとつて闇となるものである。これは必ず通り過ぎなければならぬ。何となれば「總ての被造物は唯神の食卓より落つるところの屑に過ぎなくなり犬より他には何物もそれらを拾ひ上げようとしなからである。」「神の許すところの唯一つの望みは彼に従ふことゝ十字架を運ぶ事である。」「他の總ての慾望は心靈を弱め苦しめ盲目にし汚穢にするものである。」

「我々がかくの如きものより完全に出離しなければ我々は神を愛することが出来ない。」「汝が何物か

に執着してゐる時に汝は總ての上に汝自らを置く事を止めて仕舞つたのだ。」「若しも汝が總ての物と共に何物かを保留しようとするならば、汝は神の中に單純に汝の寶を持たないのだ。」「總ての創られたる者より汝の精神を貧しくせよ、然うすれば汝は神の光の中に歩むであらう。神は如何なる創られたる者にも比べることは出来ないのだ。かくの如きものが「感覺の夜」を過ぎ行く方法である。」「この最初の階段に於いてさへも他の人々は神のみ手になれるこの自然界に永遠の型と象徴とを見出すのに彼は無益なるものとして擯斥してゐるやうである。」「神は如何なる被造物とも何等の相似を持たない」

中世紀思想の二元論はこれよりも甚だしき表出を見出したことは稀である。

「感覺の夜」に於いては悟性と理性とは盲目になつてゐない。然し第二の夜は即ち信仰の夜に於いては「總てが闇黒である」「信仰は眞夜中である」それは我々が通過せねばならぬ最も深刻な闇である。何となれば第三の夜即ち「記憶と意志の夜」に於いては黎明は最早間近くなる。彼の定義によれば「信仰は我々の聞いた處のものに魂が登りゆくことである」——恰もそれは盲目な人が對象物の色彩について話を聞いたやうなものであらうとも。我々は全く盲目であらねばならない。「何となれば片目の盲者は彼の案内者に全く自分を任せないであらうから。」「かく聖ジュアンにとつては啓示の全内容は理性の範圍から移されてゐる。而して何處か外部から靈光を受けたものゝ如く取扱つてゐる。」

魂は三つの能力を持つてゐる。智慧と記憶と意志。想像は感覺的能力と理解力との間の鎖環であつて而して知力と記憶の間に位してゐる。これらの能力に就いて彼は言つてゐる。「信仰は知力を盲目にし、希望は記憶を、而して愛は意志を盲目にする。」更に續けて「神ならぬ總てのものに」と付け加へてゐる。然し「神はこの生活に於いては夜の如きものである。」彼は自らを絶滅することなしに自らを否定することで充分であると考へるところの人々を恥づる。また神の中に満足を求める人も然り。何となれば後者は「精神的貪食」であるから。「我々は神の中に甘美よりも痛苦を求むべきである。然してたとへ神から來たらうとも此の世から來たらうとも最も不快なることを撰ぶべきである。」「神への道はたとへ初心者には必要であらうとも敬虔と甘美の道ばかりではなくて、苦痛の中に自らを放棄することにゐる。」然して我々は總ての「神祕的現象」(眼や耳や其の他の感覺に映づる超自然的な表出)より飛び去らなければならぬ。それ等は善か悪かを吟味などをせず。「何となれば肉體的な感覺は精神的事物に對して何等相應しないからである。」「何となれば神と被造物との懸隔は無限であるから。兩者の間には何等の本質的な類似も交りもないからである。」幻はどんなに最良であらうとも「子供らしき玩具である。」蜜に觸れた蠅は飛び去り難い、と彼は言つてゐる。而して大抵其らは惡魔から來るところのものである。我らを神にまで連れ行くものは被造物でもなければ、知的な認識でも

ない。神とそれらとの間には何んの相應もないのだ。被造物は梯子となることが出來ぬ。彼らはたゞ障害と係蹄わづらひである。

かくの如き人生觀は耶蘇の「汝らのうち誰にてもその持てるものを凡て棄てなければ、わが弟子となることが出來ない」といふ言葉を文字通りヒロイックに實行しようとするどこか陰鬱なる見解から來てゐるのである。彼の持てる凡てのもの、否彼自身の生命まで即ちわれわれの性質にて最も貴ばるべき知力、理性、記憶などまで全く神の足もとに放棄するのである。神は暗黒をもつてその聖所として彼の大空は暗き洋なまにて神のまはりを圍ませ厚き雲にて彼を蔽はしめてゐるのである。

「第三の暗夜」に於いては——記憶と意志との暗夜——魂は聖き懈怠と忘却の中に沈んで行くのである。その中にあつては時の流れは感じられず、心意は凡ての雜念を離れるのである。しかしながらこれが求むる終極の状態ではなくして、これはやがて曙となるべき夜の最後の凝視である。かくて人間の能力は神的な屬性の中に變化され、さうして神に對して全く反してゐた魂が、全き變化をうけて神性にあづかり神となるのである。この祝福された状態に於いて「或る人は恚ういふかも知れぬ。魂は神をば神に與へるのである。なぜなら魂は彼女が神から受けた凡てのものを神に與へるからである。さうして神は彼女に自らを與へる。これは神祕的な愛の賜物である。それをもつて魂は彼女の凡ての

負債を返済するのである。」それは小さな永遠のもの、断片をもつて満足することの出来ない魂の無限の報償である。この恵みに充ちた希望がいかに深い憧れをもつて聖ジュアンを力づけたかは、次の美しい熱情的な祈りの言葉に依つて覗はれる。

「おゝ神の愛の悦しさよ。けれどもあまりにわづか知られてゐる。汝を見出した者は安息の中にあり、そして凡てのものが變化される。おゝ神よ、汝の衷にいはしめたまはんことを、何處にゆくにも汝と共に、おゝわが神よ、いづこにも凡ては汝と共にあり、願はくば、おゝわが愛よ、凡ては汝の爲めに、わが爲めには何ものも——何ものもわが爲めにはあらざれ、たゞあらゆるものは汝の爲めにあれ、すべての快さと歡喜は汝の爲めに、されど我には何ひとつあらざれ——凡ての辛慘と勞苦はわが爲めに、されど汝には何ひとつあらざれ。おゝわが神よ、至高の善にいます汝の現前はわれにとつていかに悦ばしくあるかよ！ われは沈黙して汝に身を寄せて行く、さうして汝の脚の裾をまくるであらう。(路得記第三章七節参照) わが身を汝と一體となしわが魂をば汝の花嫁となして、汝を楽しません爲めに。われは汝の腕に抱かるゝまでは、何ものにも悦ばぬであらう。おゝ主よ、お願いです、一瞬間でも我をば退けて下さるな。なぜならわれはわが魂の汝にふさはしいか否かを 知らないからです。」

かくの如き熱愛が彼の苛酷なる生活をして容易にし、棘の繁り合ふ陰慘な路をばやはらげてゐるのである。

彼は一五九一年に死しその著書は死後廿七年に正統と認められた。しかし聖者と認めることは一六七四年まで延ばされてゐたのであつた。テレザにもジュアンにも認められる寂靜主義的思想は次の世紀の神祕家に影響を與へてゐる。ギヨン夫人とフェネロンの如きはその著しいものである。

ライマの聖ローズ

“St. Rose of Lima” 1586—1617

スペエンに燃えそめた靈の火は一時盛んに光彩を放つたが間もなく燃え盡して往つた。次に思ひ掛けぬ國土に咲き出でた愛すべき花に一瞥を與へることにしよう。

それは南アメリカのペルーに「ライマの聖ローズ」といふ愛すべき神祕的尼の美しき姿が見出される。ライマはペルーの一都市である。

或る聖者は罪の恐れのため蓄薇の匂ひをすら嗅がなかつたと言はれてゐるけれども、それは宗教的素質の乏しい人の卑俗な考である。眞の聖者達は誰よりも多く自然を愛し、あらゆる被造物と共に

神を讃美したのである。ライマの聖ローズはその名の示すやうに神の懷に咲き出でた一莖の花である。草木もまた大地より生れ出でた有情であり、人間も大地に咲き出でては散るひとものと花である。であるから人間は自然物に對して Deep Sympathy を持つことが出来るであらう。ローズは草木や小鳥や昆虫など、同化した。さういふ點ではアツシジの聖フランシスに似通つてゐる。彼ら自身氣付かなかつたにしても自然物に對する深い愛の底には汎神論の思ひが流れてゐるのである。

その傳記に次の如く記されてある。

朝日の上る頃、彼女が花園を過ぎてその草庵に往く路すがら、彼女は、諸の造り主を共に讃美する爲めに、自然物を呼び醒ますのであつた。

すると、樹々は彼女の通る時枝を垂れて俯向く様に見える、そして、ざわ／＼と調和した音をたてながら、葉と葉とを摺り合はせるのであつた。

花は花梗の上に揺れ動き、而して四邊を匂はせようと花葩を開く……憊んなにしてみな神を頌め讃へる。同時にまた小鳥らは歌ひ始めそして飛んで来てローズの手や肩の上に棲止る。小さな羽虫らは嬉しげに囁きながら彼女に挨拶し、凡ての生けるもの活動するものは、主に捧ぐる彼女の合奏曲に加はるのであつた。

それから『日没の頃いつも夕方、可愛い小鳥が心も蕩ける様な聲で飛んで来て彼女の窓際の樹に棲止りそして彼女が歌ふ合圖を與へるまで待つてゐるのであつた。彼女はこの小さな翹ある合唱者を見るとすぐ彼女も歌ふ備へをした。そして彼女がこの目的の爲めに作つた二部曲を小鳥に命ずるのであつた。』

『さあお始め、かあい、小鳥よ、おまへの愛らしい歌を。あんなに一杯甘やかなメロデーを小さな喉から注ぎおだし。そして私達は一緒に主を讃へませう。おまへはおまへの造り主を讃美するのですよ。わたしはわたしの蜜の様な救ひ主を。小さな口を開いてお始め、そしてわたしもそれに續くから、そしてあたしたちの聲は、聖い悦の歌のなかに蕩け合ひませう。』

直ちに小鳥は歌ひ始めた。最も高い調べまで歌ひ昇りながら。それから此度は聖女が代りに歌ふ爲めに小鳥はやめる……憊うして、まる一時間といふもの、代り番に神の偉大を頌め讃へるのであつた。しかも一糸亂れずに小鳥の歌ふ時はローズは何も言はず、また彼女の番には、小鳥は沈黙し心から耳を傾けるのであつた。

遂に六時頃聖女が憊う言ふと小鳥は見えなくなるのであつた。

『もうお歸り、わたしの小さな合唱者よ。勝手に飛んでお歸り。けれども幸なことよ。神様は決して

私を一人残しなさないから』

ヤコブ・ペーメ

Jacob Boehme 一五七五——一六二四

ルーテルの宗教改革はその先驅者なる獨逸の神祕家の影響を受くるが多かつたが、しかし彼の心情の宗教は早くも彼の時代に於いてさへ宗教教儀なる形式の中に硬化しかけてゐるのであつた。彼の親友メラニヒトンが、アリストテレスの哲學を採用してスコラ哲學を再興し始めたのは、即ちそれである。それでかうしたプロテスタントの正統派に反對して心情の方面を力説した神祕家の系統があつた。

セバスチヤン・フランク（一五〇〇——一五四五）

パレンチン・ワイゲル（一五三三——一五八八）や、遅れてヤコブ・ペーメ（一五七五——一六二四）はその主なる人々であつた。

ルーテルは一五四五年に恚う云つてゐる。「余はフランクといふやうな人々には答へようと欲しない。余は甚しく彼らを輕侮する。余の鼻が嗅ぎ間違へてゐなければ、彼は熱心家で降神術家だ。たゞ

靈、靈、靈だけで満足して聖書や禮儀や説教に全く無頓着なのだ。」と非難してゐる。けれども彼はルーテルの追隨者の極端な反對の位置に立つてゐたことを認めなければならぬ。

ワイゲルはルーテル派の牧師であつた。

人は小宇宙である。さうして其の性質は三部分よりなつてゐる。外部の物質的な肉體、星に住む精靈（The astral spirit）と不滅なる心靈とである。最後の心靈は神のかたちにかたどられてゐるものである。而して感覺理性及び悟性とがそれらの三部分に相應する能力である。

即ち感覺は物質を認識する眼で、理性は自然科學及び藝術を認識する眼で、悟性は見えざるもの、神を認識する眼である。彼はこれをエツクハルトの如く火花とも呼んでゐる。

神は彼自身眼であり、心靈の光である。また同時にその眼がその光によつて認識するところの對象でもあると説く。これらの人々のうちで最も重要な位地を占めるのは無學なるゲーリッツの靴工ヤコブ・ペーメである。

ペーメは神の啓示に依つて明かに目撃したところのものを記したのに過ぎない。「私は私自身が私の書籍である」とも言つてゐる。さうして若し彼が誤つたとすればそれは彼が目撃したものを描寫する言葉を見出し得なかつたがためである。

彼は無學で別に哲學的な文字を知らなかつたが、彼の圍りに集つた人々がそれを教へ込んだ。しかし彼は抽象的な言葉に耐へられなかつたので自己一流に象徴化した。例へば「觀念」といふ言葉を美しい乙女の姿を以つて象徴した。かゝる哲學的な言葉を吹き込まれたのは彼の文章を難解ならしめた原因であるが、更にパラセルススの研究から神智學と化學との混合が尙更彼の論説を不明にしてゐるといふことである。

一方に於いてはペーメの著書は全く瘋癲院以上だと云はれ、ジョンウエスレーの如きは「崇高な謙言、模倣し難い誇張」と評してゐるが、また一方では獨逸の哲學者らに依つて「プロテスタント派神祕の父」と尊敬され、「プラトーンとなるために單に教養と文才が欠けてゐた」と云はれてゐる。ニュートンの如きは彼の著者を精讀する爲めに三ヶ月の間没頭したといふことである。

ペーメに依れば眼に見えるこの自然界は神の意志のあらはれであり、人間の中に靈のあるやうに大宇宙の中にも永遠の靈「Eternal spirit」が働いてゐる。この永遠の大自然の中には七の「生命の形式」「本源靈」：「Quellgeister」又は「存在の母」がある。ペーメはそれをヨハネ黙示録第一章に記してあるやうにかゝる神の七の本源靈を七つの金の燭臺をもつて象徴化した。それらの本源靈は第一に鹹の性質「The Astringent Quality」である。これは希求であり、牽引であり、堅固さや凝結性を與へ

る。岩はこの性質が優性であるから固いのであり、鹽とか狼とかいふ荒きものにも優性である。星に於いてはサタールン星である。

第二の神の本源靈は甘い性質である。これは第一とは正反對で、擴張や運動の原理である。

柔軟なる植物や流動體や水銀、又は動物の中では穿微的な狐などにはこの性質が卓越してゐるのである。

第三は苦い性質である。これは第一と第二との正反對のもの、衝突から起るものである。これは事物の苦悶や争鬭に於いて現はれてゐる。これは天上の歡喜ともなればまたは地獄の苦痛ともなる。その影響は硫黄とか犬とかといふものに優性である。星に於いてはマルス星である。これは赤い色を産出し怒り易き性質を支持する。第四の本源靈は火又は熱である。第一より第三までは特に父の——怒りや必然や死の——王國に屬してゐるものであるが、第五より第七までは子の——愛や自由や生命の——王國に屬してゐるものである。

さうして第四はこれら二つの領域の仲介をなしてゐるものである。火の性質に於いて光明と暗黒が交錯してゐる。これは人の魂の根であり、天國と地獄との源であり、我らの性質はその兩界の間に立つてゐるものである。

この物質の世界に於いては火の性質は成長の原理の中にあらはれ、金属の中では黄金に、動物にては獅子に優性である。さうして黄色を出す。

第五は愛の性質であるが、叡智と光榮の源である。

それは凡て甘美なるものに優性である。例へば鳥に於いて、兩性の交りに於いて。星の世界にてはヴェヌスがその星である。ペーメはある場所には特に、恵み深きみ子にこの性質を歸してゐる。

神力的の第六の本源靈は響、即ち音である。天上に於いては天使らの歌聲、天體の諧調。人に於いては五感や理解や談話の賜物である。この性質は快活なる性質に於いて最もよくあらはれ、色としては綠色をあらはす。

第七は形體の性質若くは本質の實體である。この性質に依つて他の凡てのものは形體をとる。

天上の世界にてはこの性質がパラダイスの美しき形體をとり、この地上にては物體を支配するところの塑造的な力であり、自然の工作的な靈である。

かくの如くペーメの理論は化學と神智學との混合のやうであるが、これは明らかにパラセルススの影響のあらはれである。パラセルススは凡ての物體は鹽と水銀と硫黄とで出来てゐるといつたさうである。(パラセルスス(一四九二—一五四一)スキスの醫者であり哲學者であつて、諸書を涉獵して醫術

や化學に、殊に藥物學に深い造詣を有し、また多く旅行して自然界を學んだ。バーゼルで醫術を教授してゐたが巫術者(死者と交通して未來吉凶を占ふ術)の嫌疑を受けてそこを逃亡しなければならなかつた。パラセルススは當時全歐羅巴に流行した占星術、練金術、哲學者の石の探究、一言にして言へば秘密の知識、靈界の鬼神を促して、人間の命令を行はしめんとする魔術者の典型的な人物であつた。しかしこれらの思想は科學の先驅となり、殊に萬物を金に變へようとする練金術は化學の發端となつたが如き一方にはよい影響もあつた。)

ペーメに於いては惡は善を現はす爲めに必要なものである。地獄に於いては苦痛であり、惡であるところのものは、天國に於いては喜悅であり、善である。苦い泉も甘泉もとは一つ神の源より流れ出たものである。天使も惡魔も二つとも神の中にある。一方は彼らの神の根元から喜悅や光榮を牽き出し他は恥辱と苦惱とを掘り出す。かくてペーメは汎神論者とならざるを得ない。

勿論汎神論だからとて惡の起原を説明しえたといふのではないが惡の存在する理由を認めてゐるところにその意味がある。

惡は世界の事實である。それが存在する事は、世界の調和に矛盾するか役立つかは別問題としても天災や老病死やパリサイ人の如き邪惡な人間のあることは事實である。これらの事實に依つてどれだ

けの深い意味を見出すかといふことが問題である。釋迦は生老病死の事實がある爲めにそれらに打勝つことの出来る道を見出した。

耶蘇はパリサイ人や悲惨なる人生の鞭に苦しむ人間をみて彼らを救はんが爲めに最後の手段、即ち十字架にかゝつた。邪惡といふものに取圍まれてゐなければ、魂は偉大なる生長や表現をなし得ないといふことは不合理であるかも知れないけれども事實である。しかしながらだから邪惡は必要であり邪惡を根絶しようとする努力は笑ふべきものであるとは、眞の汎神論者は、決して主張しないのである。

私が序論に於いて主張して來たやうに眞の神觀といふものは唯神論と汎神論との調和に依つて得られるものである。ベーメもまた唯神論者であると同時に汎神論者である。ボーンがベーメに就いて次の如く記してゐる。

「汎神論者は問ふ『貴下は宇宙の心臓であり生命である神、この世界といふ巨大なる身體の衷の心臓なる神を信するか』しかしベーメはかく答へる『然り。されど余は單に生氣ある力——必然な過程としての神——神が展開した物體の中に失はれる神を信じてはゐない』唯神論者はまたかく問ふ『貴下は人格と性格とを持つてゐる神、自意識のある自由意志を造りし神、神の欲するがまゝに彼の手の業

を支配する神を信するか』ベーメはかく答へる。『然り。されど余は天の彼方に我が神を追放しはしない。余は神が凡ての被造物凡ての實體の生命であり、彼は余の衷にも住んでゐることを信する。しかし余は何處に往くとも、余は彼を愛するならば余は彼の天上にあることを信する。余は宇宙は彼に依つて生れ、彼の衷にあつて生きてゐるものであることを信する。』(R. A. Vaughan; Hours with the Mystics. Vol. II. pp. 113)

「扱て自然の中には善と惡とが湧き出で、支配してゐるやうに、人間の中に於いても亦同様である。然し人間は神の子供で、神が彼を、善の中に於いて支配し、惡を征服する爲めに、自然の最も善い核心から造つたのである。たとへ彼には惡が、恰も自然に於いて惡が善に附着してゐる様に、附着してはゐるが、然し彼はその惡を征服することが出来る。若し彼が彼の靈を神の中へ高めるならば、彼の中には聖靈が湧き出で彼の勝利を助けるであらう。」(征矢野氏譯「黎明」四頁)

アウロラの中には次のやうなたぐひなく美しい句があまたある。それらは決して「崇高なる謔言」ではない。深い心靈の世界の事實を表現しえてゐる。

「扱誰に私は天使を比較すべきであらうか。」

私はそれを小さな子供——かの五月美しい薔薇の花の咲く時、互に美しい花の中を散歩し、それを

摘み取つて立派な花輪を作り、そしてそれを手に持つて喜び、常に美しい花の色々の形を語り合ひ、又彼等が美しい花の中を行く時は互に手を取り合ひ、彼等が家へ歸る時はそれを兩親に與へて喜び、兩親も亦子供を喜び、そして神の美しい五月に互に喜び合ふ、小さな子供に比較するのが一番よいと思ふ。

そこには心よりの愛、穏和な愛、親しい會話、恵みある同棲以外に何物もない。そこでは一人は常に他のものを見、他のものを尊敬することを喜ぶ。彼等は何ら悪意或は奸計或は欺瞞を知らない。却つて神的果實と愛情とは彼ら凡てに共通で、そこに何らの不満も嫉妬も反對もなく、彼等の心は凡て愛の中に結合してゐる。」

「夫故天使は彼等の父がする以外の何事もする事が出来ない。これ福音書にある様に、我々の天使的の王なるイエス・キリストが地上に吾々と共にあつた時證明した處である。彼は言ふた。「誠に實に爾曹に告げん、子は父の行ふ事を見て行ふの外は何事をも行ふこと能はず、それすべて父の行ふ事を子も亦行へばなり」(ヨハ子傳五の十九)」

また「もし改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ」(馬太傳十八ノ三)と。

これによつて彼は、吾々の心が、神の聖なる天使の様に、愛に於いて結合し、又吾々は神の天使の様

に新しく、愛を以つて互にふるまひ、互に愛し、尊敬を以て相ひ迎へなければならぬ事を言ふたのである。

決して吾々が互に詐り欺き、大なる貪慾の心から他人の口にある一片を奪ひ取り、又は他人に對して誇り傲り、彼の悪い悪魔の奸計を用ゐ得ない人を輕蔑すべきではないのである。

おゝ否、否、斯の如き事を天使は天に於いてしてはゐない。却つて彼等は互に相愛し、何れも自分を他より美しいと思はず、各々他に依つて喜を持ち、他の美しい姿と愛とを喜ぶ、そこから彼等相互の愛が生じ、互に手をひいて導き合ひ親しく接吻するのである。」

ペーメは又當時のパリサイ人を鋭い言葉で批難してゐる。當時の正統派の教師や信者たちがペーメを迫害し、異端として追放したのは當然であると思ふ。

「諸君は悪魔の正義を主張しようとしたが、何を以て彼は諸君に報ゆるであらうか。彼は地獄の憎惡以外何物もその力の中には持つてゐない。何を諸君は報酬として得ようとするか。當てて見よ、彼の有する最もよい果實、最も好い香は何であるか。」

「悪魔は彼の國を固くする爲めに人間に魔術を教へた。然し、若し彼が其の後に隠してある眞の原因をも示したならば、多くの人々はそれに關はらなかつたらう。」

「來れ汝等欺瞞者、妖術者、惡魔と媚を交はすものよ、わが學舎に來れ、私は汝らがいかにその妖術によつて地獄に行くかを教へるであらう。汝らは惡魔が汝等に服従してゐると思つて喜び且つ自分を神と思つてゐる。私はこゝで魔術の手品を發くであらう、それは私も又自然の研究報告者になつたから。然し汝等の様にでなく、却つて汝等の恥を神的啓示によつて暴露し、これを最後の世に傳へ、汝等の智慧を審判せんが爲めである。審判は智識に對して續いて起る。

怒の弓は既に張られた。各々の人は的中へはいらない様に用心せよ。眠より醒める時が來たから。」

一項をさくほどの長さもないので、そのまゝ一言附加へて置きたいと思ふのは、十七世紀始めのベネデクト派の神祕的尼、ガートルウド・モーア（1606—1633）に就いてである。當時尙美しき尼さんだちが浮世をすて、集ひ來つて、僧院の奥で若き血汐をば祈に捧げてゐたのである。何處に於いても女性の生命は愛である。愛すべき人のなき淋しき尼僧院に於いて彼女らは救世主をばその愛の對象としてゐた。琥珀色の光の漾聖像の前にてこの世のどんな密な戀よりも、もつとせちな愛や惱みの言葉が、どれほど救世主にさゝげられたかわからない。ガートルウドが「マグダラのマリヤが主を捜し求めた折に、主の代りに二人の天使を見出したとて何んの慰めがあつたらうか」といつてゐるやうに、

彼女らはたゞ主のみ慕ひもとむるのである。さうして戀に疾みわづらふ若き處女のやうな恒壽を抱いてゐるのである。

「あゝ神さま、たゞあなたのみを求めて嘆息し、喘いでゐる魂、あなたをうる爲めに他の凡てを糞屎のやうに思つてゐるいぢらしい魂に、あなたの與へて下さる凡ては何んですか」

「愛のために凡てを與へるのは最も楽しい賣り買ひだ」

「おゝ愛せしめよ、然らずば死を！」

これらの言葉はガートルウドが自ら「白痴の敬虔」と呼んだ小冊子の中にあるもので、あるがその中には彼女の祈禱書の餘白などに人知れず記したものを、後の人が見出して増補したものもあるといふことである。

パスカル

Pascal (1623—1662)

十七世紀に佛蘭西に起つた宗教運動にて特に記憶すべきものが二つあつた。それはデヤンセニズムと寂靜主義とである。

當時ルイ十四世はベルサイユの宮殿にて榮耀榮華を極めた時代であつた。彼は宗教の統一上から新しい宗教運動に對しては迫害を加へた。その犠牲となつたのはデヤンセニズムとクワイエチズムとでつた。

デヤンセニズムの祖マルネリウス・デヤンセン(一五八五——一六三八)の生れは和蘭であつたが、白耳義のフランダースで教育を受け、そのルヴァンといふ大學の神學教授となつた。彼は極めて非社交的人で宴會や晚餐會などに絶えて顔を出さない人であつた。彼はたゞ晝夜アウガスチンの研究に没頭した。かの浩瀚なるアウガスチンの全集を十回も通讀したといふのも、ほどその人となりが見えらるるであらう。

彼の中心思想はアウガスチンの人の救はるゝは神の恩恵に依るといふ教理に基いて、神の恩恵と人間の自由意志との調和をはかつたところにある。デヤンセンの思想は當時のパリサイ化したカトリックの中にあつて眞實を求むる人々の中に底力のある反響を惹き起した。

デヤンセンの友人なるサン・シイランやバリソルボン大學院の會員なる法學の大家アントアン・アルノなどといふ人々はこの派の首領であつた。

アルノの姉のマリー・アンジェリックといふ信仰篤い婦人がバリを西に距ること十八哩ばかりの

静かなる小村落ポール・ロワイヤルの尼寺の尼院主であつたが、その弟のアルノオ及び彼らの甥にあたるアントアンとサシイとがこの幽居に來り住むやうになつてからポール・ロワイヤルの谿は、佛蘭西に於けるデヤンセニズムの源泉地となつたのであつた。やがて同志の人々が來り加はつて荒地を開拓し家を建て、ひとつの楽しい兄弟主義の團體が形造られた。別に姉妹達の家も建てられてそこは當時佛蘭西にて最もすぐれた女性のひとりであるブレエズ・パスカルの妹チャクリヌも住んでゐた。これらの人々が心を同じくし、力を合せて新しい信仰と生活の爲めに團結した。ポール・ロワイヤルの生活といふものは情味掬すべきものがある。田園の勞働や宗教的な勤行の外に彼らは當時カトリックの正統派擁護をもつて任じたジエスエツト派の人々と宗教上の論戰をする爲めに書物を著述したり、特に選ばれてこゝに送られたる少年達の教育に従事したりした。デヤンセニストの教育方針は教育史上に於いても特筆されてゐるところのものであるが、かうした開發的な自由教育のもとにかの著明なる天才悲劇作家ジャン・ラシイヌもこれら愛すべき少年らの中に交つてゐたのである。

一六五四年の九月即ちラシイヌの來る前の年に、ポオル・ロワイヤルをして不朽ならしめた一人の非凡なる天才がこゝに來り加つてゐたのである。その人はブレエズ・パスカル(1623—1662)と云ふのである。彼はラシイヌのやうにもう少年ではなかつた。三十一歳の働き盛りであつた。一六六二年三十

九歳で死ぬまで彼はこの愛すべき谿に於いて光榮ある精神的の仕事に没頭した。パスカルは異常なほど頭腦の明晰な人であつた。十二歳の時、幾何學を少し教はつたばかりで自分でユークリッドの第三十二命題まで解いた事や十六歳の時、當時の大哲學者デカルトを驚嘆させたことや、その外種々の數學や物理學上の貴重な発見をしたことはよく人の知るところである。しかし彼は虚弱な人であつた。あまり身體が細かつたので反物を巻きつけなければ着物が體に合はなかつたと言はれてゐる。

彼が宗教的に傾いた徑路は先づ彼が二十四歳の時に父が氷の上で負傷したのを治療する爲めに迎へた醫師がデヤンセニストであつた爲めに、彼の一家の上に新しい宗教の空氣が入られたことであつた。別けてもパスカルの姉と妹とは深く感化された。しかしパスカルはなほ社交のことや學術の俱樂部などに心惹かれてゐた。彼はこの世の華やかな享樂を求める心を捨てることは出来なかつた。彼はこの現在の生活の中に幸福を捜し求めたのである。彼は二歳年下の妹のジャグレイヌが一六五二年五月俗世の生活をすて、ポオルロワイヤルの修道院へ急ぐのをさへ諫止したほどであつた。この妹は愛すべき女性であつた。嘗て幼い時に、彼女の父は當時權勢をほしいまゝにしてゐた、黒衣の宰相リセリウの怒にふれてバスチルの牢獄に投ぜられようとしたのを逃れて田舎に隠れてゐたことがあつたが、リセリウが演劇を好んで子供を役者にして「戀の壓制」といふ芝居を演じさせることを命じたこと

があつた。その時ある同情ある某夫人のはからひでパスカルの妹デヤクレイヌにその主役を演ぜしめた。その出来榮えが非常に良かったのでデヤクレイヌをして父の赦免を乞はしめて許されたといふ逸話があるほど、彼女は愛すべき伶俐なる天性を持つてゐた。パスカルの一生はこの妹の感化によるどころ多いと言はれてゐる。

彼は哲學や科學や現世の幸福も彼に究極の心の満足と與へなかつた。さうしてまた彼には報いられない愛の傷手があつた。殊に一六五四年十月のある日彼の乗りし馬車がセエヌの流に落ちかゝり馬は河中に墜落して危く車のみが止つて幸にも生命をとり止めた事などがあつた。パスカルはこれらの事より嚴肅に人生の問題を考へる人となり、靈性の眼がさまされるに至つた。その時以來「彼は寢床に横はつてゐても、その下に底の知れない深淵が口を開くのを見た。椅子に腰かけてゐてもその脚の下に千仞の絶壁の聳立つを見た」といふことである。その頃である。ある夜彼には精神上の一大革命が起つたのである。この事は生前知るものとはなかつたが、死後その着物の衿に縫ひつけてあつた書付けを見出すに到つて知られたのである。人が護符を持つてゐるやうにパスカルはそれをたゞ自分の悦びの爲めに持つてゐたのである。彼は一生誰にもそれを話さなかつたのを見てもその經驗はいかに深刻なものであつたかが察せられる。それは恐らくいかなるものにも崩されることなく、光輝

をましてゆく歡喜の經驗である。その全文は左の如くである。

千六百五十四年恩寵の年

月曜日、十一月二十三日、聖クレメンス祭

夜十時半と十二時半

火

アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神

哲學者賢人の神に有らず

確實、確實

イエス、キリストの神

我が神、汝の神、

汝の神は我が神たらん

世を忘れ神の外一切を忘る

彼は唯だ福音に依りて示されたる道に依りてのみ見出ださるべし

人の靈魂の偉大なることよ

「義なる父よ世は汝を知らず、我は汝を知る

歡喜 歡喜 歡喜 歡喜の涙

我は彼より落ちたり

「彼等は活ける水の源なる我を棄てたり

「我が神、汝、我を棄て給ふか

我永へに神を離れざらまし

「唯一の眞の神なる汝と其の遣はししイエス、キリストを知るこれ永遠の生命なり」

我は落ちたり我は彼より遁れたり、

彼を否たり、彼を十字架につけたり

我永へに彼より落ちざらまし

我は福音の示す道によりてのみ彼を捉ふ

全く舊生活を棄つることは如何に甘美なるよ

イエス、キリスト、我が贖主に絶對的の服従

我は汝の言を忘れざるべしアメン。(柏井園氏の譯に依る)

パスカルの一歳年上の姉ジイルベルトは愛の濃やかな心のゆきとよいた筆をもつてパスカルの死後その美しい傳記を書いた人であるが、この姉がロワイヤルの妹ジャクリイヌに宛てた手紙の一節にパスカルのことを次の如く記してゐる。

「彼は恩恵に成長しておまへは彼を見知らないまでになつた。彼は自己を賤しんで自分を信ぜず、人の記憶から自分の名の消し去られることをのぞんでゐる。」

これはパスカルがはげしい回心の經驗をしたのちの謙遜な碎けた魂の所有者となりし彼を示してゐるものである。その年の十二月パスカルは靈の子として生れ更つた心を抱いてその愛する妹ジャクリイヌをポール・ロワイヤルの修道院に訪ねて往つた。彼女は兄のパスカルがポオル・ロワイヤルに來り投ずることを心まちに待つてゐたのであつたが、今やパスカルは悦んで妹の勸告を受け納れたのであつた。

當時ジャンセニストは戰鬪的精神の盛んなジエスエツト教徒が、自ら羅馬カトリックの敵の防禦者をつて任じてゐたので彼らを敵とし、また同時に法王や佛蘭西官憲の迫害に戦はなければならなかつたのでポール・ロワイヤルの人々はみな緊張してゐた。修道の女性たちとても殉教の覺悟を持つてゐる。

たのであつた。恚うした中に驚くべき頭腦の聰敏なパスカルを迎へ入れたことは彼らの大いなる悦びであつた。

パスカルは「郷友に寄する書」：「*Provinciales*」といふのをかいたが、それは廣く讀まれてジエスエツト派の勢力を粉碎するに與つて力あるものであつた。

パスカルの名高い著書は「瞑想録」：「*Pensées*」であるが、それは彼の企てた大著「キリスト教の解説」の爲めに紙片に覺書として記しておいたものである。彼はその企てを成就せずして三十九歳を一期に死んだけれども、書き残した断片のパンセイは不朽の價値を存してゐる。

パスカルは愛すべき性格の人であつた。獨逸のノフアリスと共に神祕思想研究者には忘れ難い人である。

パスカルは一方には人間の脆弱にして不完全なることやその悲しみ苦しみや不幸を痛感すると共に他方に於いては人間の崇高偉大なることを認めて人生の光明を基督に求めた人である。

「人間は己れが不幸なることを知つてゐる。されば人間は不幸である。彼が不幸なるが故に。けれども人間は十分に宏大である。彼がそれを知つてゐるが故に」

「吾等をして世には同様に永恒な信仰の二つの眞理があることを認めさせる。一は即ち人間は創造の

状態に於いては、又神寵の状態に於いては、あらゆる自然の上へ上げられ、神に型取つて作られて、然かもその神格に與つてゐるといふこと、他は即ち墮落の状態、原罪の状態に於いては彼は此の状態から墮落して禽獸に等しいものとされてゐるといふ事である。此の二つの命題は同様に確固であり、確實である。聖者がその事を吾等に明白に説いてゐる。即ちそれは或る場所であらう言つてゐる。

「わが楽しみは人の子等と共に居るにあり」(箴言八の三十一)「わが戀をなんぢの子等に注ぐ」(イザヤ四十四の三)「なんぢらは神なり」(詩篇八十二の六)然して他の場所では又かう云つてゐる。「人はみな草なり」(イザヤ四十の六)「人は思慮なき禽獸に比較され、その類となされたり」(詩篇四十九の十二、二十)これに依つて人は神寵に依つて神に型取つて作られ、神格に與つてゐるもので、神寵がなければ禽獸に等しいといふことが明白に分かる。——柳田氏譯パスカル感想録二七九頁。

「幸福は吾々の内部にも外部にも存在せぬ。それは神の裡にある。即ち吾等の内にも、外にもある。」(同書二九六)といつてゐる。

パンセエは愛すべき書である。その中には深い愛と智慧の觀察がある。

「われは(耶蘇)某々の人々よりも更に多く汝の友なり、何となればわれは彼等よりもより多く汝のために爲したればなり。彼等はわれの汝らに就きて惱みしものを惱まざりしなるべし。又汝の不信と殘

忍の時代に於いて汝の爲めに死せざりしなるべし」(同書三三六)の如き言葉は耶蘇に對して戀にもまさる純な愛と深い理解がなければ言へない言葉である。しかし彼は自ら耶蘇の友であると感しながら他の方面に於いては「自我とや、そは嫌はしきものである」と自らを卑下して彼が最後の病の床に横つてゐる時ですら、彼は自分の病床を立ち出で、人の爲めに席をつくつてやらすにはゐられない程の心の碎けたる人であつたといふことである。

ミグエル・ド・モリノス

Miguel de molinos (1640—1697)

彼はスペインの僧侶で一六七〇年頃羅馬にやつて來た。彼の敬虔さと學識は法王インノセント九世の寵遇を受けた。

彼は一六七五年イタリヤで非常に興味ある神祕的論說「精神的手引」を著した。

彼の説くところに依れば、神を知る道は二つある。一つは沈思即ち推論的思想であり他は「純粹なる信仰」即ち冥想である。後者は能動的と受動的との二階段がある。受動的の方がより高いものである。つまり三段になるわけである。

第一段は彼が「外部の路」と呼んでゐるもの、初歩者の爲めには善いが、しかしこの道では決して完全に達することが出来ない。こゝは神が人の心を洗ひ潔める「暗と乾燥」である。

第二段よりは「内的の路」であつて内心の精神的指導者に全く服従することである。やがてより高い光耀の階段に進む。そこは神との合一であり、神の意志に全く没入して、自己意志の消え果てた魂の全く受動的な他力の状態である。かくてこそ神祕なる恵みが浸潤して來るのである。「我々は神の無限の善の量り知れぬ海の中に沈みゆき、さうして我々自身を消失せしめなければならぬ。かくてそこに緊乎と動搖されずに安じてゐるのである。」「魂がそれ自身を虚無にした状態は如何に幸あるものであるか」「凡ての眞理にかけて私は敢へて言ふ。その魂は神化されたのである」

これは例によつてイングのみるやうな、意志のなくなる虚無主義でも危険なパンセイズムでもない。純粹なる他力の状態を示してゐるものである。

かゝる他力の状態に到達するには祈、従順、靈交、及び内的苦業の手段によらなければならない。さうして最もよき祈りといふものは沈黙の祈りであるといつてゐる。かくてこそ神はその魂に談しかけるのである。

モリノスは十字架の聖ジュアンと共に、幻をみるのは危険である。そこには屢々悪魔の係蹄がある

からであるといつてゐる。モリノスの本は非常な歓迎を受け、イタリアでもスペインでもいたく尊重され、多くの人々はモリノスに交際を求めて來たり、ローマの知名な人々は彼と交際してゐることを誇りとしたり、また四方より彼に宛てられた手紙は山積したといふ有様であつた。

羅馬ではジェスエツトの坊さんを聴懺悔僧に持つてゐる尼さんをのぞいて殆んど凡ての尼さんは數珠と祈禱書の傍に彼の書を並べ、また彼の沈黙の精神的祈りに耽るのが流行となつたといふ事である。

しかし間もなくジェスエツト派の反對を受けて彼の書は異端とされ、彼自身一六九六年牢死した。彼の追隨者、即ち一般に寂靜主義者：Quietista は殊にイタリアに於いて非常に多數のものが嚴重に罪せられた。

フランスに於いてはかの著明なギヨン夫人が寂靜主義者としてブツセイに告發され投獄されるに至つた。

マダム・ギヨンとフェネロン

マダム・ギヨンは一六四八年四月十三日復活祭の日、巴里の南五十哩ばかりのモンタルギといふ小都市に生れた。土地の家柄であつた。幼い時から尼さんの衣を着るのを好んだといふ。母親は彼女に

對して無頓着であつた。さうして學校から歸つて來ると婢僕だちの玩具にされてゐたといふ。十歳の時に病室で聖書を見出してそれを讀んだ。朝から夜までキリストの傳を暗記しようとしたと彼女は言つてゐる。

しかし生長すると憊うした宗教的のことより、虚榮の方へ移つて往つた。彼女の美貌と輝くばかりの才智とは忽ち彼女をして社交界の花たらしめた。流行の衣裳を競ひ他の美貌の女に對しては嫉妬を燃やしてゐた。

聖テレザと同じく、彼女と同じ年頃には夜もすがら、小説を讀み耽つた。十六歳の時にはギヨンといふ彼女より二十二年上の富豪に嫁ぐことになつた。この人とは結婚の三日前に逢つたきりの人であつた。彼女の過失は悔いても及ばないものであつた。しかしこの夫の家庭は彼女を憫れみもなく鞭打つて矯正する爲めに必要なものであつた。姑なる人は野卑な刻薄な人であつた。さうして彼女を邪見に苦しめた。夫はまたたゞ彼女を肉慾的にのみ愛したに過ぎなかつた、彼女が病める時夫は慰籍を外で求めるといふ風であつた。次第に夫は彼女に倦んで、遂には女中の一人に命じていつも夫人を虐待させたといふことである。

嘗ては社交界にて一度彼女が口を開けば、凡ての人々が傾聴したのに、今や一言口を開けばすぐ邪

見な仕打が待ち構へてゐるのであつた。彼女の家に來る誰かれと言はずに彼女の欠點は誇張して吹聴された。ほこりがな若い夫人の心は全く打ち碎かれて仕舞つた。嘗ては機智と賢しさとで、多くの人に謠はれた彼女の唇は、今や何を言はれても沈黙を守る様になつた。何事にも逆はず、何物をも求めない淋しい人になつた。けれども彼女は心を取り直して荒々しい言葉に優しさをもつて答へ、邪惡な仕打ちに親切をもつて報いた。さうして匿しえなかつた涙の爲めに彼女は自分を責めたといふ事である。

憊うした折に、あるフランシスカンの修道者が彼女にかく教へたといふ事である。「夫人よ、貴女は貴女が衷に持つてゐるところのものを外に求めたから失望し困窮したのです。貴女の心の中に神を求めらるやうになさい。きつと見出だせるでせう。」

かくて彼女はかゝる苦しい境遇にあつてたゞ祈によつて慰めを得たのであつた。さうして彼はますます嚴格に禁慾克己を鍛練した。

しかし夫と共に巴里に漫遊したことがあつた。彼女はもう一度もとの華やかさを撞れ、また彼女の美貌に依つて受くる稱讃を悦ぶ心が芽生えて來たといふことである。

けれども彼女は自ら深く彼女の虚榮を反省し、それらは如何に天上の主を不快ならしめるかを知つ

た。彼女はこの世の榮華や快樂はいかにミゼラブルな慰藉であるかといつてゐる。恰度この頃であつた。或日彼女は従僕をつれて教會へ往く途中、橋の袂にて一人の乞食僧に逢つた。彼女はこの乞食僧に喜捨をすると彼はそれを拒んでさうして彼女の状態や、彼女の篤信さ、彼女の受くる試練、及び彼女の欠點等を談してくれた。さうして神は彼女に他の多くの人々よりもつと多くの事を要求してゐる。他の多くの人々は地獄の苦痛を通れる爲めに救ひを得ようと努力する。だが神は彼女がこの人生に於いて鍊獄の苦しみを免れるやうなそのやうな純潔さや完成さを求めてゐるのであるとはなしてくられた。

彼女はその乞食僧が誰であるかを尋ねた。けれども單に乞食僧に過ぎないとしか答へなかつた。さうして人々の中に隠れて仕舞つた。その後彼女はこの人に逢つたことがなかつた。しかし彼女はこの人の言葉に依つて動かされた。彼女は屢々自分の美貌の爲めに誘惑を感じた。彼女の秘密なる憧れは幾度も幾度もこの世の快樂にひき摺り込まうとした。しかし到頭二十四歳の時に天然痘によつて彼女の美貌を破壊せられ、幸か不幸か恚うした誘惑からもぎはなされて仕舞つたのであつた。

その時彼女の夫も痛風で床に横たはり、姑は彼女の床などには寄り付きもしなかつた。無情にも彼女のかゝりつけの醫師を迎へにもやらなかつた。彼女の病氣は何んの手當も受けなないで最もひどくな

つた時、偶然、彼女の醫師は彼女の家の前を通つたので家に呼び入れられた。彼はギヨン夫人の様子に吃驚して直ちに刺路の手當を施しつつかくも野蠻な等閑に對して言ひやうもなく憤怒したり悲歎したりした。姑はそんな事を意に介してはゐなかつた。彼女の苦しみの中にて彼女は一言も怨言つみやかなかつた。人を恨まなかつた。姑の暴虐さへも出来るだけ隠した。しかし刺路の針は、むしろこんなになるよりは死んでくれた方がいゝと思つた親族だちを失望させながら彼女の生命だけを救つた。やがて彼女は全快した。恚うした痘痕の醜さを匿す爲めに一般に使用されるコスメチックをすゝめられたときに彼女はそれを拒んでかく言つた。

「もしも神がわたしの美をとめておきたいとお思ひになつてゐたら恚ういふ鞭を私にお當てにならなかつたでせう。」彼女の友は彼女の失望を豫期してゐたのに彼女に明るい魂をみた。彼女は悦びをさへ持つてゐた。彼女の告白を聴く僧は彼女の精神的な傲慢を非難した。彼女は何ものも怖れなかつた。彼女は夫のものでも、世のものでもなく、ただ神のものであることを感じたのであつた。けれどもまた次第に暗黒な氣持も襲つて來た。一六八〇年七月二十二日彼女の友であり、また師であつた寂靜主義の著明なる説教家ラ・コンプよりの救ひの手紙を受けるまで明るさを見る事が出来なかつた。コンプは始め彼女によつて寂靜主義や神祕的完全の路に導かれた人で、彼はいたく彼女を讚美した。しか

しコンプの思想はモリノスに類似してゐるといふ理由で、(また一面にはギヨンの愛を得ようとしてゐた彼女の異母兄弟のピエル・ラ・モーセの嫉妬も手傳つたのであつた。)一六八七年パスチイル城に幽せられ、生涯明るみへ出る事は出来なかつた。

ギヨンの夫は己に彼女の廿八歳の折に死亡し彼女の生活はやゝ單純化し、詩作や祈禱に耽つて慰めを得てゐた。

カウパーに依つて英譯されてゐる「純なる愛の黙從」といふ彼女の詩がある。

「愛よ、若しも私は定められたる汝の贖であるなら來りて汝の犠牲をほふりしかして汝の火を備へよ
妾をして汝の恵みの深淵にとびこみて死なしめよ

愛を抱く凡ての魂の欲みなる死を!

わらははわらはの時のとび去りゆくをみる

されどこのところにて思ひ惱みし時は久しかりき

怨言かすいそくとしてまた眞實に

わが思ひの凡てをもてたゞ汝の意志に従ふのみ

愛は我が生くるを若くは死するを命ずるとも

または苦痛や安慰を定むるとも

わらはにとりてかゝばりはなし

我が魂は苦痛の中にて眞のそのなひはなく

安慰や健康の中にて眞の賜物を見出し得ざれば

魂はたゞひとつの善を憧るゝのみ

利己的なる我執を去りて汝のみ心のまゝに従ひ

もし汝を悦ばしえば安慰の代りに悲痛を選び

王座の代りに悦びて草蓆を選ばんのみ

彼女はこの頃「短かくして容易なる祈りの仕方」及びその續篇「急流」といふ小論文を著した。

一六八一年の夏、彼女は三十四歳にして巴里を去つてジェネバから十二哩ばかりギユラ山の麓のジエックスといふところに根據を据ゑて、彼女は寂靜主義の傳道を始めた。慈善事業や、若くは彼女獨特の自己放棄や無^{グライステラツ}我^{グライステラツ}愛の教理などを説いた。彼女の單純熱烈に多くの人々は動かされた。あるときは朝の六時から夕の八時までひつきりなしに修道僧や僧侶や俗人や乙女や奥さんややもめなど、あ

らゆる階級の人々の精神的な問答の爲めに應接しなければならぬ事もあつた。

一方モリノスをほふつたジエスエツトの狂信家達はこれを見て嫉み、一六八八年彼女を或る寺院に幽閉した。しかしその年の八月國王の寵を受けてゐる婦人の請願で放免せられた。その年初めて有名なるフェネロンと相識る機会を得た。夫人はこの温雅にして一見優し過ぎるほどに見えて内心に這入れば這入るほど意志の強さを持つて居り、高潔で愛の深かつたフェネロンを讚美した。フェネロンは容易に相許さなかつたが、彼女を理解するに及んで彼女に對して親身の兄弟のやうな同情者となつた。フェネロンはギヨン夫人より三歳ほど年下であつた。

彼はジエスエツトの學校で學んだけれどもジエスエツト風ではなく、神祕思想に深い共鳴を持つてゐた。或は佛王皇太子の師傅となり或はカンブレエの大監督になりしほどにて當代の宗教家中にて一大人物であつた。

恰度フェネロンの反對に立つた人はやはりジエスエツトの學校に學び、學才に富み、政治的才幹に秀れてゐたブツセイである。彼もまた當時の宗教家中の一大人物であつてルイ十四世を助けて政治上にても權力を持ち、それに雄辯なる説教をもつて民衆に大いなる勢力を持つてゐた。ブツセイは始めマダム・ギヨンに厚意をさへ持つてゐたが次第に彼女に對して敵意を抱いた。ブツセイは思想や教會の統

一上、ギヨン夫人の思想を危険なものとして、一六九六年正月彼女をヴァインセンヌ城に幽した。

その年ブツセイは「祈禱の状態に關する教訓」といふ書を著して神祕思想、殊に寂靜主義に反對した。

出版に先つて彼はその書にフェネロンの同意を求めた。しかしフェネロンはそれを拒絶した。なぜならそれにはギヨン夫人の説を非難するばかりでなく、彼女の人物をも非難してゐたからであつた。さうして翌年フェネロンもまた「聖徒の格言」を著して彼の立場を明らかにした。

この書に就いては一言しておく必要がある。この論文は當時論議された神祕説の正邪を批判したものである。寂靜主義の「無我愛」と「受動的冥想」の二教理は論議の中心であつた。フェネロンの「無我愛」に關する意見は次の如くであつた。

利己心は神に對する我々の愛から取り除かなければならぬ。なぜなら、利己は凡ての罪の源であるから。

神に對する愛の五種類がある。(一)全く雇人根性のも、——つまり神自身はどうでもいゝたゞその賜物を愛するのである。(二)單に欲深い愛、——つまり幸福の條件としてのみ愛を愛するのである。(三)希望としての愛、——これもやはり自己の安住を欲する意志がまだ優勢なのである。(四)利害關

係を離れぬ愛、(Interested love) やはりなほ自己を思ふ意志が混つてゐるのである。(五)無我の愛——利害關係を離れた愛である。「若し神が正しいものの魂を地獄に送らうと欲するなら魂はそこにも等しく神を愛する。」地獄の恐怖を持つてゐる愛は未だ練獄の中にある。自己光耀の中にては愛は天國の希望を持ち、最高の階段にては神と合一して純なる愛を擾されずに務めるのである。

隠遁したいといふ意志はまだ "Interested love" である。無我の愛は「神聖なる無關心」に符合するものである。

「我々が我々自身を憎まなければならぬといふのは誤れる教へである。我々は他人と同様に我々自身に慈悲であらねばならぬ。」

「我々は我々の求むるだけそれだけ祈禱するのであり、我々が愛するだけそれだけ求むるのである。」フエネロンの「受動的瞑想」に關する意見は「この人世に於いて間斷なく續くものでなく、ベルナルもテレザも十字架のヨハネも、一時間か半時間以上はこの純なる瞑想が續かなかつた、と言つてゐる。これは受動的で何んら感覺的な幻覺を伴はず、何んら固定した觀念を伴つてゐるのではない。しかし神の屬性、三位一體や基督の人性や凡ての秘義を觀念することを含んでゐる。「もしこれらを否定するならば、基督教の枝を潔める名のもとに大切な生命の芽を斷ち切るものである。」といつて

ゐる。

フエネロンは教會の聖者、デオニシウスやクレメント、アウガスチン、十字架のヨハネなどの構威を引いて、自己の信するまゝ大體ギオン夫人の説を辯護したものである。こゝに於いて佛蘭西の二大人物は公然と反對の地位に立ち頗る天下の耳目を聳動させる様な論争を惹き起した。中學生のやうな若い學生まで當時二方に分れて互に神祕的、反神祕的の議論を闘はしたものであるといふ。遂にこの論争は羅馬法皇の裁決を請ふ事となつたが一九九九年三月法王はフエネロンの書中の二十三箇條は人を誤るものと判決を與へた。フエネロンは佛王の宮殿より追はれ彼の教區の中に閉ぢ込められて仕舞つた。セイント、キイルの寺院からはフエネロンとギオン夫人に私淑してゐた三人の若き尼は追はれ、ヴェルサイユの宮殿に於いてもフエネロンに同情を表してゐたものは其の地位が危くなつたといふことであつた。凡てが政治的なブツセイの策略に委せられたのである。

フエネロンは一七一五年に死しギオン夫人は一七一七年に巴里を去る百哩ばかりのロアール河邊の古都プロアで死んだ。

フエネロンとギオン夫人とは敗北のやうであつた。彼ら及びその同情者は武器や政略を用ひなかつた。たゞ誠意と愛をもつて敵對した。「惡に敵するなかれ、たゞ汝らの光を輝かせ、さらば人々は汝

らの善き行ひをみて、天にいます汝らの父を榮めるであらう。」寂靜主義の一教理「神聖なる無關心」
 “Holy Indifference”の眞意は惡に無頓着となれといふのではない。惡に敵する勿れといふことである。右の頬を打つたときにそれに敵意がなく抵抗もしないものを更に左の頬をも打つやうな執拗なものには打たしてやるがよい。惡に敵することをして反つて汝の眞心を離れてはいけないといふのである。『君主の玉座近く侍する燦爛たる群集の中に四五人の眞摯な慈悲深い顔が見えてゐる。その四五人といふのは、フェネロンもその一人である。シュヴルウズ侯爵、ポウヴリエ侯爵もさうである。皇太子もさうである。彼等の幸福は他の幾千百の人間の幸福より偉大だといふこともない。何等顯著な成功も成し遂げず、何等燦爛たる勝利も得て居ない。フェネロンはルイ十四世の不快を招く。ルイ十四世はその尊大自負にも拘らず、極めて些細な過失を卑しき極みの虚榮心を以て憤り惡む剛情な狡猾な王である。些少な事柄には偉大で、偉大な事柄には卑少な王であつた。フェネロンは有罪と宣言され、迫害せられ、追放せられる。シュヴルウズ侯、ポウヴリエ侯は猶ほ宮中に重職を奉じて居るが、しかし自分で求めて隠遁的な生活をする方が身の爲めだと思つて居る。皇太子は國王を愛して居らぬ、有力な猜忌的な徒黨が絶えず皇太子を陥れようと謀を廻らして、終にその少壯な軍功を壓し潰すのに成功する。

前述の人達を掩ひ包んで居た困難不幸悲哀失望は上述の如くであつた。しかも、他の者の轉變常なき間歇的な幸福の間に毅然として無言で立つて居る此の一群を眺めるといふと、此の四人の運命は洵に美しいものに、羨ましいものに我々には思へるのである。此の四人の有爲轉變に通じて一つの共通な光明が輝いてゐる。その光明はフェネロンの偉大な靈から出て居る。フェネロンは敬神、温順、驚嘆正義、及び愛のその崇大な思想に忠實である。フェネロンの神祕的な觀念を最早や我々は抱くことが出来んでも構はぬ。我々が抱きしめて最高最深な觀念だと思ふてゐるものがどんなものであらうと構はぬ。

我々の人世に對する確心の根底に横つてゐて、我々の道德的幸福の基礎となつてゐる思想がどんなであらうと構はぬ。そんな思想が他日崩壊して、もつと人間的なものと究極的な他の思想を見出したと信じて居る人の冷笑を買ふに過ぎぬやうなものであつても構はぬ。思想といふものは思想そのものには何等の重要なものを有つては居らぬものである。我々の生活を高尚にする思想の爲めに、我々の心裡に喚起さるゝ感情、これが重要なのである。

我々が見て以て眞理と爲すものを愛するその愛の大小が眞理そのものよりも尙ほ一層重要なことである。

思想が我々へ持つて来て呉れる善よりも、愛が齎らす善の方が多いではないか。大なる誤謬を忠實に愛する方が大なる眞理に卑劣に仕へるよりも遙かに有效である。

熱情と愛とは忠實の裡に見出す事が出来る、がそれに劣らず疑惑の裡にも見出すことが出来るのである。最も高尚なる自信と同様に、寛大でそして熱情的な疑惑も世にはあるものである。或る思想が最も高尚な最も確實なものであらうと、或は最も不確實極つたものであらうと、その思想が我々へ提供すべき最善事は、或る一物を遠慮無く渾身の愛を以て愛するやうにして呉れる機會である。思想の正不正は構はぬことで、機會さへ得ればいゝのである。余が眞に自己の身を捧げんと欲するものが、人であらうと、神であらうと、國家であらうと、世界であらうと、誤謬であらうと、いつか愛の灰燼の中に深く埋れて居るのを見出す寶玉は、余が愛した物からして出来たものでは無くして、愛そのものから出来たものである。戀着の誠實さ、その純潔さ、その堅固さ、その熱烈さ、——これ等は年月が消すことの出来ぬ痕跡を我々の後へ残すものである。一切の事物は過ぎ去つて了ひ、變化する。一切の事物は或は無くなるかも知れぬ。然し我々の胸の此の熱心と堅實と物を産み出す力との光線は永久消えることは無い。

「彼の如くその靈を平和の裡に有せしもの古來無し」と惡意計略係蹄に四方取圍まれて居た一人に就

いてサン・シモンは言ふてゐる。そして其後の處で他の一人の「賢明なる平穩」に就いて述べて居る。此の「賢明なる平穩」は彼が「小團體」と名づけて居る人々のいづれにも通じて見える性質である。かの人達は最も高尚な思想に對して誠實を守つた「小團體」である。ヴェルサイユ宮廷の虚偽と野心と愚劣と不信との間に在つて「平和と純潔とに身を輝かしつゝ行動した、友情忠實自重及び内的満足の「小團體」である。彼等は卑俗な意味での聖者ではない。森林の深きへ、或は荒野の遠きへ逃げることもせず、狭い部屋の中に自尊的な避難所を求めもしなかつた。彼等は人生の裡に止り、現實な事物を離れなかつた賢者である。彼等を救ふのは其の敬神の念ではない。彼等の靈が力を見出したのは神のみで無い。

神を愛し、あらん限りの力を盡して神に仕へるといふ事は、人間の靈へ平和と力とを齎らすには不十分である。神をば如何様に愛すべきかといふことを我々が知り得るのは、人間と接觸して獲得し且つ發展した智識と思想との御蔭に依つてのみ爲し得るのである。誰が何といはうと、人間の靈は矢張り根本的に人間的なものだからである。眼見るべからざる物を愛撫せよと人に教はることもあらう。然し神的な徳と熱情とに其滋養を見出しはせずして、人間の靈は常に全然人間的な徳と熱情とに一層現實な滋養の存する事を見出すのである。其靈が眞に平穩靜寂な人が我々の方へ向つて來れば、その

人の静穩と静寂とを與へたのは人間的な諸徳であると、斯う確信してゐるのである。

今は早や存在して居ない人達の胸の深奥な避難所を覗見することが出来るならば、フェネロンがその追放地に在つて夜毎その渴を醫した平和の源泉は不幸に沈淪して居たギヨン夫人に對する忠愛心に存し、誹謗され迫害された皇太子に對する愛に存して居たので、永遠の賞與を得んと期待に存してはゐなかつた事を我々は發見するであらうし、其源泉は氏が基督教徒として抱いて居た希望に存せずして、忠實と慈悲とに溢るゝ氏の無瑕無瑾な人間的良心に存して居たことを發見するであらう。』(メエテルリンクの「智慧と運命」大谷氏譯より)

スエデンボルグ (Emanuel Swedenborg)

一六八八—一七七二

スエデンボルグは神祕思想史にとつて看過すべからざる人物であるが、多くはネグレクトされる。ポーンが一項を割いてゐるがあまり要領を得てゐないやうに思はれる。

スエデンボルグはブレイクヤストリンドベルヒヤメエテルリンクなどに影響したほどでかなり大きい流れの源になつてゐる。カントは若い時スエデンボルグの著書を耽讀してのち實に「視靈者の夢」

に過ぎないとしてその迷妄から脱したといふことであるが、未だ懷疑を脱し得ないで純粹理性批判に没頭してゐた彼にとつてそれは當然のことであつたらう。しかしスエデンボルグの思想は非常に荒誕不稽のものゝやうに思はれてゐるけれども、その根本思想はそれほど怪奇なものではなくむしろ通俗思想に近いやうなところもある。

スエデンボルグは一六八八年一月廿九日、ストックホルムで生れた。ウプストラの大學で教育を受け後にはオクスフォード、ウトレヒト、パリなどで學んだ。彼は始め科學に興味を持つて學んだのであるが、一七四七年科學的研究を捨て、アムステルダムやロンドンに住つて神祕的な著作に耽つた。一七七二年の三月廿九日ロンドンで死んだ。

スエデンボルグの根本教理は凡て眼に見ゆる萬物はそれに相應する精神的實在を有してゐるといふことである。個々の人間の歴史は實行された寓話であり、肉體は心靈の肖像であり、宇宙は象形文字で掩はれた殿堂である。ペーメは精靈や天使との會話はしなかつた。そして彼はかゝる接神術の如きものは心の直感よりも反つて信賴すべからざるものと思惟した。スエデンボルグの言葉はまるで反對であるが、それは單に言葉の差に過ぎないかも知れぬ。

スエデンボルグはいふ「余の語るところは、單に内的な確心から來たものではない。余の目撃した

事物を談るのである。余は恍惚的な昂揚の折に余になされた啓示を思ひ起さうとしたりまた表出しよ
うと努力しない。余は數年間我が生活の大部分に於いてなされた精神世界の旅路や會話の明らかな状
態を諸君に記述するのみである。

余は經驗の上に余の基礎をおく。諸君の中のいかなる科學者にも劣らずに、嚴密なる方法で觀察や
歸納をすゝめる。たゞ余には二つの世界——精神の世界と物質の世界——にまで到達する經驗を享受
することが與へられたのである。「われは過去十三年の間、天人と相交り、之と相語ふこと、猶人間の
如くなるを許され、又親しく天界にある諸事件、及び地獄の様々を見るを許されたり。而してわが
今これらの見たる所、聞きたる事を記すは、世の無明を照し破り、不信を除き去らんが爲めなり。」

かかるスエデンボルグの言葉をもつてみると天界や地獄を遍歴したといつてもこの世以外の世界では
ない。彼はこの世にそれとコレスボンデントな寓話的ともいふべき精神世界を認めてゐるからである。
彼の言葉はこの自然や社會の浩瀚な象形文字を讀破して翻譯したのである。スエデンボルグの根本
思想を理解する鍵は「相應の説」である。

この現世には天界や地獄に相應する有様がある。心の正しく美しきものは天界の諸相をあらはし、
心の邪惡なる人間生活はそのまゝ地獄生活の姿である。それ故に「相應の説」は同時に彼の「表現の

説」である。つまり邪惡な人間生活は地獄を表現してゐるのである。スエデンボルグは現世に於いて
かゝる地獄を表現するやうな邪惡な生活を送つたものは死後、假現でない、眞實在の地獄に行くとい
ふ風に説いてゐる。かゝる説き方は通俗民衆佛教の地獄極樂の説き方に酷似してゐる。

スエデンボルグは生けるもの、死せるもの凡ての世界を三界に區別する、それは天界、精靈界、地
獄界、であるがこれらの三界は現世の諸相を三界に分類したものであつて現世の生活中にて如何なる
生活が天界的であり、何が地獄的であるかを記述したものである。

かゝる記述をなす爲めには普通の人の讀み難き象形文字を讀みうる人のやうに、この現世の事物に
對してそれに相應する靈的事物を見うる人でなければならぬ。彼が到る處に相應を見るといふのは
それである。彼が天界の有様を叙してゐる一節に次の如きものがある。

「われ天界にてその崇大なること、言語に絶えたるばかりの宮殿を見たることあり。其上方は精金に
て造れる如くに光を放ち、其下方は寶石より成れるが如かりき。而して其寶石の中には他に勝れて一
層の光耀を放てるもありき。諸房内部の裝飾に至りては、之れを記すべき言語なく、又知識あらず。
南方に向へる處に樂園あり、此に在る一切の事物亦前と同じく光耀陸離たり。ある處には銀の如き樹
の葉あり、金の如き果實あり、花壇にある花の色は紅霓の如く見えぬ。望極まる處に疆界あり、疆界

の彼方に又宮殿あり。天界の建築は實に美術其物なりと思はるゝばかり也。されどこは不思議の事にあらず、美術は實に天界より來ればなり。天人曰ふ、此等と其外無數の事物の尙一層圓滿なるものは皆主によりて天人の眼前に現はるれども、天人の之を樂しむはその目にあらずして寧ろその心にあること多しといふ。そは彼等は物毎にその相應を見ずと云ふことなく、而してその神的事物を見るは此相應に由ればなり。」

これらの言葉は淨土三部經の一節をみるやうな感じがする。しかし、スエデンボルグは阿彌陀經の「舍利弗よ。彼の佛の國土には微風吹きて諸の寶行樹及び寶羅網を動かすに、微妙の音を出す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如く。是の音を聞くものは、皆自然に念佛念法念僧の心を生ず」と云ふ風に Idealistic でなくてスエデンボルグの描寫は粗野なりアリスチックなところもある。

「われ天人と面談したる毎に、われは彼等の住所に在りて彼等と共なりき。其住所なるものは、わが地上の所謂家屋と正に相似たれども、その美しさは遙にこれに優れり。天人の住所には室あり、奥の間あり、寢室ありて其數頗る多し、又中庭あり、これをめぐりて花園あり、小樹あり田圃あり。天人の團體的生活をなせる處には、其住家互に接続し都會的に排列せり。大道あり、小路あり、廣辻あることわが地上の市街に異ならず。われは許されて、その道路を徘徊し、四邊を眺め、時にその家屋の

中に入りたることありき。こは實にわが覺醒充分なる時の事にして、わが内視は啓け居れり。」

これらの描寫は天界もこの世と同じであり、この世に即して相應を見るといふ著しい例である。しかしやはりこれらの文章の中にもどこかストリンドベルヒの「青い書」の「一節を讀む感じがする。ストリンドベルヒがスエデンボルグを愛讀したのは當然で両者が非常に似通つたものゝ見方をしてゐるところがある。

例へば「わが實驗より知り得たる所によれば、われ天界にて彼處此處と案内せらるゝに當りて、わが思ひ一たび塵世のわづらひの上に落つる時は、其時天堂にてわが見たる所、忽然として消え去りき、かくて塵世の爲に其の心を煩はすものは、即ち天界よりすべり落つるものなることを知りぬ。」（「靈界日記」三〇四）といふやうな感じ方はストリンドベルヒの非常に同感するところである。

スエデンボルグの三界の區別は要するに主觀者の心の状態である。例へば汚れたる淫欲の如きは人間のうちに地獄をつくり、純な愛（婚姻の愛とも彼はいふ）は人間の中に天界を作るのである。「一言にて曰へば自我の愛と世間の愛とは、主に對する愛と同胞に對する愛との正反對の位置にあり。故に自我の愛と世間の愛とはこれ地獄所屬の愛なり、また地獄において最も大なる勢力あり、而して人間のうちに地獄をつくるは實にこれなり。されど主に對する愛と同胞に對する愛とは天界所屬の愛なり、ま

た天界に於いて最大なる勢力あり、而して人間の中に天界を作るは實にこれなり。」

もう一つ精靈界といふのはこの中間にあるもので、眞の善人でもなければ眞の悪人でもない。いづれに往くべきか未決定の状態である。この精靈界には死後に導き入れられていづれにゆくべきか審かれるやうに記してゐるけれども、しかし死後に行はれることは必ずスエデンボルグの相應の説に依つてこの現世に於いてもあるべきであるから、死後の事は兎も角として、現世に於ける精靈界といふのは善とも悪ともつかない状態、優柔不斷にして撰擇的意志の決定せず、中ぶらりんな性格の状態である。

「故に智性中の諸眞理が意志中の諸善と和合せる限り、即ち人はかくして眞理を志して之を行ふ限り彼に天界ありとなすべし。そは上に言へる如く、天界とは善と眞との和合せるを云へばなり。されど智性中の偽りと意志中の悪と和合せんには、そのとき彼に地獄ありと云ふべし。地獄とは偽はりと悪しきとを和合せるを云へばなり。されど智性中の眞未だ意志中の善と相和せざるときは、彼を以て中程の状態にありとなす。今の世、人間は大抵此情態にをれり、彼は眞理の何たるを知り、又知識の上理性の上にて眞理を思惟し得れども、彼が實地其身に行ふ所の眞理に至りては、或は多く、或は少なく、或は絶無なり。或は悪を愛する心、即ち偽りの信仰よりして眞理に背ける動作をなすあり。故に

人は天界と地獄界との何れかに適従するところあらんため、死後先づ精靈界に導き入れらる。天界に昇るべきものには此處にて善と眞との和合行はれ、地獄界に投げらるべきものには此處にて悪と偽との和合行はる。何となれば天界にても、地獄界にても、不決定の心を有するを許さず、即ち智性に此を思ひて意志に彼を志すが如きを許さず、必ずや其所志を了知し、其所知を志願せざるべからざればなり。されば天界にては、善を志すものは眞を了知し、地獄界にては悪を志すものは偽を了知せり。是事由によりて、善きものは諸偽あることなく、眞理のみありて其善と一致し、調和す。しかるに悪しきものには、眞理なくして偽のみありて其悪と一致し、調和す。精靈界とは如何なるものなるかはこれにても明らか得べし。

精靈界にをるものは頗る衆し。そは精靈界は一切のものが始めて會合する處にして、此處にて先づ驗され、準備せらるればなり。彼等が此處にをるべき期限は一定せず、之に入るや、直ちに或は天界に上り、或は地獄界に投下せらるゝあり、或は此處にあること數週間なるものあり、或は數年なるものあり、されど三十年を超えて此處にあるものあらず。」

次の一節の如きは全くストリンドベルヒの「青い書」の一節を思ひ浮べさせるであらう。

「精靈界は山岳と岩石との間にある谷に似たり。此處彼處に曲折の處あり、又高き處あり、天界の圍

體に通ぜる諸門戸は、天界に入るべき準備を了へたるものならでは見るを得ず、他の者は之を發見することなし。精靈界より各團體に通ずべき入口は唯一なり、途を上るに従ひて分れて數條となる。地獄に通ぜる門戸は此に入らむとするものゝ爲めに開く、その外の者は見るを得ず、其開くを見れば薄暗くして、恰も煤多き窠に似たり、斜に下向して深坑に入る。此處に又數箇の戸口あり、是等の窠孔より惡臭鼻を衝きて出で來る。善靈は之を嫌惡するが故に怖れて走り去れども、惡靈は之を樂しむが故に、好んで之を求む。何となれば世にある人がおのれの自性に屬する惡を喜ぶが如く、死後に至れば何人も亦その惡に相應せる惡臭を嗅ぐを喜ばばなり。此點においては彼等を貪婪飽くなき禽獸、即ち烏、狼、豚の類に比すべし、彼等は腐屍、堆糞など嘔吐を催さんとするものを喜び、其の臭を逐ひて集る。われ嘗て一個の精靈が天界の氣息に遭へるとき、内邊の苦しみに堪へずして、一聲高く叫べるを聞けることあり、されど彼は其後地獄界の惡臭を嗅ぐに及びて、悠然として心に之を喜びぬ。」

「或る地獄には恰も火災後の家屋及び市街の焼け残りの如きものありて、凶靈此中に隠れ住めり。寛やかなる地獄にも恰も粗造の小屋に似たるものあり、或は連接して、一箇の都市をなして道路通ぜり、屋内に住める凶靈間斷なく鬭争し、抗敵し、相撃ち、相戦ふ。道路には盜賊、追剝横行す。或る地獄には只淫房のみあり、汚穢と糞土とに充てり、面を向くべからず。又茂れる森あり、凶靈此處に徘徊す。」

すること猛獸に似たり、又此地下に洞穴ありて、他の爲めに驅逐せらるゝときは彼等此裡に隠る。或は地瘠せて砂のみなる沙漠あり、或は岩石亂立して、洞穴を有せるあり、或は小屋の立てるあり、極度の責罰を受けたる凶靈は地獄より逐はれて此の如き荒野に投げ棄てらる。特に世にありたるとき欺巧を弄し誦詐を工むこと他に勝れて妙を盡くせるものは、此に來りて彼等が最後の生涯を營むものとす。」

スエデンボルグの思想を理解する上に必要な術語は「流入説」^{インフラックス}と「度合の説」^{ディグレイ}である。

流入といふのは本源即ち神より來るところの恩恵の如きものである。かゝる恩恵は純潔な愛の上に来るものである。純潔な愛はその心に善良さと眞實さがある。智慧と意志とが夫と妻のやうに一體となつてゐる。それでかゝる純潔な愛を「婚姻の愛」といつてゐる。

婚姻の愛は天界の婚姻に於いて最も純なるものであつて、地獄の婚姻といふものがあるけれどもそれは情慾があるのみで婚姻の愛はない。「内的人格より離れたる外的、自然的人格中に偽と惡との和合あり、此和合を地獄的婚姻と云ふ。われ許されて、惡よりせる諸僞にをれるもの間に成立せる婚姻即ち所謂地獄的婚姻なるものを見るを得たる事あり。彼等は情欲よりして相語り、相和合すれどもその内面にありては、身の毛のよだつばかり相互に憎惡の念に燃え、その激烈なること記述のかぎり

にあらず。」

二九二

天界の婚姻といふのは智性と意志との兩つのもものが和合して一心となるところにある。夫は智性を代表し、妻は意志を代表する。

「男たり、女たるを問はず、何人も智性と意志とを有すれども、男にありては智性を主とし、女にありては意志を主とす。而して人の性格を定むるものは、其の主とする所如何にあり、されど天界の婚姻には偏重する所なし、即ち妻の意は夫の意にして夫の智は亦妻の智なればなり。蓋し互に他の志す所を志し、思ふ所を思ふが故は兩者の想念と意志とは相互に感應し、随ひて和合して一體となる。此和合は事實上の和合にして、妻の意志は夫の智性に入り、夫の智性は妻の意志に入る。而して此の和合は殊に彼等相互にその面を見るとき生ずるものとす。何となれば、數々言へる如く、天界には想念及び情動の交通あるが上に殊に夫妻の間には相愛の故に此交通更に濃密を加ふればなり。是によりて天界における婚姻は如何にして成立し、この愛を惹起する所の兩心の和合とは如何なるものなるかを明らめ得べし。則ち此の愛は、互に己にあるすべてをあげて他に與へんと願ふ心なる事を明らめ得べし。」「天人われに告げて曰く、婚姻をなせる兩者の間に此の如き和合ある限り、彼等は婚姻の愛にをり、また之と同時に智慧と證覺と幸福とにをるものとなす。何となれば一切の智慧と證覺と幸福との

由りて來るべき源泉、即ち神善と神眞とは主として婚姻の愛の中に流れ入るものなればなり。されば婚姻の愛は神格が流れ入る所の平面そのものなりと謂ふべし、それは同時に眞と善との婚姻なるが故なり、眞と善との和合は智性と意志との和合の如くにして、即ち智は眞神を攝受し、これによりてその智性を成就し、意は神善を攝受し、これによりてその意志を成就す。蓋し人の志すところは即ち彼が善となす所、彼が會得する所は即ち彼が眞となす所なればなり。故に智性と意志の和合といふも、眞と善との和合と云ふも畢竟同一なりと知るべし。眞と善との和合は天人を成就し、又其智慧と證覺と幸福とを成就す。何となれば天人の天人たるは、如何なる度まで、彼の善は眞と和合し、彼の眞は善と和合したるかにあればなり、如何なる度まで彼の愛は信と和合し、彼の信は愛と和合したるかにありと云ふも同じ。」（天界と地獄三六九—三七〇節）

これらの言葉の中に「流入」や「度合」といふ意義をほぼ會得出来るであらう。

「主より來る神格が主に婚姻の愛の中に流れ入るは、婚姻の愛は善と信との和合より來るものなればなり」（三七一節）とあるやうに神格が流れ入るといふのは人間が神々しくなる事であつてそれはおもに純眞な愛に依るのである。スエデンボルグのいふ天人といふのもやはり人間であつて、福音書のラザロとか使徒ヨハネとかマグダラのマリヤ若くはカラマゾフのアリョーシヤといふやうな性格の人を

もつて象徴化されるところの心霊、さうした心霊の所有者が天人である。

「何人も天人を見るに、肉眼を以てすべからず。内的心霊の眼を以てすべきこと是なり。そは心霊は靈界に屬し、肉體一切の事は自然界に屬するに由る。同氣相求むるは固より同じきところあればなり且皆人の知る如く、肉體の視覺を司どれる眼球なるものは、頗る粗雜にして自然界の事物と雖もその至微なるものに至りては、顯微鏡を假らざれば見るを得ず、まして靈界の諸事物の如き自然界を超越せるものにおいてをや。靈界の事物を見得せんとせば、肉的視覺を離れて心霊の眼睛を聞かざるべからず。而してこは主が、人間をして靈界を見せしめんと思ひ給ふとき直ちに起り來る現象なり。されど此時、人は自ら肉眼を以て是等の事物を見るものとのみ思へり。アブラハム、ロト、ノア及び諸豫言者が天人を見たるときは、此くの如かりき、復活の後、諸弟子が主を見たるも亦此くの如かりき。」
(同七六節)

恚ういふ心霊の見方がメエテルリンクと共通のところ、彼をしてスエデンボルグを愛讀せしめた所以であらう。スエデンボルグの浩瀚なる著述には非常に繰返しが多く煩瑣に感じられるところもあるけれども、非常に美しい章句が隨處に見出される。

「愛は靈の融合なり。愛は靈火なり。人の心に活ける靈の熱あり、これを感じれば愛となる。愛の力

たるや斷絶することあらず、熱の如し、火そのものゝ如し。」

「愛は人の生命なり、故に愛は人そのものなり。」(以上二項「夫婦の愛」の處々に散見)

といふやうな愛に就いての言葉は美しい。

天界に於ける幼子が美しい女性なる天人に依つて養育される描寫なども際立つて美しい。

「天人は嬰兒の性情に順ひて彼等を樂しまし、喜ばしむると同時に、如何にして彼等をして天界の事物を吸ひ收めしむるか、又わが爲めに示されたり、われ許しを得て嬰兒を見たるに、彼等は麗はしき衣類に纏はれ、其胸邊を花束にて飾り、その纖弱なる兩腕をもこれにてからみたるが、其花は天界の色彩に輝きて最も愛すべかりき。われ又嘗て嬰兒が侍女に伴はれ、教母と共に樂園を歩めるを見たり。此樂園は頗る美はしく飾れたるが、樹木はまだ多からず、園亭あり、桂樹に蔽はれたる石垣あり、又道ありて奥庭に通ぜり。嬰兒は前に言へる如き装にて、この花園に入り來るや、花の唇々として入口の上邊に重なれるもの、最も心ゆくまで輝きわたれり。此にて彼等が悅樂の如何なるものなるかを明らめ得べく、又彼等は此の如き樂しむべき喜ぶべき事物によりて、無垢と仁恵とより來る所の諸善中に導き進めらるゝを明らめ得べし。而して此等の諸善は主が絶えず嬰兒の心中に注ぎ入れ給ふ所なり。」(天界と地獄三三七節)

最後にもう一節「天界に於ける婚姻」に就いて一言しておきたい。天界の婚姻といつても地上の男女の最も理想的なものを想像したものに過ぎないのであつて、スエデンボルグの相應の説に依つてそれら地上の男女の婚姻に靈的意味を見出さんとするのである。

地上の男女に肉體と肉體との抱擁の悦があるやうに、天界の天人と天人とも靈の抱擁の悦がある。さうして地上の婚姻は子孫を獲んために定められたものであるが、天界の婚姻は子孫の生殖に代はるに善と眞との生殖であるといつてゐる。さうして福音書中の出産及び生誕は靈的出産及び靈的生誕の義にして、すべて眞と善とに關せざるものはないといつてゐる。

スエデンボルグは凡て二つのものが一つとなることを婚姻といつたのであるが、さうした二つのものを結ぶ愛を「婚姻の愛コンジュガルラヴ」と呼んでゐる。彼はこの「婚姻の愛」を輝ける雲に纏はれた美しい少女をもつて象徴してゐる。

「純正なる婚姻の愛は最奥の天界にあり、此天の天人は善と眞との婚姻にをり、又無垢にをれり。劣等の天界にある天人は、其無垢なる度に従ひて亦婚姻の愛にをれり。何となれば婚姻の愛は、其自性より見れば、無垢の状態なればなり。是故に婚姻の愛にをる婚姻當事者は天界的歡喜を樂しめり。彼等の心中に此の樂しみを樂しむは猶幼子が無垢の嬉戯を樂しむが如し。何となれば物として彼等の心

を樂しましめざるはなければなり。これ彼等の生涯に屬する一切の事物の上に天界とその悅樂と共に流れ入るが爲めなり。故に婚姻の愛を天界にては美を極めたる事物にて表象せらる。此愛が、輝ける雲に纏はれて美妙言ふべからざる一少女によりて表象せらるゝをわが見たることあり。之をきくに天界に於いては天人は婚姻の愛よりして一切の美を獲得すと。此愛より流るゝ諸情動及び諸想念は金剛石の如き光を放てる氣體にて表象せらる。其輝くこと夜明珠の如く、紅寶石の如し、併して之に伴へる歡喜あり、心の内部を動かす。一言にて盡くせば、天界は婚姻の愛のうちに自現す。何となれば天界と天人とは共に善と眞との和合にして、此和合は即ち婚姻の愛を成せばなり。〔天界と地獄三八二節〕

ノフアリス

Novalis 1772—1801

ノフアリスといふのはフリードリヒ・ルドウイヒ・フォン・ハルデルベルヒの假名であつて、彼は一七七二年五月二日プロシヤのウイーデルステットに生れた。

ノフリアスは年代から言つてもゲーテの次に記すべきであるが、ゲーテにはたゞ一瞥を與へるだけですぐアミエルやドストエフスキイに移つてゆくつもりであるからこの第六講の終りにノフアリスを

附け加へておきたい。

二九八

それに恰度スエデルボルグの死んだ年にノフアリスは生れてゐる。その時分ウキリアム・ブレークは未だ年少であり、ゲーテはもう立派な青年になつて初戀の幾つかを経験してゐた頃であつた。ノフアリスはゲーテのウイールヘルム・マイステルなどに感化を受けることが多かつた。エナで哲學を學びウイツテンベルヒで法學を學び、そこを卒業したのは二十二才の頃であつたが、かの愛すべき少女ソフィーと戀におちたのはその頃よりである。

一七九四年の十一月であつた。ノフアリスは用事があつてグリユンニゲンの方へ旅行した。此處で彼の感情を捉へたところのものが彼の運命となつたのである。

ちゞれ髪の美しい少女は、若い詩人にとつて全くかのダンテが瞥見したベアトリチエであつたのだそれはソヒイ・フォン・キューンといつてまだやつと十三歳の乙女でロガツティンの快活な地主の繼娘であつたが、恰も彼の前に詩そのものゝ化身のやうに現はれたのである。

テイクは次の如く記してゐる。「この美しく驚くほど愛すべき姿を瞥見したとき、彼の全生涯は決定された。彼の心に刻み込まれ、魂の中にふきこまれた印象といふものは、彼の全生涯の内容となつた。……………」

我らの友のこの驚くべき愛人を見知つた誰でもが、此世ならぬ彼女がどんな優美さ、どんな愛嬌に溢れて立ちふるまひ、どんな美しさに輝き、どんな情緒や氣高さに包まれてゐたかを言葉にも筆にも表はし難い。かくてノフアリスは詩人になつた。さうして屢々彼はたゞ彼女のことを歌つた。」

彼が愛人に就いてその日記のうちに描いた姿は單に魅惑のあるお轉婆娘に過ぎない。しかしこの小さな「グリユンニゲンの薔薇」は二十二才の詩人の心に芽生へてゐた限りない無我無中の愛情をば急激に開き出でしめる機會となつたのである。この乙女と彼自身とを結びつけることを決心するのにつた十五分を要したのみである。一七九五年の春と夏とが彼が神聖なる毎日を經驗した彼の生涯に於ける花であつた。

愛人や彼女の愛すべきまた快活なる家庭に毎日往き來をした。ビングがいみじく注意したやうに、彼の愛に於いては次のやうな特徴が主張なされうる。それは彼の個人的な感情にとゞまつてゐるのでなく、彼は彼女をば理想として永遠のものにまで擴げてゐるのである。

「それは愛の無限な理想であり、スピノザやチンツェンドルフの愛であり、それは彼によつて實現さるべきものであつた。この特徴は彼にとつて全く本來的であつた。彼がこゝではひとつの普遍なる愛としてソフィーに對する愛を擱んだのであるが、やがてそれは後にあらゆる妥當な宗教の本質として

彼の基督教をば掴むよすがとなつたのであつた。——しかも最も高い個性的色彩を帯びた基督教であつた。」

彼のソフィーに對する愛に於いて浪漫的な深祕が色深くあるが、次の格言が告げられる。

「女性はひとつの愛すべき深祕である。それはたゞ掩ひ隠されてゐるだけで決して封鎖されてゐるのではない。——理智がたゞ女性と愛とを分離させる。女性の美しい深祕は言葉に盡し難いほど心を惹くものであるが、それは母性の感情や來世の豫想にあらはれる。それらは彼女の衷に光りそめてさうして彼女からひろまりゆくのである。女性は來世の最もふさはしき似姿である。」

「そこには出來うる限りの限りなき刺戟の痛みがある。」とノファリスは「思索の斷片」の中に記してゐる。彼の感情はかゝる限りなき刺戟の痛みにまで適はしかつたのである。彼の愛は痛む時に最も純潔であり、深刻であつた。それで彼が彼の救世主にまで献げた宗教的な愛は、かゝる惱みの特別な深さに依つて觀察すべきであることが判る。「我々は神を愛するならば、彼は扶けを必要とするものでなければならぬ。」しかしてかゝるノファリスの感情は彼にとつてやがて悲しき彼の宿命となつたのであつた。即ちソフィーが病ひに侵されたのである。暫時の間快方に赴くやうに見えたが、しかし手術の後だん／＼いけなくなつて往つた。ノファリスは父から彼の婚約に就いては同意を得てゐるの

であつたが、彼はまるで自暴自棄の賭博者の賽のやうにその悦びも哀しみも全く花瓣がこの世に落ちるか彼の世に落ちるかに懸つてゐるやうであつた。彼は次のやうに記してゐる。

「私は空間の中の形骸以上に愛してゐる。また定めない一期の生命が続くよりも、より永く愛してゐる。」

「私がソフィーに對して抱いてゐるのは宗教であつて戀愛ではない。」

「出來うる限りを盡したといふことで慰めつゝ、この聖なる大濤の中にある間、この宿命の夢の世を忘れんが爲めに、人間の智識の満潮の中に出來得る限り深く私は沈みゆく。此處では失はれた希望はたゞ彼處では私の爲めに花咲く。此處の退歩は彼處の進歩である。傷害する劍は彼處では魂を入れる魔杖となる。地上の薔薇の瓶は天上の母國である。私の幻想は私の希望が沈みゆくまゝにひろがつてくる。——私はいつか覺束なくなつた自分の存在を経験したことがあつた。さうしてその感じは恐らく來るべき世界の最初の生命感であつたと思ふ。」一七九七年の三月十九日にソフィーの生命は果敢なくなつた。ノファリスも苦痛から死ぬるばかりであつた。さうして終日閉ぢ籠つて誰にも逢はなかつた。

「彼女は死んだ。私もまた死んだのである。この世は荒寥さびしくなつた。」

「深い明るい休息の中に、私の憩ふ瞬間が待たれる。」

「私は若き詩人として悦んで死ぬ。」

ソファリスは七首も毒をも擇ばなかつた。血腥ぐさきことを彼は避けた。彼はその情感に於いて死んだのである。——しかもそれは彼の受くべき宿命であつた。個人的生命の不滅に對する彼の信仰は堅固になつた。かくて彼にとつて死は愛するものと彼を、永遠にひとつに結ぶ願はしき友となつた。ソフィーの死後その悲しみに堪へずして歌つたところの「夜に寄する讃歌」の終りに「死への憧憬」といふ一節がある。

實際彼は其の後たゞ四年生きのびたのみである。

ソフィーの死後三十七日目の日記に

「ソフィーに對する私の愛はひとつの新しい光を射してくるやうに思はれる。ソフィーは漸次よりよくなつてゆく。私はたゞなほ／＼彼女の裏に生きなければならぬ。たゞ彼女の追憶の中のみ私の眞實な悦びがある。」その翌日には「朝、元氣で氣分がよい。永いことソフィーのことを思つた、快く思ひのまゝに。階下ではみんなの話し聲がする。しかしもう一度思ひ耽つた。夜は彼女の死の生き生きした印象。」

四十三日目の四月三十日の日記には

「夜は不安な睡りであつた。翌日にかけて降りつゞけの雨。早朝出来るだけ泣いた。食事後もまた、一日中清く彼女の追憶に耽つた……。」

五月十日のには

「朝餉の後、花園の中に美しい散歩をした。天候は晴れやかであつた。彼女に對する生々した思ひ出。私は花を摘んで彼女の墓へ持つて往つた。私は冷靜であつたのだが、やはり泣いて仕舞つた。暫く彼女の墓に坐つてゐた。寺院の鐘が鳴つて來た。私は歸つて來た。」

五月廿一日のには

「……感覺的な苦痛が遠退けば遠退くほど、ますます精神的な哀傷が増して來る。またますます靜かな自棄が深くなつてくる。この世はだん／＼見知らぬところとなる。周圍の物事は私にとつてますますどうでもよくなつて來た。……。」

六月六日即ち八十日目のには

「今晚、庭で、快い、明い昂揚した回想の時を持つた。苦痛がなくなれば誰もはや愛さなくなる。愛するものはいつまでも缺陷を感じて居り、恒に傷みが開いて待つてゐなければならぬ。神はいつも

この愛すべき言ひ難き痛み、この哀傷にみちた思出、この強き憧れ、この斷乎とした決心、このゆるぎなき信仰を私に支持してくれた。私のソフィーなしには私は虚無だ。彼女あれば總てだ。」ノファリスに就いてはこれ以上多くの事を語らないであらう。ノファリスの一少女に對するかうした愛こそは彼をして神祕説の醍醐味を深く體驗せしめたものである。

神祕説といつても要するに恚うした愛の悦びや悩みを底深くくゞることに外ならない。彼の主著は「ハインリヒ・フォン・オフタアチンゲン」普通には「青い花」と呼ばれてゐるものであつてメエテルリンクなどの象徴主義の先驅をなしてゐる。

「ザイスの使徒」といふのは短かいものではあるが、メエテルリンクは「青い花」にもまして最も深い神祕思想を現はした稀有の寶玉であると激賞してゐる。

ノファリスは一八〇一年四月二十五日二十九才を一期としてワイゼンフェルズの地にてとこしへの眠りについた。

第七講

近代神祕思想の諸相

ゲーテの宗教觀——アミエルの日記——ドストエフスキイの罪の赦し——トルストイの神觀——メエテルリンクの象徴的神祕思想——ロダン及び白樺派の自然觀

文藝復興は中世紀から近世に移りゆく過渡期を指していふもので各國とも多少年代を異にしてゐるけれども概して十五、六世紀の頃のことであつた。

スコラ哲學はデカルトあたりより近代の哲學に移りゆき、文學藝術は埋れたる希臘古典の復興となり、宗教はルーテルや其の他の人々によつて改革が行はれ、歐洲の天地は面目を一新するやうになつた。

要するに文藝復興は中世紀といふ殻から脱して新しい人間的生活を始めようとする人道主義の解放運動であつた。神祕思想史に於いても宗教改革期の後にはやはり人道主義の色彩を帯びて自然や人間

生活を尊重する傾向は著しくなつた。中世のやうに靈的なものは肉眼を閉ぢた時啓示されるといふやうな消極的な考へ方から解放されて、この兩眼を以て自然や現象界を見ることを努めるやうになつた。かくてあらゆる自然界の中に神を視ることゝ、またあらゆるものは神の中にありと視ることが著しくなつた。

彼らはより深いものを視ながら、原始の自然宗教の課程へ復歸したのである。さうしてこの自然界に靈的な意義を見出さんとしたのである。すなはち自然や現象に即して而も自然や現象以上に其の立場を持つ靈の世界を見るのである。自然はもはや神から追放された場所、若くは欺瞞の現象としては考へられなくなり、それは神の活ける衣裳と思惟されるのである。

文藝復興の運動はゲーテに到つて最も大きな果實を結んだと云へると思ふが彼は一八一二年（ブラウニングの生れた年）の日記に斯う書いてゐる。

「ヤコビの『神のことどもに就いて』の書は自分に益を與へない。『自然は神を蔽す』と云ふ命題のある書（いとも親しき友の）を如何して自分は歓迎し得るか。我が純粹な深い、生得の、そして精練せる觀念により、明らかに自然のうちに神を、神のうちに自然を見るやうに私に教へ、斯くて此の觀念をして我が全存在の基礎たらしめたのは自然でないか。斯く奇怪な、そして一方に偏した制限された

解釋が我がいたく愛する心を有する此高貴な人物から私を離れしめざるを得ぬのも自然でないか。しかし私は我が苦しい失望にぐづぐづせず、我が古い靜養所に隱家を求め、數週の間スピノザの「倫理」を我が日毎のもてなしとした」と。（中山氏詩聖ゲーテの一五二頁）

ゲーテは汎神論者であり、同時に唯神論者である。彼は正統派の信條や儀式に何の興味も持たず、正統派の教會から離れた近代的基督教徒の最初の最も大きい典型であつた。しかしゲーテは背教者ではない。彼は廣い立場に立つ基督教徒である。「エツケルマンとの會話」（一八三二—一八三三）の中に彼は斯云つた。

「我等は今一度確乎たる足もて神の地に立ち、神の與へ給ひし人間性に於いて我等を認識する勇氣を有す。よし靈的教養が進み續くるとも、自然科学がいよ／＼廣さを増し、深さを大にするとも、また人間の靈魂が開展するとも、福音書中に光り輝くところの基督教の崇高さと道德的教養とに、決して超越することがないであらう。」

かゝるゲーテの自然に對する見方及び基督觀は動かせないものとしてこれ以外に出ることは出來ない。ゲーテ以後の思想家なり眞の宗教家はみなゲーテの見方に一致するところを持つ。

「何か物を啓示するやうな、神聖な恐怖を起させて

我らの善い方の靈を呼び醒さうとする

深い夜に掩はれた

田畑から俺は歸つた

すべて荒々しい振舞をさせようとする

粗暴な欲望は寐入つて了つた

今は博愛の心

神の愛の心が動いてゐる」(ファウスト第一部第三場)

恚うした一節を短かく引いてもゲーテの零圍氣は色濃く出てくる。自分は或日の日記に次のやうな一節を認めた。「四月一日。復活祭の朝。

講壇に立つて談しをしてゐると急に野原が慕はしくなつた。恚うした薄暗いステエンド・グラスの會堂の中でアーテフィツシャルな崇嚴らしい空氣はほんとうに嫌やだ。こんな中で復活祭は堪らないといふ感じがした。自分は若し勝手に振舞つてもよいものなら、そのまゝぶいと講壇から降りて親しい二三人の兄弟姉妹と郊外の草原に出て往きたいと思つた。さうして雲雀と一緒に復活祭の歌を歌ひたいと思つた。おゝ自然の恵み、なぜ我々はそれを自ら拒んでゐるのであらうか。大空をみよ。野の

花をみよ、そこには屋内に燻つて本をよんでは決して得られない新鮮な靈感がある。何かは知らぬ生命の潤ひがある……。」

アミエルが一八五二年四月二日の日記に次の如く記してゐる。

「何といふ快き散歩であらう。玲瓏たる空、赫灼たる朝陽。湖上を無限に鎖す柔き霧の外、凡ゆる色が輝き、凡ゆる輪廓が浮き出てゐる。野におりた薄霜のため、緑なる木小屋の端は彫金のやうな感じを與へ、全體の景色は——また若芽は出ぬ——健康と、力と、青春と、爽快との氣に充ちてゐる。『浴みせよ。弟子よ。汝の渴ける魂を、此の曙の露の中に』と、ファウストは語る。全くその通りである。晨の空氣は、血管にも髓にも新鮮な、喜ばしい力を注入して呉れる。若し毎日の日が生活の繰返してであるなら、毎朝はさながら、現世と結ぶ新たな契約の徴である。朝は恰も小兒の眼に映る如く一切が清新であり、輕快であり、純朴である。朝は靈的眞理が大氣の如く、一層透明となる。吾々の肉體は若々しき木の葉の如く、一層熱心に光明を吸収し、大氣を呼吸して、地上のものを採る事が少なくなる。若し夜と星空とが瞑想な魂に向つて、神と、永遠と、無窮とを語るものとすれば、曙は計畫の時、決心の時、事業初めの時である。夜の沈黙と『蒼穹の寥々たる静けさ』とは魂を驅つて自己省察に向はしめ、晨の大自然の力と歡ばしさとは心内に擴つて生命と生活とにいそしませしめる——春

は吾等を待つてゐる。櫻草と堇とは既に彼女（春をさす）の來降を歡呼してゐる。桃の木には性急な花がちらほら咲き初めた。梨と紫丁香花ライラックの脹らんだ蕾は遠からず開花すべき事を示してゐる。忍冬ももう緑になつた。」

アミエル (Henri Frederic Amiel 1821—81) はスキスの思想家であるが彼の日記 *Journal Intime* は神祕思想にとつて欠くべからざる重要な文献とされてゐる。それは原稿紙一萬七千枚の大部のものであるが、トルストイはその抜萃を刊行した。

アミエルの次の文章は神の内在の神祕的教理を非常によく説明してゐる。それはエツクハルトなどの神の火花と共通のものである。

「生命の中心は、思想にもなければ、感情にも、意志にもない。また考へたり、感じたり、意欲したりする限にては意識にさへもない。なぜなら道德的眞理はすべてかゝる方法にて透徹され、把握されたかも知れぬ。しかもなほわれ／＼を遁れさるのである。意識よりも更に深みにわれらの存在そのものがある。われ／＼の眞の實體であり、本性である。

この奥祕の世界にまで入りし眞理、われ／＼自身のものとなり、自發的に思はず知らずに、また無意識になり——眞理が眞のわれらの生命である——言葉を換へて言へばわれらの所有より以上のもの

である。

われ／＼が其の眞理とわれ／＼との間に何んらかの間隙を見出すことの出来る間は、われ／＼はその世界の外に止まるものである。思想や、感情や、意欲、意識的生活は未だ全き生活ではない。然し平和や安息は、生命即ち永遠の生命に於いてのみ見出さるゝものである。而して永遠の生命は神の生命である。神である。それ故に、神になることは人世の目的である。かくてこそ、眞理は失はるゝことなく、われ／＼のものであると言はれることが出来る。なぜならそれはもはやわれ／＼の外にあるのではない。またはわれ／＼の裏にあるのでもない。否われ／＼はそれである。そしてそれはわれわれである。われ／＼自身が神の眞理であり、意志であり、動作である。自由は、われらの本性となつた。被造物はその創造者と一體となつた。——愛によつての一體」 (Inge Christian Mys. の一五六頁の脚註)

アミエルの死んだのは一八八一年であるがその同じ年にドストエフスキイが死んだ。同じ年に死んだといふことは何んら思想上に關はりもないけれども、たゞ年代の記憶に利するところがあるから一寸注意しておく。

ブラウニングもほゞアミエルと同年代の人である。

ドストエフスキイの罪の赦し

Fiodor Dostoiwski (1822—81)

プロテイノスやエツクハルトやメエテルリンクなどの一流の神祕思想家の理論に共通してゐるものは魂の奥底に神の如きものがある。それは決して罪にも汚れにも染むことのないものだといふことである。

エツクハルトの神の火花とメエテルリンクのペアトリス尼にみるやうないかなる罪にも汚されぬ心靈はあらゆる神祕思想の根本をなすものであるが、ドストエフスキイはかゝる神祕家の組織をとかないけれども、彼の中心にある思想はやはりかゝる神祕家の思想と共通のものである。ドストエフスキイは理想主義者であるが、メエテルリンクの象徴的なるに反して寫實的な筆をもつて深い體驗をば深刻に描寫してゐる。片上氏譯の「死人の家」の自序の一節をこゝに採録しておきたい。

「深刻徹底した解剖の究め行くところ人間の心の奥底には直に人間らしい強い、然しながら軟らかな

やさしい愛すべき純な性質が潜み流れてゐる。どんな暗い汚れた踏み躪られた人間にでも、その心の奥底にはやはり盛り返して伸びてゆく事の出来る、信じたり愛したりすることの出来る尊い限りない生命の力が消え失せずにある。陰惨な囚人生活のどん底を究め盡してそこに恐ろしい暗い人間の深淵を見ると同時に、尙且つその根柢に破壊すべからざる人間の生命の光と力とを認めざるを得ない。」

ドストエフスキイその人がかうした暗いいたましい人生の深淵を潜つて、そこから涙をもつて描いてゐる人間生活は不思議な光を近代の人々に與へてゐると思ふ。明るい世界のみをみてゐる人は深い愛も深刻さも必要でない。しかし暗い陰惨な人間生活に光を認めるには深い愛がいるのだ。ドストエフスキイの愛は人が目もくれなかつたところのものに、世にも貴いものを見出して「こ。ん。な。に。も。美。し。い。も。の。が。」といつて我々に示してゐるのである。

彼ほど汚された女性や、虐げられたる暗い醜惡な現實の中に美を見出し、愛を感じさせるやうなものを描いた人はない。愛のみが覗きうる世界を彼ほど深くきり拓いて深刻に描寫しえた人は少ない。彼は信仰と愛とを同じものと見てゐる。愛する深さに比例して神が會得されるのである。愛なきものは神を知らないのである。

アリョーシヤが「ヴオリテルは神様を信じてみました、ほんの僅かしか信じませんでした。従つ

て人類に對する愛も僅かだつたらうと思ひます」(米川氏譯カラマゾフ下卷一三三四頁) といつてゐる。

神祕家の説くやうに魂の裏にはいかなる罪惡や汚辱にも汚されぬ處女のやうに純潔なものがあるといふ實感を際立つて美しく述べてゐるところは神學生のラキーチンがアリョーシヤを連れてグルーシヤのところへ訪れて往つたときの場面である。アリョーシヤと並んで座つてゐるグルーシヤは其の目が輝き、唇は笑つてゐた。併しそれは人の好い、樂しげな笑方である。アリョーシヤはかういふ善良な表情を、彼女の顔に發見しようとは思ひ掛けなかつたと記してゐる。さうしてグルーシヤがアリョーシヤの膝の上へひらりと身を跳らして飛び上つて、さうしてしなやかな手を廻して彼の首を抱きしめたときに、アリョーシヤの胸に湧き起つたものは思ひ掛けない特種な感情であつた。「それは此の女に對する異常にして強烈な、而も純潔なる好奇の感情であつた。さうしてそれには何等の危惧もなく毫末の恐怖も交つてゐなかつた」ものである。

ドストエフスキイはアリョーシヤといふ美しい性格を恰もメエテルリンクが心靈其のものゝ姿として美しい女性を描いてゐるやうに、人間の良心そのものゝ象徴として描いてゐる。さうして事實アリョーシヤのやうな人はこの現實の世界に存在しないことはないのである。

「わたしはね、アリョーシヤ、根性の汚い意地の悪い女だけれど、何うかするとあんたを自分の良心

の様に眺める事があるの。『今頃あの方は(アリョーシヤのこと)わたしを汚れた女だと思つて輕蔑してゐるに相違ない』とそんな事ばかり考へるのよ。』といつてゐる。しかしアリョーシヤは彼女の中に罪のない無邪氣な潔白な女性を見出してゐる。「それよりかまあ此の女を見給へ、此の女が僕を憫んで呉れたのが君にも分つたらう? 僕は此處へ來た時意地の悪い女を發見する覺悟でゐた——第一自分からしてさういふ所へ行き度くなつたのだ。何故つて僕が卑劣でやくざだつたからさ。所が意外にも誠實な姉を發見した、愛する心を發見した、寶物を發見したのだ——此の女は僕を憫んで呉れた——アグラフエーナさん、僕はあなたの事を言つてゐるんですよ。今あなたは僕の心を鼓舞して呉れました。」アリョーシヤの唇は慄へ息は窒息^{つひせ}つて來た。彼は言葉を休めた。

「どうだ、二人ともすつかり逆上^{のぼ}せて了つてらあ……両方ともめそ／＼しちやつて、今にも泣き出しさうぢやないか」とラキーチンは口を尖らしていふと「本當に泣き出すわ! 本當に泣き出すわ! 此の人はわたしを姉と言つて呉れたのよ、わたし決して此事を忘れやしないわ!」とグルーシヤは感激する。

アリョーシヤもまた涙聲になつてかう叫んでゐる。

「僕が此處へ來たのは自分の身を破滅さして、何、「構ふもんか!」といふためだつた。これと言ふの

も僕の了見が狭いから起つたのだ。所が此の女は五年間も苦しみ通したにも拘らず、誰かが始めてやつて来て、誠の言葉を言ふが早いか——もう一切の事を許し、一切の事を忘れて泣いてゐるではないか。此女を辱めた男が歸つて来て呼んだだけで、此女は喜んで其男のところへ急いでゐるではないか。決して小刀なんぞ持つて行きやしない、持つて行くものか！ ところが僕にそんな事が出来るだらうか？ ミーシャ、君はそんな事が出来るかどうか僕にはわからないけれど、僕は何うしても出来ない。僕は今日たつた今この教訓を會得した。此の女は愛の點に於いては僕より上だよ……此女が今話した事を君は以前此の女から聞いたことがあるかい？ 無いだらう、聞かないだらう。若し聞いた事があれば、疾に理解してゐる筈だものね……それから一昨日侮辱を受けたもう一人の女、あの女にもグレースヤを許して貰ひたいもんだね……いや全く許して呉れるだらう。若し事情を知つたら……きつと許して呉れるに相違ない。……此の女の靈魂は未だ本當の平和を得てゐないのだから、いたはつて上げなくちやならん。此の靈魂の中には確かに寶があるのだ……」八五三頁

もう一つ附け加へて置かなければならぬ大事なことは「罪のゆるし」といふことである。人の魂に何ものにも滅ぼされない純潔な心靈があるからこそ説き難い贖罪といふことが起りうるのである。グレースヤはアリオシヤに恚ういつてゐる。

「……此人は私を憐んで呉れたはじめての人なの、只だ一人しかない人なの！ アリオシヤ、天使、何故あんたはもつと早く来てくれなかつたの」と彼女は前後を忘れたかの様に男の前に跪いた。「わたしは今迄あんたの様な人を待受けてゐたのよ。誰か来て「許してやる」と言つて呉れさうな氣がしてならなかつたわ。わたしのやうな汚れた女でも、忌しい目的なしに愛して呉れる人が、誰かあるに違ひないと信じてゐたわ……」(八五八頁)

グレースヤは汚された女であり、自分でも汚れた女であることを人一倍自覺して苦しんでゐる。それなのに他の凡ての人は彼女の痛いところに觸つて平氣であるやうな神経の鈍いものか、それとも意地の悪いものばかりであつた。そしてまた世の宗教家や道徳家といふものは「おまへは汚れた罪の女である。その罪より脱せよ」とがめだてをして救ふのではなくたゞ密くだけである。彼女を苦しめるだけである。しかしアリオシヤは「誠實な姉を發見した。愛する心を發見した。寶物を發見した。」といつてゐる。二人は眞實な詐りのない心で姉と弟のやうに愛し合ひ理解し合つたのである。グレースヤがアリオシヤを愛してゐる限り、グレースヤは純潔な女であり善良な罪のない女である。若しグレースヤの心の中にあるアリオシヤのやうな純潔な性質を持つてゐないならば、どうして彼女は彼を愛することが出来るか。彼女の捨鉢な心の中にもやはりアリオシヤのやうな性質が亡びな

いでいつまでも残つてゐるのである。たゞそれを認めてくれるものがなかつたのである。白痴の中にもこれと共通の場面がある。

ナスターシヤはグルーシヤ以上の豪膽な女である。然し彼女は良心そのものであるムシユキン公爵に恚ういつてゐる。「實を言へば私だつてあなたの事を空想しなかつたわけでもないの。それはあなたの言ふ通りなの。わたしがまだあの男に養はれて田舎に五年の間、ほんとの一人ぼつちで暮して居た頃、わたしよくあなたの事を空想したわ。考へて考へ抜き、空想して空想し抜く事があるでせう。するとわたしは正直で人のいゝ親切な、そして矢つ張り少々まのろまな人を想像するの。

そんな人がやつて来て、「ナスターシヤさん、あなたには罪がない、僕はあなたを尊敬します。」と言ひさうな氣がしてならなかつた。よくさうした空想に苦しめられて、氣が狂ひさうになる事も有つたわ……ところへ此の男がやつて来て、一年に二月づゝま返つて行つて汚ららしい、恥しい、腹の立つ、みだらな事をして歸つて行くんです。」

罪に汚されたかゝる女性が常に賣女として心の奥では誰もから蔑れてゐた中に、アリョーシヤやムシユキンに逢つて始めて光に浴したやうに埋れた心の奥底より純潔な眞人間らしさが呼び醒されてゆくところは實に福音書的小説である。我々はルカ傳七章に載せられたるかのマグダラのマリヤが耶蘇のみ

足のもとに跪いて涙もて足をうるほし頭の毛をもつて之を拭ひ、接吻しながらナルダの香油を抹つた記事を思ひ起さずに居られない。

彼女はグルーシヤやナスターシヤに劣らずに豪膽で傍若無人である。つかつかと耶蘇の足もとに進みゆくところなど、パリサイ人はあつけにとられてみてゐたことであらう。その女が誰であるかをパリサイ人が氣附いたときに彼女は汚れたいまはしい女として八方から侮蔑の眼を向けられたに違ひない。しかし彼女はそんな人々が自分の周囲にゐることも感じないかの如く耶蘇を愛するあまりにたゞ跪いて咽び泣いてゐるのみである。

耶蘇は恚ういつてゐる。「この女の多くの罪は赦された。なぜならその愛することが大きいからである。」(改譯聖書參照もこの譯はあやまり)さうして耶蘇は此の女に「なんぢの罪は赦された」といつてゐる。ドストエフスキイのカラマゾフや白痴の大部分は福音書のかうした短い記事の演繹であるといふべきである。耶蘇の深い人格とその愛に接して、たゞそれだけで彼女は明るくなつたのである。どんなに純潔な愛で耶蘇を慕つたか。グルーシヤがアリョーシヤに對する愛もさうであつたがそれは明かにこの世の性にからまる愛とは違つたものである。

マグダラのマリヤが耶蘇を愛するといふことゝその罪がゆるされるといふことゝは同一のことであ

る。愛したから罪がゆるされたのであり、罪がゆるされたから愛したのである。さうして多く赦される爲めには、多く愛さなければならぬ。

マグダラのマリヤの外にも罪ある女はあつたかも知れない。しかし耶蘇に接して耶蘇を心から愛しないものは耶蘇といへどもその女の罪をゆるすことが出来ない。

アリョーシヤが「愛の點に於いて僕よりも上だよ」と告白してゐるやうに心靈は愛する権利を決して放棄しはしない。いかに社會から爪弾きされる罪ある女にでも、愛したり信じたりする貴い性情は何ものにも破壊されずに残つてゐて呼び醒ましてくれるものをいつまでも待つてゐるのである。さうして絶えず尋ね求めてゐるならば屹度逢ふべきものに逢ふことが出来るのである。

實際心靈ほど、清い美しいものに敏感なものはない。一寸した愛の相圖をも決して見通すことはな

トルストイの神觀

Leo Tolstoy (1828—1910)

トルストイは福音書の山上の垂訓にあらはれた深い言葉に誰も感じなかつたやうな感激をもつて跪

いた人である。人間が語つた言葉のうちでそれ以上に深い言葉を彼は知らなかつたからである。

一言にしていふと、トルストイは人間の中にあらはれた神といふものを強く感じ、またそれに感激した人である。たとひ無學な百姓や、無神論者の中にであらうと、その中に神があらはれた時は、どんなときでも跪いて涙を流した人である。

どうして人の中に神があらはれるかといふのに、それは非常に單純である。たゞその人に眞實な愛が動いたときである。彼の民話「愛あるところに神います」の中の靴屋のマルチンにしろ「二人の巡禮」の中の農夫のエリシヤにしろ、彼らこそは眞に神をみ、彼らの心に神が動いてゐたのである。饑饉で飢えてゐる人々に旅の途中で自分の巡禮の路銀をみんな與へて仕舞つたエリシヤをば、救はれた人々があとになつて「今日が日まで、それが人だか神さまのお使だかわしには解りません。」といつてゐるが、トルストイは實際エリシヤがああ愛の心に咽びながら報いを求めずに善行をしたときに、彼は神の使であつた、否神が彼の心の中に働いてゐたのだ。エリシヤもまた學者パリサイ人の中に立つて「天の父は今にいたるまで働き給ふ。我もまた働くなり。」といふことを宣言しても差支ないとトルストイは確信したのである。

詩人ハイネはミロのヴェキナス像をみてその美にうたれて卒倒したといふことであるが、果して事實

であるか、どうかは知らないけれども、トルストイは神のあらはれ動いてゐる人間をみるときに涙に咽びつゝ事實卒倒した。

次の記録は實に驚くべきものである。八十歳のトルストイにこんなにまで強く感激が出来るのであらうか。

「三月二日今日午後四時にトルストイは、發作的に失神した。其時彼は、ヴィクトル・ユーゴの物語「一無神論者」の翻譯を口授してゐたのであつた。その物語は、トルストイに強き印象を與へたやうに思はれた。物語の取扱つてゐるのは、神に對する信仰を失くしたので僧服を脱ぎ捨て、唯物觀を同胞に説く一人の男である。その唯物觀によると、世の中には、神も靈魂も、理想も存在しないのであつて、人世唯一の目的は利己的な願望と欲求を満たすにあると云ふのである。この論を説いてから五ヶ月目に彼は、旅行中難船の災難に出遭つた。すると彼は、彼の理論をすっかり忘れて、世の中にはある唯一の目的がある事を知り、溺死せんとする婦人を助けん爲めに、海中に飛び入つて、その際死んで終つたのである。この物語の最後の文句の所でトルストイは泣き始めた。そして口授を中絶して聲高く嗚咽した。それから私が蓄音機の方にかゝてゐる爲め室内を二三度往來した。突然彼の足音が聞えなくなつた。本能的に私はあたりを見まはした。すると老人がゆつくりと後ろに倒れるのを見た。

突進して上衣を掴んだ。しかし、止める力がなかつた。私の腕に抱へられたまゝ彼は床の上に倒れて行つた。私の呼ぶ聲に召使が一人来て、二人で病人を長椅子の上にあげた。トルストイは椅子の上に腰掛けたが、しかし知覺はまだ戻らなかつた。聯絡のない言葉を喋つた。五分程で彼は正氣に返つたしかし、何が起つたのか少しも思ひ出す事が出来なかつた。夕方食堂へ出て来て、晝食を命じた。しかし、極僅かしか食べなかつた。」

もう一つトルストイの神觀に就いて述べておかなければならない特徴は「神は人間の要求である」といふことである。つまり神を要求する人間の要求そのものが神なのである。

「ゴリキイの見たるトルストイ」の一節に

「彼が私に讀めとて渡した彼の日記の中に、私は不思議な警句にぶつかつた。「神はわが希ひなり」と。

今日、その日記を彼に戻しながら、私はその意味を質した。「未完成の思想だよ」と彼は云つた。その頁を眺めて、眼を閉ざしながら、「私は斯う云はうと思つたに違ひない。「神とは私が神を知りたいといふ希ひである」……否、さうぢやない……彼は笑ひ出した。そしてその帳面をまるめて寬衣ブルイヌの衣囊に收めた。」と書いてゐる。

たしかにそれは未完成の思想である。なぜなら要求そのものは決して完成されることのないものだからである。

トルストイは最後まで神を求めて苦しんだ人間である。「神父セルギイ」はそのまゝ彼の内面的生活の記録であらう。神父セルギイはミゼラブルのミリエル僧正やカラマゾフのゾシマ長老のやうに聖者になり切れないで最後まで人間的な悩みで苦しんでゐる人である。しかもミリエルやゾシマにまさるとも劣らぬほどの聖さと尊敬と愛着とを感じしめられるのである。「神父セルギイ」のやうな人物はトルストイでなければ描けない性格である。セルギイは最後の方に慙ういつてゐる。

「さうだ、一寸した一つの善行の方が、例へば、報酬を考へずに、人に一杯の水をのませる方が、己が人の爲めに行つた奇蹟よりよつほど貴いものだ。だが、己には神に仕へようといふ眞實の希望がなかつたのだらうか？」とセルギイは自問した。するとその答へはかうであつた。「いや、あつた。けれども其の希望は世俗の名譽に培はれて汚れて了つたのだ。さうだ、己の様に世俗の名譽の爲めに生活する者には神は無い筈だ。己はこれから神を尋ねよう。」

もう一つ引照しおきたいのはトルストイが「アミエルの日記」の序文として書いたものゝ一節である。

「パスカルは言つた——『人には三種しかない。第一は神を見出してそれに仕ふる人、第二は神を見出さずして、それを求める事に没頭してゐる人、第三は神を見出しもせず、又求めもせざる人。第一は道に叶ふ幸福な人である。第三は道に外れた不幸の人である。第二は、不幸ではあるが道に叶つた人である』——

パスカルが第一の人と第二の人との間に設けた區別、——彼の言ふ如く、神を見出して全心を擧げてそれに仕ふる人と、又神を見出さずして、全心を擧げてそれを求むる人（柳田氏譯書パスカル感想録一三二頁参照）との間に存する——區別は彼が想像したほど大きくないばかりか、全然、存しないものであるとさへ、私は考へてゐる。凡ての愛情と苦惱とを擧げて、神を求めてゐる人は、既に神に仕へてゐるのだと、私は考へる。」

こゝにもつともトルストイらしい態度がある。トルストイの一生は最後まで神を求めて苦惱してゐる大地そのものゝ呻きのやうな感じがある。耶蘇が十字架の上で

「我が神、我が神」と神を叫び求めたときほど、深く又強く神は呼ばれた事がなかつたらうし、従つてあの時ほど、深い暗黒から神はこの世に呼び起されたことがなかつたらうと思ふ。

ある無政府主義に傾いた男が利己的な氣持から個人の自由を論じたとき、トルストイは腹立た

しげに眉を寄せて、口を噤んでゐたが、やがて靜かに慙う附け加へた、とゴリキイは記してゐる。

「基督は自由だつた。佛陀も矢張り自由だつた。そして孰れも世の罪を自ら背負つて、進んで地上生活の牢獄に入つたのだ。それより先へは誰も往つた者が無いよ、誰も。而も君は——我々は——あゝ喋つても何にもならないな——我々は悉く同胞に對する義務から自由にならうと欲してゐるのさ」

最後にトルストイに於いては信仰は愛の大なるものに過ぎない。深く愛せばそれは信仰に變る。人が眞實な戀をする時にその對象があらゆる人のうちで最もいゝ人となる。そして批評を絶した神のやうなものとなる。

無信仰なものは愛し得ないといつてゐる。

メエテルリンクの象徴的神祕思想

Maurice Maeterlinck (1862. 8. 29生)

(一) 宗教觀

一八八九年メエテルリンクは戯曲として處女作「マレエヌ姫」を書いた。その時詩人はまだ二十七歳の青年であつた。思想の豊麗な若き詩人はその友人達の中にこそ知られてゐたけれども、未だ人の

省みるところではなかつた。

彼は「マレエヌ姫」をその友人の手助けを借りて謄寫版で只卅五部だけを刷つて知人に頒つたのである。

翌年 *La Jeune Belgique* 紙上に批評せられて「現代の演劇の歴史に於いて一時期を劃すべき重要な作」と呼ばれ、同じく同年八月廿四日の *Figaro* 紙上にオクダブ・ミルポーの有名な批評が載つた。「余は何らモリス・メエテルリンク氏に就いて識るところはない。何處からの人か、如何してゐる人かも知らない。或は又齡とつてゐるか若いかな、富んでゐるか、貧しいかも全るで知らない。余にとつては全く未知な人だ。けれども余は彼が一つの傑作を創作した事を知つてゐる。しかもそれは近頃の新進作家が世間に吹聴される様な際物の傑作と伍する様なものではない。賞讃すべき眞の永久的な傑作だ。彼の名聲を不朽にするのに充分な傑作だ。美と偉大とに飢ゑたる人々を呼び起し、その名を祝福せしむるに足る傑作だ。刻苦せる眞の藝術家がその熱情に驅られし時に屢々創作を夢想せしが如き、又は現在まで彼らの一人だも創作し得ざりし傑作だ。簡単に言へば、モリス・メエテルリンクは現代の天才の最大の勞作を我々に提供した。敢えて言ふならば——沙翁の最も美はしきものゝ孰れよりも美に於いて秀れてゐる。

その勞作こそ「マレエヌ姫」といふのである。」

このミルポールの激賞は若きメエテルリンクをして世に識らしむる喇叭の響であつた。過分の褒め言に衷心慚愧たらざるを得なかつたけれども、彼をして深く自重せしめたのである。

「マレエヌ姫」を読むものは直ちに沙翁の影響の著しいことを思ふであらう。「マレエヌ姫」の劇の結構は全く沙翁のもの、「ハムレット」や「ロメオとジュリエット」などの綜合である。しかしメエテルリンクはたゞ沙翁の着物を借りたに過ぎない。そして彼の初期の厭世的な運命觀を描寫したのである。

特に沙翁と違つてゐるのは、ロマンテックな象徵主義の空氣が賑々として流れてゐることである。あまり非現實的であるほど象徵派の書き振りである。けれどもその中には口にし難い美しいものがある。マレエヌ姫の殺害される時に一莖の百合の挿花が倒れたといふあたりそのよき例である。マレエヌ姫それ自身若きメエテルリンクが表現しようとしてゐる内的な心靈の象徴に外ならないのである。マレエヌ姫に於いて見る心靈の姿は露の重みにもえ堪へない花の様に脆い可憐な乙女である。そはメエテルリンクの初期の思想を代表してゐるのである。斯る心靈の象徴としての女性は次第に發達してモンナ・パンナやジョアゼルやマグダラのマリヤの様な運命に打勝つ意志の強い女性に變るのである。かゝる變化は一步一步確かりした進み方で、少しも一足飛びのところがない。メエテルリンクは自分

の實感を一步一步育てゝ往つた痕がはつきりしてゐて、少しも曖昧なところがない。その點では典型的な人といつてよからう。

この戯曲の中で既にメエテルリンクの宗教觀が暗示されてゐる。第四幕の第四景にて毒婦のやうなアンヌ王妃が、ヒヤルマル王にマレエヌ姫を暗殺することをすすめてゐる場面がある。その時七人の修道女がその部屋の前を次のやうな連禱歌を唱ひつゝ過ぎてゆく。

「——あはれみたまへ、わが神！ さきはひたまへ、われらを。——神よきゝ入れ給へ、ねがひを。
——なべてのことがより。——はなたせたまへ、われらを、わが神！——なべての罪より。——放たせたまへ、われらを、わが神——み怒りより。放たせたまへ、われらを、わが神。——思ひの外のはたどしき死の手より。——放たせたまへ、われらを、わが神——まがつびの惑はしより。放たせたまへわれらを、わが神。——淫らなる思ひより。——はなたせたまへ、われらを。わが神。——怒りより、憎しみより、なべての欲しいまゝなることがより！——はなたせたまへ、われらを、わが神。
——嵐より、はやてより！——放たせたまへ、われらを、わが神。——とこしなへなる死の手より——はなたせたまへ、われらを、わが神。」

恚うした祈禱の中に王と王妃とは不義のたのしみと、世にも恐ろしい罪惡をたくらんでゐるのであ

つた。恚ういふ祈禱といふものゝ何んの効もないことを象徴的に示してゐる。

同じやうに第五幕第四景に於いても、マレエヌ姫が王妃に絞殺されて仕舞つたあとで「マレエヌさま！ マレエヌさま！ まあマレエヌ様はお可愛さうに！……さあ、手をかして下さいまし」といふ乳母の悲歎に對して例の七人の修道女がやつて来て「何とも仕方がありませんわ！」姫さまは冷たくなつていらつしやいます！」「硬くなつていらつしやいます！」「お眼を塞いであげなさいまし！」「お眼は凍りついていらつしやるのです！」「お手を合はしてあげなければなりません」「遅すぎました！」「さうして侍女の一人は「おゝ！ おゝ！ おゝ！」と悶絶する。

恚うした七人の修道女の言葉は疑ひもなく既成宗教といふものゝ無力無感情を暗示したものである。續いて翌一八九〇年に「群盲」をかいた。この小戯曲の主題は現代の宗教といふものが人心を指導するに足らないものであることを示したものである。

幽遠にして星光燦然たる蒼空の下、古き北方の森。——その中に、深更、長き黒色の外套を纏ひたる一人の老僧が坐してゐる。其の胸と頭をやゝそらせて、巨大な洞ろな柏の幹に身を凭せて宛も死せるやうに不動である。老僧の右手の石の上や樹の切株の上には六人の盲人、左側の仆れた樹の上に或

は岩の角には六人の盲女が別れ別れに坐つてゐる。盲人達は絶えず祈つたり、泣いたりしてゐる。

「あの人はまだ歸つて来ないのかい。」

「もう養育院に歸へる時刻だ。」

恚うして自分らを連れて来た老僧の來ることを待つて居る。「話をしてゐないと恐くなるよ。」

「あゝ眼の見えぬものゝ上に憐れみを垂れ給へ！」

こゝで年若い盲女が一人の盲人と語る言葉は神祕象徴的で美しい。

第一の盲人。「ぢやあお前は何處から來たんだ。」

若き盲女。「妾、話すことも出來ないのよ。どんなに話していいのだから分らないわ——それは此處から随分遠いんだもの、海に向ふ方なの、大きな國から來たのよ、……妾は唯、微候しほしでお前さんに話すことが出来るだけよ、妾達は眼が見えないんだもの……妾は長い間、諸方を廻つたの……だけれども、妾、太陽も、水も、火も、山も、顔も、珍しい花も見つたわ……此島には、そんなものは一つもないわ、そんなに此處は、大層陰氣で寒いんだもの……妾は眼が見えなくなつてから、二度とあんな匂ひを嗅いだ事はないわ、けれど妾は両親も見つたし、姉妹も見つたわ、……あの時は、何處に居たか知らないほど年が若かつたの……その時分はまだ、妾濱邊で遊んで居たのよ、……でもまだ一度見た事

はよつく覺えて居てよ、……或日妾は、山の絶頂から雪を見たの……其の時分から、妾は自分の不仕合になつて來ることが、自分でも見分けが付くやうになつて來たのよ。」

第一の盲人。「一體それはどういふ譯だ。」

若い盲女。「今では、時々、聲の調子で不仕合せな事を見分けられるやうになつたわ、……それに、考へ込まない時に、却つて明晰ひつきりと思ひ出すことが出来るのよ。あの人は妾の眼が見えるやうになつて何時かは此島から出て行かれるだらうと被仰つたの……。」

第一の盲人。「俺達も皆な此島を出て行き度いもんだ。」

第二の盲人。「俺達は、何時迄も此處に居るんだらうかな。」

第三の盲人。「あの人は随分年を取つて居る。もう俺達を癒して呉れる時はあるまい。」

若い盲女。「妾の瞼は塞がつてるけれども、眼の生きてるのはよく分る。」

第一の盲人は「俺の眼は開いてゐる……。」

第二の盲人は「俺の眼は開いたなり睡るんだ」といふ。

慙うした十二の群盲は、一般の智見の啓かれぬ民衆を象徴したものである。

そのうちに手探りしてみるとある死人の顔に觸はる。それはよくしらべてみると自分らを連れて來

た老僧であつた。

「神さま！ 神さま！ 一體、私共を何うなさる思召しで御座いますか。」

「この人は一言も言はないで死んで了つた。」

かくして盲人達は往くにも歸るにも案内者はなく全く途方にくれてゐる。例の若い盲女は「何だか急に眼が見え相に思はれたから……。」と自分の手を眼に當て、みるけれども、自分で自分の眼をひらくことは出来なかつた。現代は眞の宗教的指導者を失つてゐる。それは實に危険な事であつたのだ。そのうちに雪模様となり、波濤の音は物凄くなつてくる。慙うした絶望的な中にたゞひとつ眼の見える者がゐる。それは狂氣盲女の抱いてゐる小兒であつた。さうしてゐるうちに何か異様な聲音が彼らの方へひびいてくる。

年長の盲女「後生だから少時靜かにしてお在よ。」

若い盲女「足音が漸次だんだん近寄つて來るわ、漸次近寄つて來るわ、お聞きよ！」

（狂氣女の兒、突然暗中に泣く。）

年長の盲女「子供が泣き出した。」

若い盲女「あの子は見えるんだよ、見えるから泣くのだわ……。」

(女は腕に子供を抱き、遙かに足音の聴ゆる方に行かんとする。他の女、憂はしげに彼女の後につき来り、その女を取りまく。)

「妾は遇ひに行くんだよ！」

年長の盲人「氣をおつけよ！」

若き盲女「まあ何て泣くんだらうね、——どうしたの、——泣くんぢやないのよ——恐かないわ、何にも怖いものはないのよ、妾達は皆なお前の周りに居るのよ——何を見たの——何にも恐かないのよ、——泣くんぢやないの、——何を見てるのよ、——さ、お話し、お前は何を見て居るんだよ。」

年長の盲女「足音が漸次近くなつたよ、そら、そら！」

年長の盲人「落葉の中に衣摺うすづの音が聞えるぞ。」

第六の盲人「あれは女かい。」

年長の盲人「あれが足音なのかい。」

第盲一人「枯葉に波が押寄せて來てるんだ。」

若き盲女「いゝえ、いゝえ、あれは足音だよ、足音だよ！」

年長の盲女「今に判るよ。枯葉の音を聞いて御覽。」

若き盲女「聞える！ 聞えるよ、妾たちの傍に！ そら！ そら！ 何をお前は見てるの、何を見てるのよ。」

年長の盲女「足音のする方を見てるんだよ。——御覽、御覽、妾が彼方へ向けても、すぐ向き直りますのよ……、見えるんだよ、見えるんだよ、見えるんだよ、——何か變つたものを見てるに違ひないわ……。」

年長の盲女(前に進み出て)「よく見えるやうに、子供を持ち上げて御らん。」

若き盲女「退いておくれ、退いておくれ！ (子供を盲人共の中に高くさし上げる) 足音が私達の中に止つた。」

年長の盲人「此處に居るよ、俺達の中に居るよ。」

若き盲女「貴下は何人ですの？」

年長の盲女「妾達を憐んで下さいまし。」

——沈黙。子供激しく泣く。

この最後は何か恐しいものを暗示してゐる。大いなる審判であるか、近代的なソドム、ゴモラであるか、戦争であるか、革命であるか、それは知らない。ともかく恐ろしいものがやつて來る事を、ほ

んとうの不安さをもつて描寫してゐるのは事實である。

「我等が到達した現代は人類の進化の歴史上に於いて、殆んど、先例を見ないやうな特殊の時代である。

今や人類の大部分は過去二千年間、生命を托して來た、宗教を漸次抛棄しつゝある。

宗教といふものが滅亡することはない。羅馬帝國の末期の史家は Paganism の死を我らに示してゐる。しかしこれまでは壞れゆく宮から新たに建つる宮へと移り來つた。然るに我らは我れ等の宗教を棄てゝさて何處へも目指すところがない。これは新しい現象だ。我我はその中にゐるのだ。これから我々はどうなりゆくことであるか」

これは一九一四年の八月世界的大慘劇たる大戦争の幕が切つて落されるに先立つこと九ヶ年ばかりの頃、メエテルリンクが「我等の道德の不安」といふ題のもとに述べた論文の一節である。

(一)メエテルリンクの心靈に就いて。

メエテルリンク神祕思想の中樞をなすものは神の思想でなく心靈である。多くの神祕思想家は神を出發點とするに反して彼は殆んど神といふことを説かないのである。

メエテルリンクの神祕思想一八九六に出た「貧者の寶」に於いて最も美しい表現を見た。この一卷

はプロテイノスのエネアーデンに更に一卷を加へたやうなものである。しかし自分はこゝで「貧者の寶」の解説を試みようとは思はない。英譯も邦譯も容易く得られることであるから讀んでみられんことを薦める。若し同書をよんで興味を惹かれなかつたら、説明をきいても空しいものであると思はなければならぬ。

こゝにはたゞ一九〇〇年に出了た戯曲「ベアトリス尼」を中心にして彼の心靈に關する一般を説いてみたいと思ふ。

この戯曲はスキスの作家ゴツド・フリード・ケラアの「聖母と尼」を改作したものであるが、ケラアのもものは家庭生活の祝福せらるべきものであるといふ思想を現はしたものでらしい。山間の尼寺に居つた一人の尼は自分の生活に空虚を感じ、この世に對する充されない憧れの爲めに色々な空想を描いてゐた。

彼女は林のさすらひの折かと思ふが、ある國王にひろはれてゆくのである。さうして彼女は王妃となつて七人の子を生んだ。しかし憊うしたこの世の生活を送りながら、彼女はまたもとの尼寺が戀ひしくなつた。そこに居る自分の姉妹だち、朝夕仕へた聖母、彼女はそこを慕つて再び家庭をのがれてもとの尼寺へ往くのである。しかし彼女はこんどはまた自分の家にのこした夫や子供らのことが氣に

かかつて仕方がない。いつも彼女は彼らの幸福を祈つてゐたが、しかし彼女の心はまた憂鬱になつて往つた。

ある年の聖誕祭の日であつた。彼女の多くの同僚たちはそれぞれ眞心をこめて聖母に贈物を献げるのであつた。誰も彼も自分こそ最上の贈物を送らうと競ふてゐるのであつた。しかし彼女だけは悠々としていよく當日になつても何んの贈物をも調へることが出来なかつた。

彼女は聖誕祭が來ても心は慰まなかつた。けれども祝祭の最中に突然尼寺の扉は開かれて、七人の雄々しい騎士が訪れて、敬虔の溢れた態度で忝々しく聖母に禮拜した。彼らはその母なる尼を尋ねて來たのであつた。

この祝日に最も貴い献物をしたのは彼女であつたと言はれるのである。

メエテルリンクの「ベアトリス尼」はケレアのものとその結構がよく似てゐるけれども、その主題は彼の思想殊に心靈を象徴化したものである。

美しいうら若いベアトリス尼は尼寺の聖母像の前によすがら跪いて哀しさを悦しさを咽び上げてゐる。

「どうしませう聖母さま、私は生涯靜かに焦うして貴女のみ傍に仕へたく存じます。決して決して貴

女を離れたく思ひません。けれどもあの方が今夜は戻つてまゐります。さうしたらわたしはあの方に何んといつたらいいのでせう。わたしは何もわからないのでございます。

貴女のみそばにまゐりましてからもうまる四年になります。その頃はほんの子供でございました。そして今も尙わたしは何も知らない子供でございます。どうすればいいのでせう。この胸を痛める苦しみ、それともこの幸福をば院主さまにも他の姉妹たちにもお訊ねする事が出来ないのでございます。人の話によると結婚して男を愛するのは許されてゐるとかまうします。またわたしだけは罪の誘惑や男のかける畏の度を度々聞かされてまゐりました。しかしあの方に限つてそんな事はないと思ひます。あの人は信心深い賢い方でございます。あの人の眼は祈りに跪く幼児の眼よりも優しいのでございます。先夜あの方はあなたの足もとに跪いて祈りました。貴女はご覽になりませんでしたかしら、貴女の息子であるかのやうに見えました。あゝどうすればいいのでせう。三日といふもの焦うして跪いてゐる憐れな女でございます。わたしがあの方の嘆願を拒むなら、あの方は死ぬと誓つて居ります。さうしてその様な事が起りかねないとも思はれるのでございます。おゝ聖母さま、どうすればいいのでせう。あれ、お聴きあそばせ、馬蹄の音が！ あの方がもうやつて來たのでございます。どういたしませう。聖母さま、わたしまゐりませんわ、参りませんわ、貴女の思召次第で！」

ベアトリス尼を戀してゐるプリンス。ペリドールは尼寺の扉を叩く。夜はまだ未明である。

ベアトリス尼は思はず立ち上つて扉へ駆けよる。そして彼のいふまゝに扉を開ける。長い青の外套を着たペリドールが現はれる。さうして彼女を抱擁して接吻しようとする。しかし彼女はそれを手で拒みながら彼の胸の中に倒れかゝる。

ペリドールは彼女の顔を包んでゐた面纱を徐ろにはづす。ペリドールは思はずその美に打たれて

「おゝあなたはどれほど御自身が美しいかといふことをご存じなかつたのです。僕も知らなかつたのです！ 僕はあなたを見たと思ひ、あなたを愛してゐると思つてゐました！ さうだ、たつた今まであなたは僕の子供らしい夢の中の最も美しい人だつた。僕は今、この醒めた眼に、あなたに觸れる僕の手は今あなたを見出した僕の心に、あなたはあらゆる最も美しいものの中でも最も美しいのだといふことを知つたのです」と呼ぶ。さうしてベアトリスの法衣を取りのけて、携へて來た高價な衣裳や眞珠の頸飾などを着けてやる。

ベアトリスはたゞ自分の法衣と面纱とを拾ひ上げてその中に顔を埋めてすゝり泣く。

「いゝえ、いゝえ！ 行かれませぬ——わたし行かれませぬ、(聖母の足もとににじりよつて) おゝ、聖母さま！ わたしもう争ふことが出来ませぬ！ もうちつともお祈りが出来せん！ いゝえわたしは

只泣くことが出来るだけでございます。わたしはこれほどまで、あの方を愛してゐようとは、また、

こんなにまで私は貴女を愛してゐようとは知りませんでした。おゝ、お聴き遊ばせ、ご覽遊ばせ！

わたしがあなたにお願いいたしますのは、暗示、暗示でございます。み手の暗示、あなたの微笑みなさる眼の暗示、それ以上何もないので御さいませ！ わたしは何も知らない小さな小娘でございます………あなたは何事によらず、殊にこんな折には憐れみ深い方であると聞いて居ります………」

「お願いなさるのが聖母様でお赦しなさるのがあなたではないのですか。僕の眼にはあなた方がごつちやになつて二人の姉妹のやうに見えるのです。あなた方の間には愛があることを僕は知つてゐます。」とペリドールがいふとベアトリスは「人がよくわたしにあなたは聖母様に似てゐると言ひました」頭を擡げて聖母像を仰ぎ見ながらいふ。

ベアトリスは最後まで聖母よりの暗示を乞ふてゐる。

「聖母さま、あなたは何かも御存じでいらつやいます。そしてわたしは何にも知らないのです。どうか聞かせて下さいまし！ あなたが聞かせて下さらなければ、私には決心がつかないのでございます。あなたが暗示さへして下されば唯それだけで充分なのでございます。誰にも見えない様な極く小さい暗示で！ もし貴女の額に眠る灯のなげてゐる影が、ほんの一線でも動きますなら、

たしは出てゆきません！ 聖母さま！ わたしはじつと、じつと凝視しております！ 待つております！」彼女は長い間聖母の顔を見守つてゐるけれども、何も動かないのである。かくて彼女は思ひあきらめたやうにペリドールの接吻を受けて、自分からも返しながらお互に腕をからみ合せて明け方近き世界へと出てゆく。

これが一幕の終りである。

こゝに説明しておかなければならないのは、聖母は明らかにメエテルリンクの意味する最高の心霊の象徴である。プロテイノスで云へば最も神に近きヌース（心霊）にあたり、エツクハルトで云へば神の火花に近いものである。さうしてメエテルリンクは神を説かないでたゞこの心霊をとくのである。最も力を入れて最善の方法を盡してこの心霊を表現しようと努めて居るのである。次にベアトリス、尼は人間の魂を表徴してゐるものである。それはまだ真に目覺めたる心霊ではない。もつと淨化されなければならぬものである。しかしその魂の中には神の火花なる心霊は宿つてゐるのである。

メエテルリンクが心霊や靈魂を表徴するのに女性の姿をもつてしてゐるのは注意すべきである。

古來人は天使を想像するのに女性の姿をもつてした。天使は何であるかは知らないけれども、天使もたしかに人間の心の奥に住む美しい魂の象徴であると思ふ。

「神の國に甦へるものは娶り嫁がす、天の使のやうである。」と耶蘇の言つたやうに、天使とは至高者の子となつた人々の魂を象徴したものである。舊約書の古い文献では天使は神の子となつてゐる。

「衷なる人」甦生した人」といふのは深淺の程度はあるが、人心の奥に秘められたる眞の魂の覺醒した人のことである。メエテルリンクの後年（一九〇九）の作「青い鳥」の二人の子供が幸福の源なる青い鳥を探しにゆく。あれは心霊を探しあてれば、若くは把握すれば眞の幸福が得られるといふことを意味してゐるのである。メエテルリンクは「アグラヴェヌとセリセツト」の中であつたかと思ふが「人の胸は鳥籠で心霊はその中の小鳥のやうなものだ」と言つてゐる。かのチルチルとミチルとが大きな籠を下げて青い鳥を探しにゆくのは、全く心霊の探求である。しかもその青い鳥は外部には何處にも探しえられなかつた。假令捕へても、それはすぐ死んで仕舞ふのであつた。なぜならそれは、實は籠の中にあるのであつて、いくら外界に求めても空しいものであつたのだ。それは凡てのものを外部でなしに自己の衷に見出すべきことを意味したのである。梢から梢に飛んでゐる小鳥はどんなに愛すべきものであるか、播かず、刈らず、倉に收めず、それでも天の父に養はれて睦しく暮してゐる。メエテルリンクは心霊の象徴をば「青い鳥」としたのも面白い。中世紀の聖畫によく天使をば全身小鳥の形にしてたゞ頭だけ幼児のやうな顔にしてあるのを見る。鳩のやうに純白な翅を光の中へ翻へしな

がら飛翔する、同時にまた美しい女性が天使と呼ばれ、そしてそれは人の魂の中に住む心靈の姿である。

一體、魂 (Soul, Die Seele) と云ふ言葉の性はヒブルでもグリーキ、ラテンでも獨佛凡て女性であるのも面白い事實である。魂ほど美を慕ふものはない。貴いものを愛するものはない。恰も愛の爲めに生きてゐる女のやうなものである。

「俺の名はスタニスラウスで、魂の名はアマリイといふのだ」といふある獨逸の詩は興味深い。

實際秀れた美しい女性は鳩の如き柔和さと蛇の如く賢き直覺力を持つてゐる。理智の推理に依らず直感に依つて事物の真相に透徹するのは實に女性の神祕的な美しさである。これがまた女性は魂の本質に近い所以であり、「女性は神に近い」と言はれてゐるのもその爲めである。

ファウストのグレートヘンが惡魔の使なるメフェストフェレスを何となしに嫌惡するのはやはり恠うした女性の美しい直感力を示したものである。あまり説明が枝葉に走つて仕舞ふけれども、恠うしたいゝ機會にメエテルリンクの女性論の一節を抄録しておきたい。

「彼女らは我々よりも一層神に近づいてゐる。そして神祕の清き目醒めには一層心を開いて身を委かせる。

それ故、我々の生活に於いて彼女らの關係する總ての事件は、殆んど運命の源泉ともいふべきものの方へ確かに一層我々を近寄らしめる。……勇者が自分の星の力と確かさとを知るに至るのは彼の頭を女性の胸に載せてゐるそれらの深刻な時間の一つに於いてではあるまいか。そして實際、女性の胸にその休み場を持たなかつた人に、未來に關する、眞の如何なる感じかゞ嘗て來ことがあるであらうか」

「女性は我々には見られない偉大なものゝ覆面した姉妹である。彼女らは實さい我々の周圍に在る無限のものに最も近いのである。……何人も如何に使用すべきかを知らない天から降つた或る寶玉の如き我々の心靈の清き薫りを現世に保存してゐるのは彼女らである。そして若し彼らがこの世を去るならば、精靈が獨り寂しく、荒野の中を支配することであらう。」

「蓋し從來神祕家たちに就いて言はれてあつたことは特に女性らに於いて當てはまるのである。何故なれば、此の世に於いて今日まで、神祕家の感じを保存してゐるのは彼女らであるからである。」

扱てメエテルリンクが女性をもつて心靈の象徴としたのはかくの如く深い意味があつたのである。ペアトリス尼はこの現世と交つてゐる魂の象徴であり、聖母は現世の上にある心靈の象徴である。さうして明かに暗示してゐるやうに聖母とペアトリス尼とは別人ではない。ペアトリス尼は外部であり

聖母は内部である。つまり聖母はベアトリスの内部にまだ眠つてゐる心靈である。

それ故にベアトリスがいくら啓示をのぞんでも懇願しても聖母は塵ほども動かなかつた。彼女の願ひに答へなかつた。ベアトリスはまだ彼女の心靈を呼ぶ資格はなかつたのである。

第二幕と第三幕とはメエテルリンクの思想では平行して起つてゐるものである。

聖母はベアトリアが尼寺からプリンスと駈落ちしてゆくのを優しい心を以て是認してゐるやうである。

前述のドストエフスキイの良心の象徴であるアリョーシヤやムニキン公爵もさうであるが、ベアトリスの心靈である聖母は人間の内心からの要求にはたとひ世の人からみて不道德と言はれるものにせよ、それに是認を與へるやうである。ベアトリスは何も知らない子供だからではあるが、彼女はプリンスと一緒に出てゆきたがつてゐるのは明瞭である。たとひ聖母の體徴しるしによつて彼女を尼寺にとどまらせるとも、それはベアトリスの眞の内心から出た意志ではない。たとひベアトリスが世の中に出て悲惨な運命に弄ばるゝとも他人の意志の奴隷であるよりはましである。やがて悟るべきものを悟るであらう。さうして自分へ戻るべきものは戻るであらう、と聖母は考へてゐるのであらう。少しも命令的ではない。實際聖母は人が罪を犯したがつてゐるときに、意地の悪い監視人として立つてゐる

のではない。捨てられてもひがむことなしに實に遠慮深い善良なものとして表はされてゐる。幾度顧みられず捨てられても腹を立てずに自分を必要としてゐる瞬間には眞に呼ばれ、ばすぐ欣々として出てくるやうに善良さに充ちてゐる。ドストエフスキイやメエテルリンクのみてゐるやうに人間の心靈や良心といふものも本來たしかにさういふ善良なものではあるまいか。

プリンスと駈落したベアトリスは歡樂の夢も束の間で直ちに現實曝露の悲哀に逢つた。心靈の未だ眼覺めない彼女の思慮は淺幕であつた。彼女の出でゆくとときの豫想とは反した。さうして彼女は邪惡なる世の中にいたましく汚され虐げられ苛まれて往つた。

しかし一方彼女の心靈なる聖母は「それみよ」とは言つてゐない。たゞもの哀しげにしかも彼女の罪を身に負ふかの如く、どんなにか美しく尼寺の中にあつてベアトリスの代りになつて立ち働いてゐることか。

「貧者の寶」の神祕道德の一節に「人間が彼の同胞を敵に渡した時、彼女（心靈）は何處に居たか。恐らく彼女は彼から遙か遠い處で、咽び泣きをしてゐたのであらう。そして其の時から彼は一層美しく深刻になつたであらう。」とあるのは恰度聖母とベアトリス尼との有様である。

第二幕ではベリドールとベアトリスとが聖母をひとり残して出て往つて仕舞ふと先刻まで少しも動

かなかつた聖母は「長い、神々しい眠りが終つたやうに蘇生して動かうとしてゐる。それからしづしづと聖母は臺坐の階段を下りて、格子の處まで来て、彼女の華かな着物と、頭髮との上にベアトリスがかけて置いて往つた面纱と外衣とを着てそのまゝもとのベアトリスの姿に變はるのである。さうして蠟燭をともしたり、貧しい人々に與へる着物を入れた籠を持ち歩いたりして悦しさうに立ち働く、さうして次のやうな歌を唄ひつゞける。

「なべての罪にわらははくみす

咽び泣く凡ての魂にも。

星深きみ空よりのみ宥恕こそ

わらははの手には充つるなれ。

もし愛の看護しあらば

いかなる罪も世にはあらじ

もし愛の咽びし泣かば

世に亡ぶべき魂はあらじ

愛はこの世の多岐なれば

ゆくへもわかず迷ふとも

愛の涙はわらはを見出で

かくて再び迷ひ行かじ」

最後の歌の言葉が段々に終りに近づく頃、おづおづと里の貧しい小娘が扉を叩く。さうして櫛の扉の蔭に半分隠れて顔だけ出して覗きながら、驚いて聖母を見る。ここから心靈が如何に美しい言葉や善しい思ひを語るか。

聖母 今日わ、アレット、何故お前、かくれるの、

(狂喜し且つ恐れて、彼女は十字を切りながら近づく。)

アレット どうしてあなたのお衣は、そんなに光つてゐるんでせう？

聖母 夜が明ければ、どこもかも光るのですよ。

アレット どうしてあなたの眼には、そのやうに星が輝いてゐるのでせうか。

聖母 祈る眼の底には往々星が宿るものですよ。

アレット どうしてあなたお手の内にそのやうな光があるのでせうか。

聖 母 布施をする人の手にはいつも光があるのですよ。

アレット わたし、獨りでこゝへ來ましたわ。

聖 母 あの貧しい人達はどこにゐるのだえ。

アレット あの人達は噂を聞いたので、來ませんの。

聖 母 どんな噂だい？

アレット ペアトリス様が、王子様の御馬に乗つて行かれたのを見たつて噂ですわ。

聖 母 わたしがその卑しいペアトリスに似てはゐませんか。

アレット みんなはあの方を見たつて言つてゐますもの——あの方はみんなの衆にお話しをなすつたんですつて。

聖 母 只神様だけはあの人を見もしなければ、あの人と言ふことを聞きもしませんよ。

(腕にその子供を抱いて接吻する)

おゝ、小さい、アレット、今日私が接吻出来るのは、お前の外に誰もないのですよ。さうです。無邪氣はそれを知つてゐてもわたしを裏切りはしないのです。

(子供の眼を覗き込みながら)

かうして見てゐると、何といふ人間の魂は淨いものだらう！ 天使は最も美しいけれども涙を知らない。可愛想な子よ、もういゝよ、もういゝよ！ そらお前の眼から涙がこぼれる。いくつこぼれるか、分るでせう！

(彼女は子供を入口におろす)

けれどもあの貧しい兄弟達は——あの人達はどこにゐるのだらう。アレットや、あの人達のところへ行つて耐へ難い愛の思をすつかりお話し。さあ、向ふへ行つて、急いで來るやうにと告げな

501

しかし一方プリンス・ベリドールと廣いこの世に出たペアトリスはどうなつたかといふに、あれほどペアトリスを愛してゐたといつた、ベリドールは三ヶ月も過ぎると、彼女を愛さなくなり、見捨てて仕舞つた。さうしてあらゆる希望を失つた彼女の美しい肉體は、男から男へと渡されて汚されて往つた。

また尼寺の方では彼女の心霊は、アレットと共にやつて來た里の貧民だちに布施をやつてゐる。

「さあ、みんなこつちへいらつしやい。今は愛の時間です。そして愛とは何でせうか、愛には際限が

ありません。さあ、いらつしやい。皆さん、お互ひに助け合ひませう！ さうしてあらゆる罪をお互ひに許し合ひませう！ そして生涯、幸福と泪とを混ぜ合はせて！ お互ひに愛し合ふのですよ。倒れた人々の爲めに祈るのですよ。

さあ、皆さん、こちらへいらつしやい。一人残らずみんな！ 神様は憎しみがなくて爲した悪い事はご覽になりませんよ、お互ひに許し合ひませう。許しの届かない罪といふものは世の中に一つもありませんからね。」

するとそこへ尼院主や姉妹の尼僧だちが朝の勤行の爲めにぞろ／＼とゆく。尼院主は時計を見て、鐘の鳴らし方が遅いことを責めて三日間の断食と聖母のみ足の前で三晩の懺悔を命ずる。そして尼院主は聖母の前に跪かうとすると、そこには聖母像が立つてゐない。彼女らの恐れと痛哭とは極度に達した。聖母像は盗まれた！ 尼寺が潰がされた！ と哭いたり喚いたりする。遂ひに疑ひがベアトリスに懸る。それにベアトリスの衣の下には聖母の光ある衣が仄見えてゐる。尼院主はベアトリスから外衣を脱がして仕舞ふ。そして我を忘れた暴行を加へると同時に、彼女はベアトリスの頭髪を掩ふ面纱を掴み取る。ところがベアトリスはいつもちつとしてゐて、さながら無感覺のやうである。さうして第一幕の聖母像とそつくりそのまゝの姿に見えるのである。それを見て尼院主や姉妹尼は茫然とし

て言葉なく不思議に苦しい瞬間に襲はれる。しかしすぐ悪魔だ！ 悪魔だ！ と叫び出す。

しかしベアトリスとなれる聖母は彼女らが如何に誓つても無言である。たゞ心のやさしいエグランテイヌが憂はしげに「おゝベアトリスさん、一體あなたはどうなすつたんですの」と訊くと聖母は振向いて彼女にほゝゑみかけるだけである。僧正がやつて来て厳格な聲で命令的に「ベアトリス尼！」と三度呼んでも身動きだにしない。つまりこれは第一幕のベアトリスが聖母に對するやうに魂の中の深い心靈と交渉のない人がいくら聲をかけても聞かれないことを示してゐるのである。

かうしてベアトリスは一方はこの世の汚れにそみ、聖母は尼寺で迫害されてゐる。しかしこれは前にもいつたやうに別人ではない。外なるベアトリスの體は日に日に惱みの中にこの世の罪に汚されてゆく、しかしその衷なる心靈はます／＼光輝を増してゆく。この世の悲痛や、苦惱に耐えるほどその心靈は光輝をましてゆく。ベアトリスは遂に僧正の命令で鞭うたれる。しかし彼女を鞭うたうとした自分の繩の紐に不思議な百合の花が咲いたり圓天井から花瓣が彼女を埋めて仕舞ふほど降り濺ぐ。

さうして聖母をたゞへるアヴェ・マリヤの聖歌が、あたかも目に見えない天使の群によつて歌はれる。

尼院主も姉妹尼らも「奇蹟が！ 奇蹟が！」といつて、今度はベアトリスにあやまる。さうして聖

母はいつのまにか剃ぎとられたベアトリスの外衣や面紗をつけて、いつもと變らぬベアトリスとなつて立働いてゐる。

こゝに見ゆるひとつの著しい思想は心靈は決していかなる罪にも汚されないといふ思想である。肉身のベアトリスはマグダラのマリヤのやうにいかにもましく汚れて往つたか。しかし彼女の靈なる聖母は如何に清淨に美しく立働いてゐるか。

「若し我々の心靈が不意に目に映するやうな形態を取り、そして彼女の總ての面紗をぬぎ捨て、併し彼女の最も秘密な思想を擔ひ、そして彼女の背後に最も不思議な言ひ難き彼女の生の活動を伴つて、集合してゐる彼女の姉妹らの中へ進み出てくるやうになさしめられたならば、如何なる事が起るであらうか。何を彼女は恥しく感ずるか。何を彼女は隠さうと思ふであらうか。彼女は顔赧めがちな少女のやうに、彼女の長い頭髮の下へ、無數の肉の罪を包まうとするであらうか。彼女は其等の罪をば知らないのである。其等の罪は嘗て彼女に近附いた事もなかつたのである。其等の罪は彼女の玉座から千哩も遠い處でなされたのであつた。そして賣婦の心靈でも、彼女の眼には小兒の透明な微笑を浮べて、何の懸念もなく、群集の中を通過するであらう。彼女は干渉しなかつた。彼女は光明が彼女の上に落つる場處で、彼女の生を送つてゐたのである。そして彼女の回想することの出来るのは、たゞそ

の光明の生活だけである。

彼女に歸せらるべき如何なる過誤か、如何なる犯罪か、あらうか。彼女は嘗て叛いたか、歎いたか、偽はりを言つたか、彼女は嘗て惱みを與へたか、涙の源となつた事があるか。人間が彼の同胞を敵に渡した時、彼女は何處に居たか。恐らく彼女は、彼から遙か遠い處で咽び泣きをしてゐたであらう。そして其の時から彼女は一層美しく、一層深刻になつたのであらう。彼女は自分がなさなかつた事に對しては、何の恥しさをも感じないであらう。彼女は、恐るべき殺人の只中に居ても、汚れずにおることが出来るのである。彼女は自分の前で行はれる總ての害惡を、屢々內的の光輝に變へるであらう。此等のことは、或る目に見えぬ原理によつて支配せられてゐるのである。そしてそれ故に、疑ひもなく、神々の説き難い赦罪といふことが起るのである。」

「貧者の寶」のこの「神祕道德」の一節は明らかに戯曲「ベアトリス尼」の主題である。メエテルリントはきつとこの戯曲を草する時に、四年前に著した神祕道德の一節を頭に浮べて書いてゐるらしい。「彼女（心靈のこと）は恐るべき殺人の只中におても汚れずにおることが出来るのである。」といふ一節の爲めに特に淪落し果てたベアトリス尼に第三幕でかういふ懺悔の句を言はせてゐる。

「あゝ！ 天國の天使達！ あゝ！ 天使達はどこにゐるのでせうか、聞かせて下さいまし。何をし

てゐるのでせうか。お話したてではありませんか。ねえ、わたしはもう自分の子供がないのですよ。何故といひますと、三人の最も可愛らしい子供は、わたしがもう綺麗でなくなつた時死にました。そして一番末の子は苦勞させたくないあまりに、ある夜心を鬼にして、わたしが殺したのです。それからといふものは、生れようとしませんでしたけれど、一人も生れませんでした。それでもやはり太陽は輝いて、星はもとの通りに瞬き、正義は眠つて只最も悪いものばかりが幸福に、しかも誇つておつたのでございます。」

ロダン及び白樺派の自然観

Auguste Rodin (1840—1917)

武者小路氏の宗教観はエツクハルトのものにどこか共通點があるやうに思ふ。しかし氏はエツクハルトのたてたやうに神性と神との區別をしてゐない。

武者小路氏はエツクハルトの神を自然と呼んでゐる。氏の自然は我々の眼に映する現象界の自然であると同時に、またその奥にかくれたるニューメノンの世界でもある。天の父は今に至るまで働くと耶蘇がいつたやうに、自然のうちには意志がある。その意志は意識以上の無意識である。武者氏の神

とは眞の人間の事で、耶蘇や佛陀のやうに自然の淨化された部分である。

氏は現象の世界と理想の世界とを區別しないで單純に自然といふ。一つであつて二つであるこの自然を區別すると、その干係をつけるのにスコラ學派的に面倒になるから、たゞ「自然」といつて區別を立てないのであらう。「人間は自然の一部である。自然以外には飛び出せない。」耶蘇も佛陀も自然の一部である。しかし自然を知るものは人間である。殊に自然の中に働く意志を知るものは秀れた人間である。こゝに於いて單純に云はれてゐる自然といふものはみる人によつて異なるものとなり、ある人々は人跡未踏の地に踏み込むやうに實に深い自然を見る。

この深い自然は誰の眼にも映する自然に即してゐるが、俗物には見えない自然である。恁ういふ深い自然はプラトーのイデアの世界、佛陀の極樂、耶蘇の神の國である。極樂や神の國にはもはや不調和はない。

深い自然を見れば見るほどそこには動かさない自然の意志や智慧や愛がある。皮相な自然しか見えないものには判らないであらうが、さういふ自然の絶對的な意志といふものに合致したものは自然から愛される。さうして彼の感ずる主觀例へば耶蘇の主觀の如きは絶對主觀と呼びたいほど不易な深さに達してゐる。

水はこの自然の意志に従つて流れ、樹はこの自然の意志に従つて生長する。しかし自然の意志を知るものは自然の淨化された部分である。

嬰兒には水や樹や小鳥などが自然の意志に従順なやうに實に神祕深い従順さがある。自然の淨化された部分といふのは三十になつても四十になつてもこの嬰兒のやうな従順さを失はない人のことである。

「天地の主なる父よ、われ感謝す。之等のことを智き者、慧き者にかくして嬰兒に顯はしたまへり。父よ、然り、斯の如きは御意に適へるなり。凡ての物は我わが父より委ねられたり。子を知るものは父の外になく、父をしる者は子また子の欲するまゝに顯はすところの者の外になし。」といふ耶蘇の言葉はピッタリすると思ふ。愛する子が愛する父を知るやうに、自然の意志を眞に知るものはその人の意志、即ち自然の意志である。であるから「我が名によりて來るものは幸なり」と云ひ、「汝らが我が名によりて順ふことは、我みな之を爲さん」(ヨハネ十四の十三)と耶蘇はいつたのである。

ます／＼かけ離れた引照をするやうであるがもう一つ阿彌陀經の一節をこゝに記しておきたい。

「その時佛、長老舍利佛に告げたまはく、是より西の方、十萬億の佛土を過ぎて世界あり。名づけて極樂といふ。その土に佛ほままします。阿彌陀と號す。今現にましまして説法したまふ」と阿彌陀經に記

されてあるが、極樂といふのは明らかにイデヤの世界である。阿彌陀といふ佛はロゴス眞理即ち自然の意志である。「若し人ありて、已に願を發し、まさに願を發して、阿彌陀佛國に生ぜん」と欲するものは……彼の國土に若くは已に生じ、若くは今生じ、若くはまさに生ぜん。この故に舍利弗よ。諸の善男子、善女人、若し信あらんものは、まさに發願して彼の國に生ずべし」とある。淨土に往生するとは眞理を認識することであり心の淨化である。芥子粒ほどの信仰さへあれば、極樂は十萬億のかなたにあるのではなく、みよ、この自然、この心の中にあるのである。即ち娑婆即ち寂光土である。

武者小路氏の自然はロダンの思想に負ふところが多いのであるが、ロダンの自然もまた決してわけもなく會得せられるところのものではない。娑婆即ち寂光土といふ様にロダンのいふ自然もまた凡庸の人々のみる自然に即してはゐるけれども、それらの人々のみる自然と同じではない。ロダンの見る自然だつて、いやな男やいやな女も居れば鼻かけや癩病やみもれば貧民窟もある。凡人にとつて鼻かけは醜い。しかしロダンにとつてはそれから美をにじみ出させることが出来る。凡人にとつて貧民窟は存在しない方がはるかに自然だ。それは彼らがそれを救ふことが出来ず、彼らの心に調和を感じる事が出来ないからである。しかし耶蘇のやうな人にとつては既に彼らを救ふことが出来た。それ故に耶蘇にとつては、貧民窟も生れながらの盲目も不調和不自然ではない。

かゝるものをさへ救ふことの出来る耶蘇を通じて神の榮光はあらはれるからである。

老病死といふやうなものもこの世に存在することは凡人には悪いことと不自然なことに見える。しかし佛陀や基督に於いてはそれらに打勝つ道を知つてゐるから、彼らにとつては不自然ではない。神はこの宇宙に最も不自然なもの、最もあるまじきものを與へたかも知れない。しかしそれを最も自然なもの最も意味のあるものとなす力をも人類に與へてゐるのである。

貧民痛や老病死といふものがこの世に存在しなかつたら、たしかに人間は神を知ることがもつと淺薄になつたに違ひない。であるからたゞ貧民痛をなくなさうとするのみを考へる人は間違つてゐる。なくなすことが唯一の目的であつたなら、貧民痛を片端から焼き拂ひ、生存競争に耐へない劣等人はさつさと去勢して仕舞へば最も早い解決である。しかしそれは神の支配を侵すところの企てである。貧民痛はなくなすことよりも、それらに對する愛を神は人間に要求してゐるのである。人間の愛の努力でなくなるか、なくならないかは人間の權能内のことではない。人間はたゞそれらに依つて深く神を知りさへすればいいのである。深い世界を覗くことさへ出来ればいいのである。この宇宙に存在するあらゆる不自然なもの、不調和なものをも考に入れて、その上で尙ほ且つ自然は完全だ、常に美しいと言へる人でなければ眞の落着きは得られない。自分に調和を感じられるものだけを考に入れて

て、不自然と感じるものには眼を塞いでゐる人には、常にうしろめたさがある。

ロダンがかく言つてゐる。「自然？ 私は今になつて、自然を驚嘆することを知つた。自然は完全なものだといふことを知つた。もし神が私を呼んで「何處か改善してほしい處があるか」と聞かれたならば、私は「すべて結構でございます。かへて戴いては困ります」と答へるであらう。」

「自然は常に美しい。決して醜くはない。もし自然が醜く見えるならばそれは吾人が單に自然を理解しないからだ。さうして多くの藝術家のやうに自然を醜いものと解釋してしまふからだ。着物着た男や白粉ぬつた女は醜い。しかしそれは自然だらうか？ 否それは不自然だ。人が眞に自然を知らうと思ふならば全然自然の内に生きなければいけない。」(武者小路氏の譯「生長」一七〇頁)

自然、不自然といふことはそれ故に、相對的のものである。白粉ぬる女でも自分では不自然とは思はないからするのであらう。その女でも自然に對する理解が深まれば、變にお白粉をぬることは不自然と感じられるやうになるであらう。

深い理解と共にますます、自然は深くなり、廣くなり、調和して來る。自然の中に例外なしに凡てに調和を感じることが出来れば神のやうな人である。凡てを永遠の相に於いてみる神には不調和はない。ロダンが自然をたゞみさへすればよいとはいふものゝあき首にはみることの許されない自然である。

「こつこつと一人でする勉強は、人に先づ辛抱を教へる。辛抱は精力を教へる。そして精力は永久の若さを與へる。永久の若さは専念と熱中とで出来る。其處から、人は生活を見又會得することが出来る。此の微妙な生活をわれわれは自分達の息づまつた精神の人工で不自然にする。自然や藝術の傑作に圍繞されてゐながら、會得しないのだ。あせりながら何も爲ないのだ。立派なもの傍に居ながら盲目なのだ。」(ロダンの言葉)

それで人は各自違つた自然をみてゐることになる。

それもたゞ深さの問題であるが、要するに誰でも接してゐる此大自然の中に動かさない眞や善や、移ろはぬ美をみることが出来なければロダンのいふ「自然」といふ意味は解せられないのである。

「世人はわれわれは感覺によつてのみ生き、外觀の世界がわれわれを満足させてゐると信じてゐます。世人はわれわれはきらきらする色彩に酔ひ、人形を弄する様に形を弄して喜ぶ子供だとしてゐます。これは誤解です。線と色調とはわれわれにとつて隠れたる實在の表徴です。表面をつき通して、われわれの眼は、精神へまで潜り込みます。そしてわれわれが輪廓線を寫し出す時は、内に包まれてゐる精神的內容でそれを豊富にします。」

藝術家といふ名に値する藝術家は「自然」のあらゆる眞を表現すべきです。唯外面の眞ばかり

く、又やはり殊に内面の眞をです。」

みる人の深さによりまた個性によつて一つの自然は違つてゐるのであるから自然といふものの内容は恰もエツクハルトの神性と三位一體との關係のやうに各人によつて異なるものである。勿論個性の奥に普遍性はある。

「良い彫刻家が人間の胴體を作る時、彼の再現するのは筋肉ばかりではありません。それは筋肉を活動させる生命です……生命より以上のもの……力です。力がそれに附與し又傳へるものは優美のことであらうし、烈しい強さの事もあらうし、愛情的魅力の事もあらうし、制し難い激越の事もあらう。ミケランジュはあらゆる生きた肉の中に創造的の力を鳴り響かせた。ルカ、デラ、ロピアはそれを神々しく微笑させた。さういふ様に、どの彫刻家でも、自分の氣質に應じて恐ろしい心や非常にやさしい心を「自然」に寄與してゐるのです。

風景畫家は恐らくもつとさうでせう。彼が宇宙的靈魂の反影を見るのは唯活動してゐる生物にばかりではない。樹木や、籐や、野原や、岡にです。他の人々にとつては森や地面に過ぎないものが、偉大な風景畫家には廣大無邊なもの、顔としてあらはれるのです。コロは樹木の頂きに、平原の草に、湖の鏡に、まき散らされた「善良」を見ました。ミレは其處に悩みと天命に讓る事とを見ました。刊

る處で偉大な藝術家は自分の心靈に答へる心靈の聲を聞きます。君は何處に此れ以上宗教的な人間を發見しますか。」

それ故にほんとうにみる、といふことは一種の創造である。(ロダンは彫刻に獨創はいらない。生命がいるとはいつてゐる。)創造といつてもオリヂナリチイはたゞ神にある。たゞそれをみさへすればいいのである。

キリストは我は我が心のまゝを語るにあらず。父のみ心のまゝ、父のところにてみしまゝ、きゝしまゝに告げるのであるといひ、自分はたゞ父より遣はされたものに過ぎないといつたやうに、美をありのまゝにみることの出来る人、増しも減らしもせずに眞實をみることの出来る人は、神より來りし創造者である。エツクハルトが「この小さな指があらゆるものを造つた。」といつて告發されたが、しかしそれはある意味に於いて眞理である。ロダンはどうして眞實をみることが出来るかに就いては辛抱強い愛であるといつてゐる。

「——本當です。それに其の力、愛の力はあらゆるものを創造しました。藝術をも。宗教をも。此れは世界の心棒です。萬物を凝視する事、及びそれに美を感じる事、其處に幸福がある。どうして其れ以上望めませう！が若い人達は氣まぐれです。彼等は自分の若さを樂しむ事を知りません。彼らは然

を持ちます。絶間のない不安を。此の「自然」については彼等は其の光輝をちらりとすらも見ない。

もつと外のもの、夢や、お祭を欲します。「御身(ミロのヅキナス像)の中に神性の在るのは其は御身を彫刻した者の自然に對する無限の愛である。他の人達よりも熱心で、殊に辛抱強い彼は、他の者の懶惰な手には重過ぎる其の被幕の一隅を掲げ得たのである。」

バン・ゴツホもまたロダんに劣らずに自然に對して辛抱強い熱愛を抱いてゐた人である。

「自分は今日又新規に小さな小兒の搖籃の素描を試みて彼方此方に色彩をおいてみた。きつと自分は執拗い程かう云ふ小さな搖籃を百邊も二百邊も描くだらうと思ふ。又描ける氣がしてゐる。」

「晩かれ早から、自然に對する愛着の心は何時も藝術に興味を持つてゐる人々に反響する所がある。

「手短かに云へば人が自分の作品を見て『ウム、此の男は深いものを感じてゐる。そして微妙な感じを持つた男だ』といふその位まで行かうと思ふ」

「自分の仕事を追求して行く力が有れば、自分は早晚自然から直かに聖人や聖女の像を描く。」

プロテイノスやメエテルリンクの説くところの心靈は何ものにもまして美をほしがるもの、また二本の棒切をも十字架にくみ合せて無限の美を作り出す本能に驅られてゐるものであるが、ロダンは値

統的の神祕家のやうに靈魂の區別などをたてないし、又特殊の心靈をも説かないけれども、プロティノスやメエテルリンクの説くやうに美を愛する事は同様である。

「美の感情はなくてはならぬもの、不滅のものである。讚嘆する機能を自分の内に實に強く感ずるので、此の事を確信する。此の機能はすべての人が自分達の内に持つてゐる。睡る事はあらう。又眼が覺める。」

私とても、いつでも此の眞實を知つてゐたのではない。此れを自分に目覺めしめた力にどれ程私は感謝するか知れない。今日は空氣も花やぐ春の朝、追憶が私を連れて過去を歩ませる。私は自分に生命の趣味を興へ又其の秘密を教へてくれた長い楽しい研究の事を思ふ。

何處から此の恩寵が私に來たか。

最初森林の中に長い散歩が、私に空を發見させた。それ迄は、毎日此の空を見てゐると思つてゐたのだ。が、或日はじめて、私は其れを見た。

それからモデルも。活きたモデルは、私に話す事もなく、私の内に感激を生ましめた。私に忍耐をくれた。此の花の中の花、人間の花を會得する喜びを私に興へた。私の讚嘆は以來常に高まり、大きくなつた。私の觀察機能の鋭くなつたのは、稀な烈しい愛情のお蔭である。又大地が其の華やいだ魂

を地表に送つてわれわれの眼を奪ひ、われわれを誘惑する今日のやうな春のお蔭でもある。

私にとつて、私が自分の愛を自然に話しかけ得る職業を持つてゐるといふのは何といふ幸福だらう——おお此のモデル、此の生命の殿堂。彫刻はその最微の肉づけ、甚妙の線、最初人が最もまぎれ易いと思ふものさへ譯出する事が出来る。そして其の最小の破片は既に傑作全體である。そして彼の顔には尊い魂、力、新鮮、優美が、特に愛する住家のやうに、われわれの讚嘆の場所のやうに寄り集る。」

次にロダンの自然崇拜に就いて少し述べておきたい。

「エルテルの悩み」の始めの方に泉のことを美しく記してゐる。

「私はどんな日でもここで一時間は暮す。すると町から娘たちがやつて来て水を汲んでゆく。一體水を汲むといふ事は一番罪のない仕事でしかも一番重要な仕事だ。昔は國王の姫様達でさへ御自身でこれは爲されたといふがね。私はここに腰をかけてゐると、何だかあの家長制度時代のおもかけがありありと浮んでくるよ。これらの祖先が皆泉のほとりで近づきになつてやがて婚禮をする段になる様なぞが。泉のまはりにはいかにも慈仁な人々の靈がさまよふてゐるやうだ。かういふ情味を感じない人は、苦しい眞夏の旅の後に、清冽な泉のほとりで蘇つた心持がした事は無いに違ひない。」

古代の人たちは植物や巖石や山岳や泉などの自然をそのまま崇拜した。宗教學者はそれを「自然宗教」と呼んでゐる。さうして自然物そのままを崇拜する原始的な素朴的のものと、かゝる自然物の背後に靈の存在を認めて崇拜する進んだものとの區別をしてゐるが、自然崇拜は太古に於いてもたしかに美しい人間の宗教心の發露であつたに違ひない。

舊約書にもベエルシバの泉やモレの檜木などみな自然崇拜の痕跡である。原始の人々は物と靈との區別を立てることなく湧き立つ泉や、燃えのぼる火はそのまま生きてゐるものであつた。日本書紀に「草木皆よく物言ふ」とあるのは美しい古代人の自然に對する親密さを示してゐる。私の知つてゐる範圍ではドストエフスキイの「變人の夢」の中の男が述べる言葉は自然崇拜に關しての典型的な言葉である。「彼らは自然、土地を、海を、森を、讚へた。彼らは人の心から浮び上り、そしてその心を感動させるやうな歌を各自のために作ることを好んだ。」かういふ自然讚美はヘブライの詩篇にも深い實感をもつてうたはれてゐるが、變人のかたる次の言は實に深い原始人の神祕なる活物教である。

「私は、彼等がその樹々を見てゐるその愛の深さを理解する事が出来なかつた。全く恰も彼等が其の仲間同志で話しをしてゐたかのやうであつた。そこで彼等は、その樹々と話をしてゐた。と私が言つたにしても、恐らく間違ひでは無かつたらう。さうだ、彼等は彼等の言語を見出してゐた、そして、

その樹々はそれを理解したのだと私は確信する。同じ様に彼等は、すべての自然を見てゐた——彼等と共に生息してゐた動物共は、彼等を攻撃するやうな事はなく、彼等を愛し、彼等の愛に服従してゐた。彼等は私に多くの星を指して、それに就いて、私には理解出来なかつた事を何か云つた。しかし私は、彼等が、或る方法で天上の星と接觸してゐたのだといふ事を確信する。その連結にしても單に思想の上ではなく何等かの具體的な方法で。おゝ、彼等は、私にそれを理解させようとは試みなかつた。そんな事をしらずに彼等は私を愛した。しかし私は、彼等の方では私を決して理解しまいといふ事を知つてゐた。それ故私は、我々の地球に就いては殆んど一語も彼等に話さなかつた。私は、彼等の面前で、彼等が住んでゐる土地に接吻した丈けであつた。そして私は、言葉なしに彼等を崇拜した。彼等はそれを見て平氣で崇拜させてゐた。私が彼等を崇拜することを少しも恥しいとは感じてゐなかつた。何故なら、彼等は、非常に愛してゐたからである。」

ロダンもまた科學の進歩した近代的に於いて深い實感をもつて自然を崇拜することを教へたのである。殊にロダンに於いての特徴は實感の深さである。耶蘇が當時の宗教家から見れば非宗教的であつたやうに、ロダンは非宗教的であつた。しかしそれだけ捕捉し難い「宗教的」といふあるものがおのづから滲み出てゐることを知るのである。ロダンも武者小路氏も宗教的な法衣を着けることが大嫌ひ

なのである。それは耶蘇が習慣的な祈や斷食をしりぞけたのと同じ精神である。

(グゼルはロダンに貴下は宗教的かと尋ねる。)

「——其れは其の言葉に持たせる意味次第です。若し宗教的といふ事が某々の習慣に従つたり、某々の前に平伏したりする事を意味するなら明らかに私は宗教的でない。今の時代にまださういふ人間がありますか。誰が自己の批評的精神と道理とを棄てられますか。

だが、私の考へでは宗教といふものは信經の誦讀とはまるで別なものです。それはすべて説明された事のない、又疑ひもなく世界に於いて説明され得ないあらゆるものの情緒です。宇宙的法則を維持し、又萬物の種を保存する「知られぬ力」の禮拜です。「自然」の中でわれわれの感覺の下に落ちて來ないあらゆるもの、われわれの肉眼でも心眼でも見ることの出來ないものゝ無邊世界の推測です。それは又無限界、永遠界に向つての、窮り無き智慧と愛とに向つてのわれわれの意識の飛躍です。多分夢幻に等しい頼み事せう。だがそれは、此の世から、われわれの思想をまるで翼の生へた様に飛翔させるのです。此の意味でなら、私は宗教的です。

(燃える火を見つげながら)

——若し宗教が存在してゐなかつたら、私はそれを作り出す必要があつたでせう。

眞の藝術家は要するに、人間の中の一番宗教的な人間です。今日私はもう若い頃のやうな信仰を持たないとしても、しかし何物をも否定はしません。何も知らないからです。自分を繞る萬物を見、會得は出來ないながらも讚嘆してゐる此等のものを見ると、自分の上に一つの精神が存在してゐて、あらゆる此の「自然」を欲したといふ事、そして私がそれを崇拜するといふ事は確かに認容出來ます。」

多くの正統派の神祕家は美や、眞實や、神を發見するのに自己の内部に即ち魂に沈潜してゆく。ところがロダンを始めとして近代の多くの人々は魂のことよりも外部の自然にそれらのものを求めて往つた。これは中世紀風の人々は神の藝術である自然に目を塞いで、たゞ魂の内部をのみ瞑想して空虚なものきり見出せなかつた弊害があつたからである。

しかし自然に探ねるといつても魂の内部に求めるといつても言葉の差である。本當に自然に神を探しえた人は魂の内部にそれを把持してゐるのであり、また魂の内部に求めるといつても同胞や自然を離れては得られるものではない。一方に偏してゐる者はいづれも眞を把握してゐるものではない。自然を象徴化したザイスの女神の被衣をかゞげること成功したときに、彼は何を見たか？驚異の驚異彼自身を見出した、とノフアリスが言つたのは意味深いと思ふ。

メエテルリンクはどちらかと云へば心の内部に求める方である。ロダンは自然にそれを求める傾向

が強いといふまでである。

魂を主とする方の人々は自然は自分たちの心の中にあるやうに思ふ方がつよく、自然を主とする人は我々は自然の一部であると感じる方が強いのである。前者は唯神的で後者は汎神的である。福音書を見るならばかゝる相反するやうに見える二方面が、いかに深い調和をえてゐるかを悟るであらう。つまりそこには絶対的ともいふべき深い主客の合一がある。

二千年の往昔に筆を起して久しく説いて來た神祕思想も今ややうやく筆を擱くべきときとなつた。近代の神祕思想は斯くの如く自然の淨化であり、人間の讚美であり、生活の熱愛であり、個性の完成である。一言につゞめるならば神祕の世界とは深い愛のみが覗く世界である。愛の深さに従つて、神祕の濃さは増してゆく。

ブレークは「光を發せぬ顔を持つ者は決して星にはなれぬ」といつたが、愛のない瞳は決して星の如く神祕な光を帯びることは出来ない。

大正十三年六月一日印刷
大正十三年六月八日發行

(定價 金貳圓貳拾錢)



基督教神祕思想

著者

二階堂眞壽

發行者

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
足助素一

發行所

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
叢文閣
振替東京 四二八八九番
電話牛込 二五七三番

印刷所

(印刷入)

東京市神田區表猿樂町十三番地
改文社印刷所
村功

終